

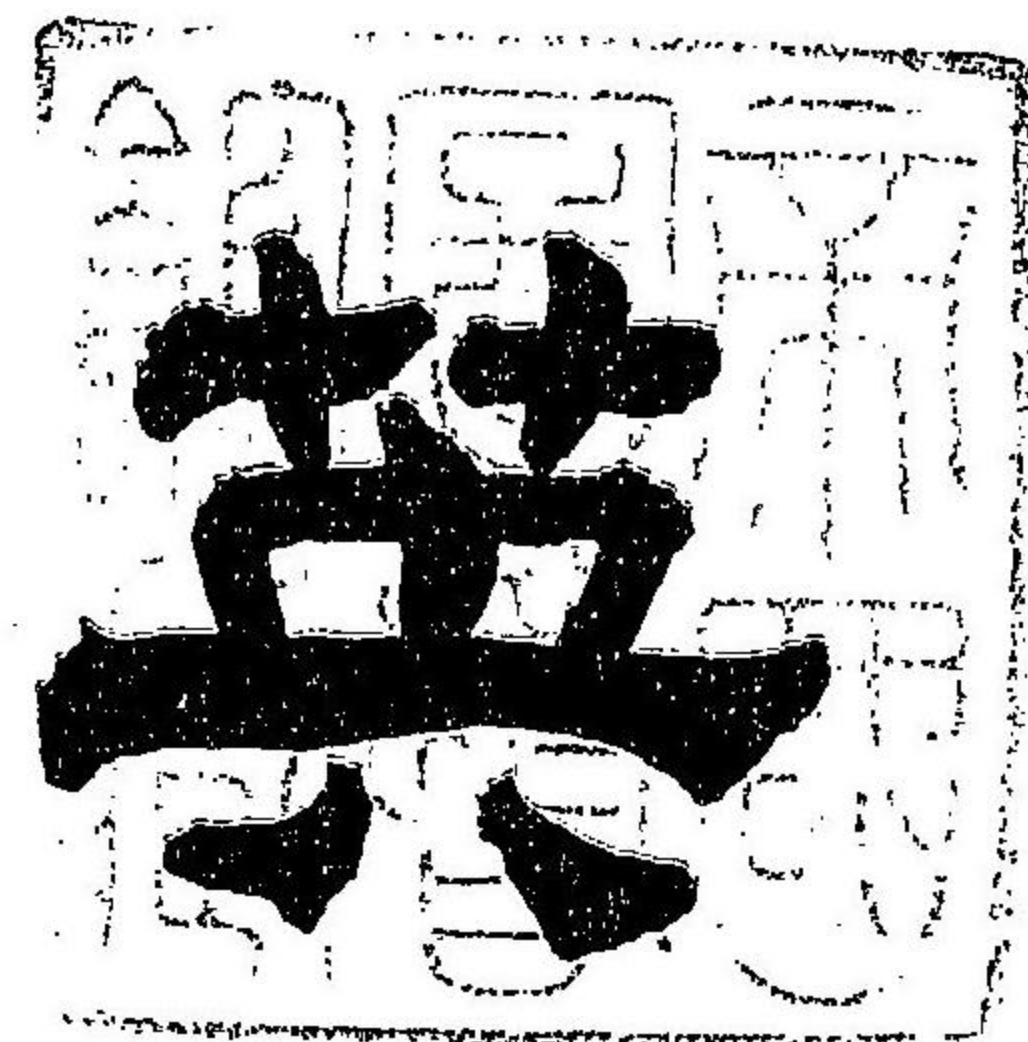
特71

873

清國袁克定題辭
韓國李垞鎔序文

中野天心著

文明堂
寄贈本



英雄觀

附 戰日 役露 從軍 陣中日記抄錄

301773000-7
特71-873

英雄觀
中野 天心 / 著

M39
ACE- 71



特71
P73

嘉仰

英聲風流欽佩

偉著英雄觀一書細羅

人豪表揚駿烈名出風

雨自有千秋矣部人學

識淺陋乃為

不棄見微題句滋益媿

忘不揣樸昧妄獻小詩

書之筆端藉志傾倒

之忱即希

特
中

嘉仰

英聲風流欽佩

偉著英雄觀一書細羅

人豪表揚駿烈名山風

雨自有千秋矣部人學

識淺陋乃蒙

不棄見徵題句滋益媿

恐不揣穉昧妄獻小詩

書之筆端藉志傾倒

之物即希

清悔勿晒為幸專此順頌

日社

中野君殿

名号具

同甲月初九日

特71



輦鼓聲高渤海

東一囊書劍去

從戎戰場周歷

歸來晚撫拾英

雄夾袋中

小詩奉贈

中野君印以為

大箸英雄題辭袁克定

歸景。歲閱五載。足遍三萬里。透得形勢。
明核歷史。東亞將來之事勢。北方未然之關係。
陳懷抱以塵高見。并及天下同志。云爾。

韓國光武七年癸卯六月上浣

在日本國房州

韓國李煥鑑識

英雄觀序

觀天下之大局。然後成天下之大功。識天下之大節。然後救天下之大難也。常能觀大局而未能無識大節。亦能識大節而不能并觀大局。志士之所歎也。既觀大局。尤識大節。并而能兼者。唯吾友中野天心君耳。中野君弱冠立志。有意遠大年。前大奮然航海。遊到我韓國。謁我家祖大人。大院君於孔德刑部。慷慨悲憤。快說東亞現勢。呢呢數千萬言。適中時勢。家祖大人甚哭之。中野君特達先見。常不忘于中。中野君覽發韓國情形。匹馬車之俄氣。旋到長城。俯瞰燕京山河。再出陝西。考黃河之天險。轉赴成都。感漢昭烈之中途。崩殤。欽諸葛之事。君以忠。直向長江。泛舟順下。覽金陵之形勝。查上流之富饒。折向北方。路湖運河。慕夏禹禹民九年治水。達天津。越黃海。歸景。歲閱五載。足遍三萬里。透得形勢。明極歷史。東亞將來之事勢。北方未然之關係。昭然知得。為世指南。其非觀大局者。何以得此乎。中野君特立。亦嘗聞於家庭。而及到日本。交中野君。其甚密。中野君之見義忘身。好公如渴。不苟險夷。不避水火。抱奇材異能。為東亞憂者。無不交結。動心忍性。以至道為己任。堅確不折。為三十年于茲矣。如非能識大節者。何以到此也。近著英雄觀一稿。其所奇想之卓越。文法之活動。須不足言。而及到至誠懇惻。推赤心於四海同志者。庶幾得知中野君之抱項耳。有此特達之精神。而著出此篇。為讀此篇者。宜宜其特達之所以。學力之所由。然後可知此篇之要旨。而在今日觀大局。識大節者。

家祖大人甚哭之。中野君特達先見，常不忘于中。中野君覽竣韓國情形，匹馬車騎，好渡鴨綠，探甯慎氏古跡，察塞外之俄氣，旋到長城，俯瞰燕京山河，再出陝西，考黃河之天險，轉赴成都，感漢昭烈之中途，崩殤，欽諸葛之事，君以忠，直向長江，泛舟順下，覽金陵之形勝，查上流之富饒，折向北方，路湖運河，莫希夏禹氏九年治水，達天津，越黃海，歸吳，歲閱五載，足遍三萬里，透得形勢，明極歷史，東亞將來之事勢，北方未然之關係，昭然可得，為世指南，其非觀大局者，何以行此乎。中野君特立，亦奮聞於家庭，而及到日本，手中野君其甚密，中野君之見，是我忘身，好公如渴，不為險夷，不避水火，抱奇材異能，為東亞自愛者，無不交結，動心忍性，以王道為己任，堅確不折，為二十餘年于茲矣。如非能識大節者，何以到此也。近著英雄觀一稿，其所奇想之卓越，文法之活動，源不足言，而及到至誠懇惻，推赤心於四海同志者，庶幾得知中野君之抱項耳。有此特達之精神，而著出此篇，為讀此篇者，宜宜其特達之所以，學力之所由，然後可知此篇之要旨，而在今日，且觀大局，識大節者，實不可得。宜頌中野君之特觀達識，為世模範也。東亞放濟之策，其將不遠而定乎。聊陳懷抱，以塵高見，并及天下同志，云爾。

韓國光武七年癸卯六月十六日
在日本國房州

韓國 李煥鑑 識

破窓の下太極の靈峯に坐し、宇宙幾多の乾坤を大觀して、深く
膽を心田に鍊り、球上の東亞細亞の天地に念ひを回らせば、現
時の形勢、俟つ所のものは、一個熱性的眞面目底、至誠を以て事
に従ふ邦家を憂ふるの士なり、自個の目的を達せむが爲めに
其手段を犠牲に供せざるの客なり、政權の興奪を事とせず、一
身一家の利害を顧みず、公明正大、亞細亞十億萬の信を得て、事
を執ふ底の大英雄なり矣。

自序

破窓の下太極の靈峯に坐し、宇宙幾多の乾坤を大觀して、深く
膽を心田に鍊り、球上の東亞細亞の天地に念ひを回らせば、現
時の形勢、俟つ所のものは、一個熱性的眞面目底、至誠を以て事
に従ふ邦家を憂ふるの士なり、自個の目的を達せむが爲めに
其手段を犠牲に供せざるの客なり、政權の興奪を事とせず、一
身一家の利害を顧みず、公明正大、亞細亞十億萬の信を得て、事
を執ふ底の大英雄なり矣。

令するの大英雄それ洵に難哉。

若し夫れ順境の平時に在て、小利害の問題に齟齬論争するの騷客は、逆境の非常に際し、其機に遇ふて、大利害を眞個に裁断する能はず。而かも却て平日沈思默笑温厚底の静客にして、逆境の非常に遇ひ、其機に際して、従容之を一刀に裁断するを得。また平日、口角泡沫的に慷慨激越底の論客は、其非常の難局に遇ふや、狼狽々々其爲す所を失ひ、其關門を無事に通過する能はず。却て平日、眞面目無爲底の道客にして、葛藤窟裡の難關を従容逼らず、平易に易々として通過するを得。

要するに大英雄は自ら欺かす又人を欺かざる底の眞骨頭なかるべからず、此眞骨頭あり、而して氣宇は宇宙を超脱し、氣力は乾坤を粉碎す、此氣宇、此氣力ある士にして、始めて能く宇宙

を擔當し、能く乾坤を整頓するを得、以て天空任鳥飛、海澗從魚躍、底の英靈的活手脚を弄して、天下國家を經營經綸する、また何の難きことか之れあらむ。

今方に二十世紀、中外多事多端、殊に亞細亞の天地は暗雲慘澹の刻、寔に士君子の爲す所、亦一にして足らず、之を古の所謂春秋戰國當年の時代に比して、猶一層虎狼の世ならむ乎、故を以て列國互に虎視眈々、其欲逐々底の象あるも、豈敢て怪むに足らむや。

噫、現時、亞細亞の乾坤に、一個靈妙眞面目、本心の一大英雄起るなきか、又胡んぞ區々高襟黨の俗士を要せんや。

余、本來迂にして狂、而かも識者の活眼に照すを耻と爲さず、這の英雄觀を草して公にする所以のものは、たゞ自家先天の胸

底に、是く信じ、斯の如き理現てふ點を、後天の意に任せて、凡筆に弄し去り、弄し來りし耳、故に敢て句格の亂調に改竄を加へず、其草稿のままにして、唯之を大觀自得する所のものは、段章の末にあらずして、蕩直よ各自自家、先天、本地の靈域に在るを、幸に士を以て任ずる底の讀者、請ふ焉を諒せよ。

元來此稿は、明治三十六年の秋、日露の關係、滿洲の山河に危機一髪に及んで、草丁せるもの、實に天下非常の時あり、而かも彼我戰端を開くや、余は直ちに韓國に渡り、滿州に入り、次てまだ凡筆を擧げて、陣頭に起ち、爾來砲煙彈雨の裏に消息せるも、敢て個の英雄形骸を損傷せず、これ幸や不幸か、頃日漸く軍に連れて、家に歸り、圖らず底を探りて、存感英雄觀を出し、これに接するに、陣中日記の一部を抄録し、以て梓に上すこととなり、これ即ち様に依て、胡蘆を畫くを知りての事なり、かく書し居る一刻の余が胸底、必ず將來に日露の戰役を豫期し、徒らに其前途を憂いつ。

明治三十九年六月細雨霏々として、杜鵑幽かに叫ぶ時
虎嘯樓上孤燈の下に在りて
中野天心識す

英雄觀目次

緒論

- ◎ 英雄の天樂 ◎ 英雄の大觀 ◎ 英雄の卑夫 ◎ 英雄の變化 ◎ 治亂興敗と勝機と敗機 ◎
- ◎ 英雄の進境 ◎ 英雄の退境 ◎ 是非と美臭 ◎ 英雄の十三觀 ◎ 英雄の識と凡人の識 ◎
- ◎ 韓文公の健筆 ◎ 英雄の起因 ◎ 英雄出現の天數 ◎ 時勢に應じて英雄の變化 ◎ 眞理置
- ◎ 數 ◎ 聖哲的三英雄 ◎ 支那古代の英雄 ◎ 春秋以後戰國時代 ◎ 秦の一統 ◎ 主客顛倒 ◎
- ◎ 始皇の餘樂と餘憤 ◎ 三國時代より清朝に通ず ◎ 英雄の種類 ◎ 項羽の變數 ◎ 英雄
- ◎ の作用 ◎ 成功者と失敗者 ◎ 雷霆情眼を破る ◎ 歴史を掃き古英雄を觀よ

英雄の天樂

- ◎ 樂天知命 ◎ 宗教家と發芝居 ◎ ソクラテスの天樂 ◎ 太極 ◎ 基督のヨハネ ◎ 眞理は
- ◎ 默中其人獨り知る ◎ 湯屋の三助も亦大丈夫漢か ◎ 摩西 ◎ 上帝より神成を受く ◎ 眞
- ◎ 空に何物ある ◎ マホメット ◎ 達觀活識 ◎ 天樂無底 ◎ 釋兵成道 ◎ 大涅槃 ◎ 大悲悲
- ◎ 天爵天祿天宮 ◎ 大活觀 ◎ 西行法師の天樂 ◎ 英雄は心を捨てず ◎ 偽英雄の無樂 ◎
- ◎ 假令乞食を以て一世を了ることも ◎ 英雄乞食と ◎ 一個職業 ◎ 天樂無爲を以て大
- ◎ 觀するを得 ◎ ソクラテスの言 ◎ 各國の公使は旅藝者 ◎ 猿蓑一掃 ◎ 曾呂新の三十

目次

一文字

●英雄の天職

◎萬物悉く天職あり◎美人と英雄◎揚貴妃か淀君かジョセーピンか◎娼妓女の哀
 観◎文姫か襲婁か◎日英同盟の野合◎虎と兎◎宗朝の悲観◎岳飛の天職◎岳飛の
 詩◎主戦論と平和論◎精忠岳飛◎加封◎乾隆帝の詩◎劉備と孔明◎無名の英雄◎
 ◎アレキサンデル大王◎見や音◎我が父の遺志◎予の天職◎遊魂◎俠客の繩張◎
 小兒の遊戯◎默識大觀

二八

●英雄の識見

◎識見洞明◎無謀無智◎公平無私◎識見の作用◎英雄の真面目◎凡人の不正直◎
 逍遙遊◎八百屋の下女湯屋の三助◎腹間に弄す◎虎象と狐熊◎コロンプスの識見
 ◎信念力◎寢陽の寓居◎三たび草廬に訪ふ◎亮曰く◎善しの一宵◎マルチンルッ
 テル◎九十五條の反政書◎布教の自由◎佛人一茶の清貧◎一旬◎金七兩◎千代尼
 の靈觀◎靈觀識見◎十七世紀歐洲の識見◎識見の本領

四〇

●英雄の至誠

◎堯舜の至誠◎一身一家一國一天下◎道心と人心◎至誠は宇宙に充塞す◎從心

五一

所_レ欲_レ不_レ論_レ短◎靈心至誠◎嗚呼◎至誠の順逆◎山崎闇齋の戒◎至誠の道◎英雄の全
 方◎大事と小事◎眼前と無限◎英雄と小人と薄紙一枚◎フントンの至誠◎左馬
 亮の湖水渡り◎綠水派々◎天谷吉隆の至誠◎關ヶ原を過ぐ◎至誠◎中府二十六章

●英雄の節義

◎節義◎紙製人形◎伯夷叔齊◎一點毛頭の野心なし◎君子善大爲上◎方孝孺の節
 義◎燕賊羅位◎小幡信世の節義◎眼底の節義◎大節義◎節義の種類◎王道と霸道
 ◎節義振ふときは一國興る◎鄭成功の節義◎田横の故事◎貧にして節義を守るは
 難し◎成政と三成◎當年の大剛を以て目せらる◎多くは逆境に妙味を存す◎石田
 三成の節義◎小袖を擲つ

六一

●英雄の度量

◎一天蒼空の靈象◎豆の如き度量◎島國根性◎茶の胸水◎時宗の度量◎度量は横
 着にあらす◎萬載騒々◎無邊の度量◎經基の三十一文字◎那邊に存在す◎笑ふべ
 きは笑ひ◎晋面猿に宵たり◎聖賢君子◎美人皆是骸骨◎枯木寒鴉◎那翁の敗◎ア
 レキサンデルの度量◎武喜的の英雄の度量◎南洲と海洲との度量◎東西の四雄◎一
 念無慮◎片影だになし◎其臨終の一刻◎接吻せり◎臨終の一刻◎詩人ゾーテ育ふ
 ◎ア一然り◎所謂推倒一世◎天子も囚虜も◎形而上より

七一

● 英雄の忍耐

◎ 精義窮神知化 ◎ 孔子は孔子底 ◎ 順境にあつて平氣安し ◎ 非常に忍耐の天素 ◎ 家
 康の訓戒 ◎ 度量と忍耐 ◎ 木村重成の忍耐 ◎ 智勇第一 ◎ 大志は忍耐者により ◎ アル
 フレッド大王の忍耐 ◎ 五十九年中五十六回の戦 ◎ 驕るもの久しからず ◎ 活動中に
 忍耐あり ◎ 丈艸の句 ◎ ビートルの忍耐 ◎ 中興の基 ◎ 履の六三 ◎ 精檢校の忍耐 ◎ 群
 集類集 ◎ 二童相携 ◎ 断腸的忍耐 ◎ 松平織部の評 ◎ 困苦は事業の材料 ◎ 心經百萬卷
 ◎ 四十一年 ◎ 番町で目あき目くらに道を問ひ ◎ 白川樂翁の歌 ◎ 韓愈も苦みり ◎ 一
 點の靈光

● 英雄の氣膽

◎ 唯氣と膽 ◎ 萬人を笑殺す ◎ 氣膽は生殺自在 ◎ 勝敗の機 ◎ 鐵血宰相 ◎ 治世の英
 雄 ◎ 亂世の英雄 ◎ 桐野利秋 ◎ 岩倉右府と利秋との問答 ◎ 妾に寶劍を與ふ ◎ 利秋の
 時勢論 ◎ 金野内閣 ◎ 勝つべき時に勝つ之れ天の數 ◎ 日英同盟の空約 ◎ 同盟の眞想
 ◎ 神武皇祖の氣膽 ◎ 君よ ◎ 神察鬼斯 ◎ 朝鮮大院君の氣膽 ◎ 八道の風雲 ◎ 一夕暮夜
 ◎ 大聲一喝 ◎ 然れども ◎ 激變 ◎ 此照會 ◎ 悲むべき決答 ◎ 大雨漢々 ◎ 赤旗光化門樓
 上に植つ ◎ 敕使再び下る ◎ 王と共に泣く ◎ 道ふ勿れ ◎ 癡妃

● 英雄の經綸

◎ 唯天下の至誠 ◎ 鐵火健畧的の武人 ◎ ア、雖哉 ◎ 書經を繙く ◎ 一九萬變 ◎ 河圖洛
 書と九疇 ◎ 大學と早稲田出身 ◎ 八音五味 ◎ アー雖哉 ◎ ビスマークとカゲル ◎ 英雄
 の品性 ◎ 群雄綱羅 ◎ 氣宇氣力 ◎ 人を知るの明 ◎ 德量 ◎ 曾國藩 ◎ 曾國藩の經綸と奏
 議 ◎ 建議五條を上る ◎ 曾國藩の人物 ◎ 六弟を戒むるの書 ◎ 不佞詩 ◎ 五條の建議 ◎
 五者の成否 ◎ 時勢に切中す ◎ 上下五千載多く其匹を見ず ◎ 勳業世を蓋ふ ◎ 功臣の
 天下 ◎ 倚寄禮遇 ◎ 乾綱弛緩 ◎ 悉く逝く ◎ 字内に植にす ◎ アー ◎ 地圖を靜かに按す
 ◎ 亞細亞の特點 ◎ 亞細亞は八億の人口 ◎ 林則徐の遺言 ◎ 佛國アーランシェー將軍
 の股肱 ◎ 成吉思汗の雄圖

● 英雄の神機

◎ 知幾其神乎 ◎ 靈妙なる哉神機 ◎ 神機の作用 ◎ 神機一轉 ◎ 電光石火 ◎ 只一片英靈
 の神機 ◎ 道心の活眼 ◎ 神機を觀るの英雄 ◎ 外交家は最も能く神機を弄せざるべか
 らず ◎ 神機の妙機 ◎ 天機 ◎ 時に音樂は神機を含む ◎ 霧海笈 ◎ 吹一吹 ◎ 普賢色身 ◎
 祖錄に謂ふ ◎ アー ◎ 英雄の表裏 ◎ 諸法は水月の如し ◎ 風韻に似て風韻にあらず ◎
 洒落 ◎ 表裏 ◎ 眼世 ◎ 解憂經 ◎ 一大安樂 ◎ 道元禪師の神機 ◎ 靜中の神機 ◎ 動中の神
 機 ◎ 動靜一丸底の神機 ◎ ネルソンの神機 ◎ 松平信綱と探幽との神機 ◎ 平凡者流の

欲する底にあらず◎情交と謙信との神機◎十七文字◎天機◎聖哲社會◎宗教社會
◎文學界◎商業家探險家◎兵學家◎機々

●英雄の權數

◎權謀術數◎水玉玲瓏◎小人是を知らず◎權數は天下非常の際◎孫權と曹操との
權數◎進んで赤壁に遇ふ◎火烈しく風猛◎神略の權略◎炭に乗り猫を冠る◎正直
一片◎看よ釋氏看よ孔子◎天下の事皆權數なり◎權數の權數にあらず◎政宗不動
を見る◎不動は本來◎其本源◎康熙の權數◎康熙字典等成る◎賢士文士の權數◎
眞面目に

●英雄の濃情

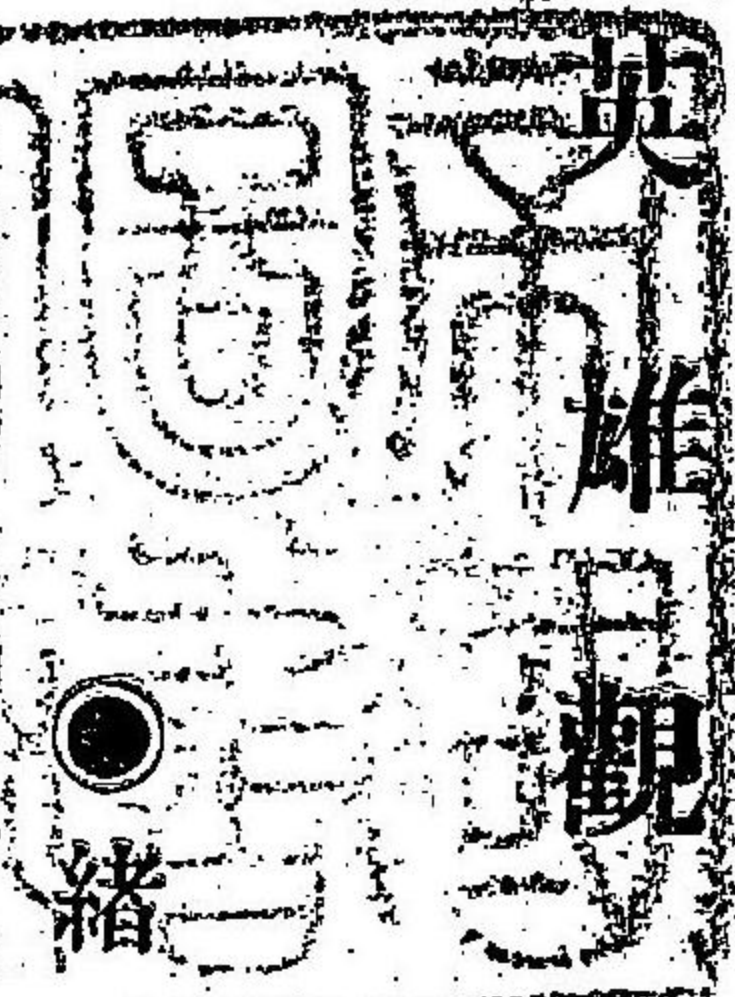
◎春風蹄躡◎春帶雨◎全力を注ぐ◎長生殿に聚樂邸◎夢刻痴情◎頼朝◎一枕◎政
子小妹に夢を置ふ◎只政子を得たるにあり◎義經◎壇の浦を過ぎ◎屋島の一夜◎
情を愛す◎一枕の春夢と天下の大事◎時忠の妻◎和して◎哀の又哀◎箇中の消息
◎頼朝怒る◎政子諫む◎箇中の情種◎花落ち花開き◎平常の情◎非常の情◎濃情
を印す◎平重衡と中納言の局◎横宿を城上に吹く◎櫻花の下に一宿◎二十一◎
り浴中を出づ◎經つこと一年◎一書を贈る◎重衡の書◎中納言の局の書◎情種絲
の如し◎竹床木枕◎相擁す◎鎌倉に送る◎重衡曰く◎酒を飢り◎千手琵琶を彈す

◎重衡感慨す◎千手泣く◎頼朝亦泣く◎頼朝以謂らく◎重衡所謂らく◎伊王を招
き◎頼朝嗟嘆す◎南都に權途◎夫妻相見え◎夫妻相擁して泣く◎大納言の局泣て
曰く◎生別死別◎伊王千手髪を剃り◎水曾翁仲◎平通盛と小宰相◎滿腔の怨◎御
前に問遊◎女院曰く◎胡蝶の夢◎維盛◎美人聴かず◎明月に對する如く◎たゞ濃
情◎濃情か

●英雄の雅懷

◎箇中の趣妙◎道の念◎さび◎しぶ茶色の道服◎狐狸の塵塚◎風雅のさび◎さび
古淡◎越人の句◎非常には非常の士を出す◎群雄◎壯觀雄大◎萬岳靈ふ◎道陳い
ふ◎口切の茶席◎抛茶齊◎潜龍◎彈の修養◎解脫◎道の利休◎支了◎美人みな獨
儼◎一朝頓悟◎獅子王◎妙有◎至味◎轉た◎茶道の宗匠◎人世の價值◎冷觀◎善
悪併せ香む◎如來彈◎一貫◎霞美◎松風一聲◎太閤言ふ◎三千石◎勅◎一輪の花
◎五文字◎居腹◎石塔樓◎サウー◎太宰府◎幽齋◎如水◎豊公の木俵◎松風風々
◎芭蕉の文◎幻住庵の記◎追善◎四行の吟◎太田道灌◎榮辱芳臭◎ア字◎大阿の
劍

目次終



緒論

天心中野常太郎著

昔心。莊子。天。道。篇。に。説。て。曰。く。『。澤。及。萬。世。而。不。為。仁。長。於。上。古。而。不。為。善。覆。載。天。地。刻。彫。衆。形。而。不。為。巧。此。之。謂。天。樂。美。なる。哉。道。の。言。天。下。の。萬。衆。徒。ら。に。區々。たる。有。為。の。人。樂。を。知。り。て。無。為。なる。天。樂。を。知。ら。ず。ア。天。樂。の。天。樂。は。萬。人。舉。げ。て。口。に。天。樂。を。言。ふ。と。雖。も。心。の。裡。未。だ。眞。個。獨。歩。の。天。樂。を。識。ら。ず。唯。獨。り。天。樂。を。知。る。もの。は。其。唯。英雄。乎。故。に。天。樂。を。知。る。もの。は。其。生。や。天。行。なり。其。死。や。物。化。なり。靜。か。に。し。て。は。陰。と。德。を。同。ふ。し。動。て。は。陽。と。波。を。同。ふ。す。

妙。なる。哉。天。樂。天。樂。を。識。る。もの。は。天。怨。なく。人。非。なく。物。累。なく。鬼。責。なく。其。動。や。天。其。靜。や。地。

ア一英雄にあらずんば、宇宙を大観して、天樂を樂む能はず、天樂を樂む能はずんば、眞個獨歩の大英雄にあらず、眞個獨歩の大英雄にあらずんば、宇宙を大観して、天下を経綸する能はず、然り實に宇宙を大観し、天下を経綸する大英雄にして、始めて活殺、自在、死生、脱得の活作畧を活弄するを得、而して或るときは、一身一家を経營經綸して、天下國家を経營經綸せざる事あり、或るときは、天下國家を経營經綸して、一身一家を経營經綸せざる事あり、或るときは、一身一家と天下國家と、併せて經營經綸することあり、或るときは、一身一家も天下國家も放擲し來つて經營經綸せざることあり、時來つて乘するの機あれば風雲を叱咤し、時來らず乘するの機なくんば草廬に高臥して眠るのみ。若し夫れ勢を起し機を弄して人心を支配するに反して、勢を起さず機を弄せざんば與夫に了る而已。九五の位を得て敢て喜ばず、卑夫の境に在りて敢て恨みず。英雄の本領とする處は、區々凡人に驕らむが爲めに、特更に九五の冠を弄して、天下を制するにあらず、區々俗才を隠さむが爲めに特更に天下に制せられて卑夫に居るにあらず。須らく這個問題は眞

個獨歩底の大英雄的活識を以て大観するにあらずんば、得て了悟する能はず。

天下を清めむと欲せば之を清む、國家を濁さむと欲せば之を濁す。清濁自在に存し、活殺自由に應ず。只其時の情勢の趣くに應じて應ずるにあり。天子となりて南面することあり、將師となりて北視することあり、或は宗教家となり、或は學者となり、或は商人となり、或は乞丐となり。正直を示し、横着を現はし、謙慎暴慢を包みて一身を遠慮するに反して、天地に無遠慮を窮め、古英雄を叱咤するに繼りて、三月桃花の裡に雛人形を撫愛するなど、其大小變轉の作用、俗士俗客の頑視する能はざる所なり。

古は高祖、豊沛に起り大に雄飛して、帝業の基を開き天下を一統せしは、之れ彼れの勝機を弄せし數なり。勝つものは勝ち、敗るものは敗る。興るものは興り、亡ぶるものは亡び。絶るものは絶ゆ。亦之れ數なり。治亂興敗は往來して無始の古より無終の末に通じて息むべきにあらず。天下治まりて無事平穩なれば、安んぞ區々小才を弄せん。破窓の下從容自適、酒を呑み眠る

治亂興敗と勝機と

にあり。天下亂れ群雄割據すれば、劍を提げて起ち、鹿を中原に活弄す。英雄は自ら先天個有に英雄の本領識観ありて、鹿を中原に得て悦ばず、鹿を中原に失ふて憂へず。區々眼前の得失成敗利鈍に關らず、單刀直入底に其時務を大々的に文に武に各其長所に盡粹して、高く遠く俗流を脱す。嗚呼英雄の識観絶大にして偉なる哉。

英雄の進

進んでは、烏拉雪山の下、裏海綠水の邊、幾種の旗幟高く天空に翻り、幾十百萬の猛將勇卒、彼我の區なく互に入り亂れ、砲丸東西に飛び、鐵馬南北に躍り、士叫び劍鳴り、長風血煙を揚げ、萬里鯨吼へ。宛かも是れ龍虎風雲に乗じて、不測の變幻を活弄する底の一刻を演じ。退ては、四百餘洲を横斷する揚子江の上流、四川省成都府の西端、塔心寺邊に草廬の裡、世間を浮雲底に塵視し、更深く人定り、燈影幽かに四隣寂として聲なき底に靜坐默觀の一刻を演ず。之れ眞個英雄の進退の樞機乎。進んで乾坤を一貫し、宇宙を震動なさしむると、退きて一身を破窓の下に臥せしめ、寂寞無爲を觀するも、何れが是にして、何れが非か、何れが美にして、何れが臭なるか。是即ち是に

英雄の退

是非美

あらず、非即ち非にあらず、美即ち美にあらず、臭即ち臭にあらず。是非美臭は英雄の眼中に無し。唯絶對的に英雄の胸裡に存在するものは、先天無爲の天樂而已矣。這の天樂の機中より、十三個の變器を其機、其時其勢其情に應じて、靈變不測底に出入なさしむ。這の十三個の觀、備はらずんば、即ち英雄にして眞個の英雄にあらず。眞個の英雄にあらずんば十三個の觀を存する能はず。何を以て十三個の觀と爲す。

英雄の十

第一に天樂、第二に天職、第三に識見、第四に至誠、第五に節義、第六に度量、第七に忍耐、第八に氣膽、第九に經綸、第十に神機、第十一に權數、第十二に濃情、第十三に雅懷と爲す。若し這の十三個の觀中、一個にても飲くに於ては、已に英雄の資格を飲くのみならず、英雄の版圖に藉を脱せざるべからず。只十三個の觀中、多少大小の區ありて、多く應用する分と、少なく應用する分との差等はあれども、英雄の胸底には何時用ゆるも毛頭の狼狽を來さず、平常依然として無爲に之を存す。而して終身悉く應用する英雅と、終身一個をも應用せざるに了る英雄とあり。其樞機の妙用、靈體を知らむと欲

せば、宜しく其變時機數に應じて、自在底に從容自適して、迫らず活弄する。大作器大作用を默識大觀せよ。

英雄の天職、天職、識見、至誠、節義、度量、氣膽、經綸、忍耐、神機、權數、濃情、雅懷は、世の俗士の豆の如き、小量平凡の識を以て見る如き、天樂、天職、識見、至誠、節義、度量、忍耐、氣膽、經綸、神機、權數、濃情、雅懷にあらず。英雄の本領は天爲を以て、天樂を樂しみ、天職を奉じ、識見を明にし、至誠を守り、節義を盡し、度量を大にし、忍耐に勝ち、氣膽を張り、經綸を策し、神機を弄し、權數を用え、濃情を和し、雅懷に遊ぶ。若し夫れ平士凡客の俗質に至りては、人爲を以て之に當るゆゑ、英雄の大觀識に及ばざるや遠し。噫、英雄の大本領、惚ふべし。英雄の大識、量愛すべし。其高きこと天空の如くにして、其廣きこと海淵の如き乎。

文壇の英雄、韓文公、健筆を弄して曰く、「龍嘘氣成雲。雲固弗靈於龍也。然龍乘是氣。茫洋窮乎玄間。薄日月。伏光景。威震電。神變化。水下土。汩陵谷。雲亦靈怪矣哉。雲龍之所能使爲靈也。若龍之靈。則非雲之所能使爲靈也。

然龍不得雲。無以神其靈矣。失其所憑依。信不可賦異哉。其所憑依。乃其所自爲也。易曰雲從龍。既曰龍。雲從之矣。」龍の靈たるや、神出鬼沒、千變萬化、風雲に乗じて電光石火の神機を弄し、思ふて之を測る能はず、得て之を肉眼微細に影せず。英雄の真体本領も亦龍の靈變の如き乎。然り而して英雄の起り来るや、其種根を王統將相の貴族のみに出さずして、大抵其起り来るや一布衣の賤族より出づ。一布衣の賤族より出で、遂には王侯將相を凌駕して、其位置と境遇を自在に活弄す。豈洵に壯絶快絶の大靈觀にあらず哉。而して這個壯絶快絶の大靈觀たる大英雄は却々に容易に起るものにあらず。必ずや其起り来るに自ら天數のあるあり。其天數たるや、小數の小治小亂に出ずして、大數的の大治大亂には必ず出づ矣。今爰に其大數的の天數を論せむに。五百年に一度、三百年に一度、五百年に一度、千年に一度、三千年に一度、五千年に一度、一萬年に一度、十萬年に一度、百萬年に一度、千萬年に一度、一億萬年に一度、斯の如き一三五の圓數を以て雄出起來す。抑も此の一三五の圓數たるや、則ち河圖洛書の陽數にして、二四六の陰數を厭して、起り來

時勢に應じて英雄の變化

るものなり。天下國家人心の腐敗するは陰數的俗物小人凡客の多く往來消息するに因す。天下國家の雄飛活動するは陽數的活士大人清客の多出横行するに因す。小人凡客横行して、天下國家腐敗すれば、萬衆の心裡必ず一大英雄の起り來りて、腐敗の天下國家を一掃せんことを望むや切なり。其望むに理想的英雄と現實的英雄と、唯其時勢に應じて變化作用あり。印度の釋氏の英雄と、支那の孔子的英雄と、猶太の基督的英雄と、日本の豊公的英雄と、佛國の奈翁的英雄と、米國の和聖東的英雄と。其國、其時、其勢、其情に應じて現出するものなり。若し夫れ其神韻微妙の靈種の極的を識らむと欲せば、地中海上鯨吼へ鐵艦將に覆らんと欲する一刻と、神仙的樓上に美人を杭にして酔臥する一刻と、打つて一丸底に打破するの靈客にあらずんば、得て大觀冷視、默識、微笑、する能はず。嗚呼、量りて計るべからざるものは、理なり。推して推すべからざるものは、數なり。量りて計るべき理は、真理にあらず。推して推すべき數は眞數にあらず。眞理にあらず。眞數にあらずして、安んぞ眞理眞數を論ずるを得んや。這個趣妙個中の靈機を大觀し來れば、無規則

眞理眞數

聖哲的三英雄

極まるゝ規則の裡に、自ら眞理眞數、秩序整然として、現然春夏秋冬の往來して息まざるが如く、其大を包み其微を漏さず遂に亂す所を見ず。西曆紀元前五百年にありて、釋氏印度に起り。稍や遅れて孔丘支那に起り。亦五百年遅れて基督猶太に起り。何れも五の祖數に因して起れり。而して一は慈的に天職を奉じ、一は仁的に天職を奉じ、一は愛的に天職を奉ず。以て一世を活動し、萬世を震撼なさしむ。實に前後通じて今より二千五百年を経過す。之より前に世界の靈地亞細亞の東部支那には、文王、武王、周公、の如き一世の德望を荷ふて傑出するあり。而して箕子は紂の暴を歎じて去り。伯夷、叔齊は道路に武王を諫め、遂に周食せずと號して山中に義死す。之れ今より三千年以前のこと。猶ほ先つて湯王、伊尹の起りて九州を和樂なさしむ。之れ今より稍や四千年以前のこと。更に猶ほ先つて堯、舜、禹の聖德ありて、大に天下と無爲を樂しむ。之れ今より五千年以前のこと。此の以前は歴史上其詳細を許さず。春秋以後孟子は孔子、没后百年の後に起り。當時周の德衰ひ、世は戰國にし

支那古代の英雄

て、王道振はず。文士にありては荀子、楊子、墨子の如き出で、各自獨得の持説を吐き、之れより前、老聃、西の方嘉谷關を越て跡を失ふ。嗚呼、去るものは去り、來るものは來りて。世は日に刻に益亂れて、益奇傑の士を出す。句踐の如き膽を坐臥に懸けて、會稽の耻を戒むるあり。傍らに范蠡ありて、兵を謀るの士あり。管仲の桓公を擁して、諸侯に覇たらしむるあり。孟嘗君の如き客を容れて計を爲すあり。馮驩の如き食客にして、王侯を動すあり。豫讓の如き苦節を履んで、知伯の仇を報せむとするあり。魯中連の如き田單を戒めて狄を攻め勝を弄するあり。犀平の如き離騷を作りて、汨羅の水に投ずるあり。蘇秦の如き雄辯を弄して、六國合従の印綬を佩ふるあり。蘭相如の如き秦王を赫して、璧を完ふして歸るあり。田子方の如き、貧賤にして王侯に驕るあり。張儀の如き秦を説て、蘇秦が結びし六國の合従を解くあり。荆軻の如き丹が爲めに易水を歌ふて秦王を描さしむとするあり。公孫鞅の如き術より秦に入り、法を布きて秦庭を鞏固にするあり。呂不韋の如き買人より起りて、秦の相國を占むるあり。擧げ來る是等皆當年の英雄にして、

時の風雲に乘じ、其變數を自在に弄せり。是に於て秦は關西にありて、關東六國及其他の小國を併吞す。實に宛かも日本の元龜、天正、年間の如く、天下亂れて麻の如し。爲めに英雄、豪傑、各機先を制して起り。以て互に割據其封域を定めて、雄視區畫す。洵に之れ天下の大數的大亂の世にあらずや。此の故に南面の天子、其邑三十有六を携ひて、秦に西面するや、周室亡び。北面の臣子中華四百洲を提けて、咸陽城裡に南面し、皇帝の位に即く。

嗚呼、爰に及んで天子、天子たらず。臣子、臣子たらず。義去り、分明かならず。天は下りて地となり、地は上りて天となる。實に主客顛倒も亦甚だしきにあらずや。治耶、亂耶、亂耶、治耶、治亂興敗、何かある。英雄の眼中胸底、治亂興敗の區々たる俗數なし。治めんと欲せば之を治む。亂さんど欲せば之を亂す。興さんど欲せば之を興す。敗らんと欲せば之を敗る。是れ實に眞鐵骨を先天に得たる、英雄の本領天譴にあらずして何ぞや。一言の鐵舌鐵聲天下懼れて伏す。一笑の鐵顏鐵色萬邦階段に拜跪す。其生殺與奪の權は

始皇の餘
端と餘憤

三國時代
より清朝
に流す

英雄の種

常に掌裡に存して、唯だ一神機の樞軸にあり。
始皇の餘樂は長城と爲り、阿房宮と爲り。其餘憤は阮儒焚書と爲りて、僅づかに三世二十六年にして亡ぶ。其後、漢室起りて四百年の大業を開き。遂に三國鼎争の世となり。宋は八世。齊は七世。梁は四世。陳は五世。隨は三世。唐は二十世、即ち二百九十年を経て。後梁、後唐、後晉、後周となり。此裡面に五代割據存して。南宋。遼。金。元。明。現今の清朝に通じて、此間殆んど二千年間。幾多無數の英雄輩出したりき。帝王となりて南面するの英雄あり。王佐の才を弄して北而するの英雄あり。馬を陣頭に立て、三軍を指揮するの英雄あり。儒服を着け天道を説くの英雄あり。文を弄し詩歌を吟咏して、天地の趣妙を樂しむの英雄あり。破窓の下、香を拈じて至玄を了悟するの英雄あり。爐邊に書を枕にして、劍を撫し圖を按し、終世天下を慷慨するの英雄あり。愚夫愚婦を弄して、教を施し、人心を支配するの英雄あり。古人を友として赤貧に安んじ、天爵を弄し王侯に誇るの英雄あり。擧げ來れば其數多し。豈武力を以て他邦を侵畧し、世界を騷動なましむるもの而已を英

項羽の變

英雄の作

雄となさむや。宇宙の眞理を大觀して、玄妙を味ひ、無量の人心を支配して、萬世を一貫する底の英雄と。天下國家を経營經營して當時を清平にする一世の英雄と。其派を論ずれば百姓の工藝雜多に似む。嗚呼、英雄は自ら英雄的の鐵骨ありて、得て學び達するものにあらず。俗客の後天思慮の得て、之を先天に觀る能はざる所なり。
項羽、少時、曰く、「書は以て姓名を記するに足るのみ。劍は一人の敵なり、學々に足らず。願くは萬人の敵を擧げん」と。其言ふことや自ら眞個英雄の本領を現はす。其後、吳中の兵を擧げて八千を得、裨將と爲る、時に年二十四。是より八年間、七十餘戰、未だ曾て一戰だも敗を取らずと云ふ。遂に中原の鹿を沛公と争ひ、終局の敗を見るや。東の方、烏江を渡らむとして、乃ち刻て死す。嗚呼洵に之れ一世の英雄にあらずや。范增、年七十にして奇計を好み、其當年苦肉の變數を弄し。三寸の舌頭を以て帝者の師たる張良。意氣衝天萬夫不當底の樊噲。宗廟社稷縣邑を立て、事は便宜を以て施行する蕭何。術畧自在天下を勝間より弄したる韓信。縦横無盡に裨裡肉を生ずる底の奇才

成功者
失敗者

是等數英雄の價値は決して一定の評論する處にあらず。如何となれば勝者を以て天下之を迎ふ。敗者を以て天下之を讒る。迎ふもの本氣か、讒るも狂氣か。英雄より之を看れば。天下に迎へられて敢て喜ばず、天下に讒られて敢て憂へず。成功者は失敗者より、功少ふして歓迎を得。失敗者は成功者よりは功多くして逆數に丁る。現今より古代英雄活動の當年を追想すれば、沛、羽、龍虎の争闘も僅か一刻の泡沫的の夢に似たり。

情眼
を破る

世は紀を經る毎に文明に進んで、紀を經る毎に腐敗す。紀を經る毎に細密に入りて、紀を經る毎に小成に流落す。此の時に當りて。夏日の雷霆情眼を破るが如く、一大風雲に乗じ、一大偉人即ち英雄の起り來るや必せり。英雄の起り來る、時勢の神機たるや。腐敗天地に處するに、俗士凡客の小量小刀細工的計畫の經營すべからざる機に乗じて、出づるものなり。以て天地を震撼し、封域を活動し。宇宙を包むで其往來を一息の底に一貫す。其爲す所、猛虎の一嘯百獸を沈靜なましむるの靈機あり。胡蝶の輕舞人心を清化なましむ

歴史を緒
を觀よ

るの靈妙あり。理想上より、現境上より。社會的と國家的と、其時に應ずる必要の樞點より、活動するものなり。

請ふ回顧して、歴史を緒き看よ。日本三千年、支那五千年の活動を首として、印度、埃及、希臘、羅馬の古國より、土、英、佛、蘭、獨、米の諸邦に通じて、坤輿上互に其封域を區劃して。如何なる英雄起りて、蝸牛角上の、分捕の活動を爲せしか。如何なる宗教家の英雄を起せしか。如何なる文學家の英雄を起せしか。如何なる哲學家の英雄を起せしか。如何なる美術家の英雄を起せしか。如何なる兵器家の英雄を起せしか。如何なる商畧家の英雄を起せしか。如何なる財政家の英雄を起せしか。如何なる外交家の英雄を起せしか。如何なる裏面胸底には、球の南北と言はず、洋の東西を問はず。何れも英雄の職務を實行するに當りて、英雄の天職と識見と節義と度量と氣膽と經綸と神機と天樂と大觀と忍耐と權數と濃情と雅懷との十三個を弄せざるはなかりき。其庸實は宜しく自個の識見を高くして、遠く眼光を放ち、廣く活眼を開きて、詳細に點檢し來れ。

●英雄の天樂

孔丘^{孔子}樂天知命に説て曰く。樂天知命。天を樂ひて命を知る、と。區々樂天知命の死文字を放擲し來りて、執着を離れ其眞粹を觀よ。宇宙間之れより大なる樂しみはなし。彼の肉眼に見る頭上者々の天を指すにあらず。天。這の天。這の天。命。這の命。這の命。樂しますんば知る能はず。知る能はずんば樂しむ能はず。學者之を説て知らず、文士之を筆にして知らず。滔々たる天下頑冥の小見凡知を弄して、汲々乎として喪の川原を演ず。宛かも進むことを知りて退くことを知らず、存することを知りて亡ぶことを知らず。得ることを知りて喪ふことを知らず。嗚呼、憐むべきことにあらず哉。其れ唯聖哲的英雄之を知る乎。進退存亡を知りて、其正を失はざるものは、其れ唯聖哲的英雄乎。天を樂ひて命を知る。亦之れ聖哲的英雄にあらずれば能はざる乎。宗教家口角泡沫を飛して天命を説く、而して彼れ躬自ら知らず。己れを欺むき他を欺む。其愚識の加減彼の猿芝居よりも劣れり。猿、本來人間にあらずして、人間の歴史を演ず。今の宗教家は彼の猿に對し何の面目がある。今や我邦に二十萬の瓦落多僧侶ありと。是れ皆天下遊民の徒にして、良民の天食を賊する毒虫なり。懶鼻樞、一筋を以て、何んぞ西比利亞、黑龍江頭の邊りに勞働に走らざるか。

昔しは希臘の哲的英傑ソクラテス。聯邦合從定まらず、宛がら亂麻の如き、戰鬪日に躡ぎ、人心安からざる時に出づ。博識大徳にして、禮義法度因て以て起る。然るに國人之を知らずして、彼は邪道を説き、後世を惑はしむる者なりとて、毒害すべき刑に當つ。ソクラテス少しも畏れず、從容自若泰然として、獄中に在て毒藥を呑みて死す。嗚呼、ソクラテス。彼れの天を樂しむの大にして、命を知る何じぞ其明なるや。當世にあつて命を知り天を樂しむ、ソクラテスにあらずんば、得て樂天知命の樞機を握る能はず。人樂を樂む凡客、ソクラテスが獄中に毒を呑み死するを見て、天樂知命の士にあらずと笑ふ。豈愚の復愚なる愚見にあらずや。生を人間に得て、道の極々の太極を觀了し、樂天知命を識得せずんば、何等の樂かある。徒らに世間の小成

に眠る、自己勝手の樂天知命何かある。大丈夫底の活眼より大觀して、本極を掌握したる、樂天知命にあらずんば、駄目。唯聖哲の英雄にあらずんば得る能はざる乎。

基督ヨハネ傳に説て曰く。

（我れなほ爾曹に多く語る可きこと有ども今なんぢら曉ることを得ず）
萬卷の書を読み、萬人の説をきくとも、悉く煙影のみ。道を得るは、他より入るにあらず、自己より開發して、曉るに在る而已矣。又曰く。

（然と彼れすなはち真理の靈の來らんとす爾曹を導きて凡ての眞理を知るべし）
俗智、俗見、惡智、惡見、小智、小見の物質的人間には、人天の通路を塞ぐを以て、眞理の聖靈を大觀する能はず。天心と人心と一徹塵の差なき靈境の眞界に進まずんば、其胸底と天道と往來する能はず。眞理は歌中に其人獨り知る。又曰く。

（其時なんぢらの心喜ぶべし其喜樂を奪ふ者あらじ）

基督のヨハネ

眞理は歌中に其人獨り知る

湯屋の三助も亦大丈夫漢か

摩西

上帝より神戒を受く

子を産は産婆にあらず、産婆は介して産婦に子を産ましむるなり。聖哲の英雄が萬衆に道と説き、眞理を開發なさしむるは、眞理を外部より其人の胸裡に注入するにあらず。其人の胸裡に在る眞理の通路の塞ぎ居るを開き與ふるなり。宛かも産婦の産婆におけるが如し。湯屋の三助を業と爲すと雖も、眞理を開發して聖靈を大觀すれば、一個の大丈夫漢なり。ア、英雄の天樂、英雄にあらずんば能はざるか。
埃及に奴隸となりてヨセフ其地の王に用ゐられ。父及び一族をも迎へ住めり。年久くして、子孫に大は繁殖しければ、王之を惡み、命じて其一族の男子を殲にせしむ。摩西は、其禍を逃れ、成長して甚だ埃及人の非道を怒り、荒れ果てたる地に遷りしが、神教に因りて、アラビヤに歸り來る。其後埃及王マダイスライル族を逐ふて紅海に至る。風波俄に荒れ、軍兵悉く溺死せり。アラビヤにシナイ山あり、雷轟き電閃ける時、上帝其山上に下り、摩西に神戒を授け給へり。この神戒、果して上帝なる現物ありて、摩西に神戒を示したるか。文字を眞面目に讀む勿れ、上帝より摩西に神戒を授かるべき。上帝

眞空に何物がある

マホメツ

即ち摩西。摩西即ち上帝。其神戒授受の一刻は電光石火の機變も及ぶ能はず。此の時、上帝なく、摩西なく、存在するもの眞空に何物がある。聖哲に遊ぶ底の英雄よあらずんば、得て這の天樂を知りて樂しむ能はざるか。摩西も又天樂を大觀したるの哲的英雄乎。

紀元五百七十一年、マホメツはアラビヤのメッカに生る。幼にして父母を失ひ、叔父の家に養はる。長じて駱駝夫となり、シリヤ及びアラビヤに行商を試む。二十五歳の時、一寡婦の夫となりしが、一日彼れ黙坐静息、翻然として悟る處あり。之より家を出で、深山幽谷に匿れ、修業鍊鍛すること數年、四十五に至り、大に眞理の大觀を極め、始めて教を説き出して曰く、「天地間唯一の神ある而已」摩西、基督の輩は、其使者たるに過ぎず。と何等の達觀活識ぞや。彼れ絶對の神を大觀して、天樂を樂しむと共に、其權數も氣膽も雄大なりと云ふべし。マ氏も又天樂を雄大に樂しむの一大英靈的の英雄乎。

天樂を樂むものは、胸底深く無底にして、其最自身と雖も測る能はず。亦眼

達觀活識

天樂無底

釋氏成道

識高く天空を貫き、我れながら我れを知らず。之れ天樂の天樂たる天樂乎、宇宙清明、滿空一の雲霧を視す。此の時、心の淨きこと赤兒の如く。天空海淵、圓融自在の妙機を捉へ得て、生死流轉の表に超然たるを覺えぬ。情は一切の煩惱を斷ち、智は一切の妙理を觀し、身は四大を離れて天地に充塞す。凡そ三世萬劫の因縁、宿命、盡く通達せざるなく、輪廻の根柢、四患の龍生、及び衆生有情の隨業應報、人世一切の苦樂を擧げて悉く眼前に歷やたり。斯の如く無明を斷じ盡して、東方明星出る時、伽毘羅國の悉達多は一生の本願圓滿して、無上正覺を得ぬ。彼れは救世の大使命を果さむが爲に佛陀となりぬ。嗚呼、彼れは煩惱の羂に繋かれ、生死の巷に流轉して、年久しくも迷ひけり。今や輪廻の鎖を斷絶して解脱の鏡となしぬ、生死の大海無明の暗夜を照すべき光を得たり。一切人生の苦惱の源は是の光によりて残りなく看破せられぬ。而して又古の悉達多にあらずして、萬德圓滿なる佛陀なり。何物か彼れを固圜に捕へ得べき。一切衆生は如來の光明に緣りて等しく悟道に入るを得べし、悟の道とは渝らざる眞理なり、動かざる安心なり、圓かなる福徳

大涅槃

なり、不生、不死、寂滅爲樂の大涅槃なり。

大なる哉、釋氏、彼れは一身の福徳を得むが爲に、絶大なる天樂の道に志し、者に非ざりき。彼れは實に長者の王宮を去れり、彼れは實に妻子を捨たり、爲めに解脱の道を開かむとする大慈悲心に本づけり、一に是の衆生のを通じ、人天を掩ひ、其大、望むべからず、其高、仰ぐべからず、如來の如來たる所以も、三千年流傳の源頭となりて、萬世の宗師と仰がる、所以も、噫、這個絶妙なる天樂の大作用、聖哲的靈妙底の大英雄にあらずんば、得て活觀、活樂、活弄する能はざる乎。大英雄の天樂的靈境豈俗贊の盡くべきにあらず。眞個聖哲の大英雄は區々人爵を放つて天爵を望む、區々俗縁を絶つて天縁を結ぶ、區々小富を失ふて天富を得。滔々たる天下の裡、眞個獨歩底の天爵、天縁、天富を弄する英雄幾人かある。印度に遊び、沙羅双樹の下、釋氏八十歳の老軀、復見るべからず、今や三千の佛骨化して螻蛄となる、而

して今日依然、廣長舌の佛陀乎。唯是眞理而已、唯是天樂而已。凡客の平然たる軀體を看れば、如何にも天樂を樂しむ底に見ゆ、然れども此れ外象僞樂のみ、胸底未だ靈虛にあらず、胸底未だ靈虛にあざれば、天樂を樂しむの靈界的道客にあらず。天樂を樂しむ道客にあらずして、安んぞ天樂を言ふを得んや。天樂を樂しむものは、上、天を怨みず、下、人を尤めず、易きに居て命を俟つ。而して其活作用、之を放つときは則ち六合に彌ち、之を卷くときは則ち退て密に藏る。ア、其旨味の幽玄遠近、測る能はずして窮りなし。

靈界にして雅界の英雄、西行法師、天樂の境界より一句を弄して曰く。
世を捨るすつる我身はすつるかは
すてぬ人こそ捨るなりけり

彼れ佐藤、藤、清の俗稱を去り、西行と號して、諸國を健步行脚す。春は吉野の櫻花を咏じ、夏は富士の清見瀉に涼風を弄し、秋は三井に琵琶の月を吟觀し、冬は四國に崇徳院を其陵に讀經し、以て這の黒子の汚濁の塵世を遁れ、花鳥

英雄は心を捨てず

に和し風月に楽しみ、自然無爲の天樂を弄する、何等の清妙靈界の天樂乎。俗士俗客は心を捨て、肉体の僞樂を求めむとして、常に不義の利益に陥り、世俗の區々たることに忙殺せられて暗昧となり、其順を講せずして富貴悅樂を好み、離れんとして離る能はざる死を憎み貧賤患難を厭ふ、是れ皆心を捨てたるの人なり。英雄は心を捨てず身を捨てず、西行の如きは最も身を捨てず、故に彼れ自ら世を捨るすつる我身はすつるかはすてぬ人こそ捨るなりけりと吟じて、心の動かざること大山の如し。無欲にして能く大虚と往來遊戯す。ア一又東方神仙國靈雅的天樂の英雄乎。天樂は英雄にあらずんば、得て樂しむ能はざる乎。

無英雄の

假令乞食を以て一世を了る

英雄の看板を掲げ、英雄の真似を爲す、世に僞英雄あり、斯の如き僞物の凡客、何をか爲し何をか樂しまんや。滿天下の裡、無名の英雄あり、這の無名の英雄眞物ならば、有名の僞英雄よりは大きなり。假令乞食を以て一世を了るども、心を大真空に歸し、天地萬象山川河海を身となし、春夏秋冬、幽明晝夜、風雷雨霜を行と爲し、人生を順逆に弄し、死生を晝夜の道と爲し、他別

英雄と乞食

一個の職業

に何をか好み、何をか惡まん、義と共に安んじ、才藝を好まず、万事自在自適に無事を行つて無爲を爲す。斯の如くなれば、己れ獨り愼んで、人に知られんことを求めず、天地と神明と交接して、其英風洵に光風霽月の如し。之れ實に天樂の天樂たる大なる天樂にして、亦英雄の本領と爲る所ならむ乎。爰に於て乞食も英雄も豈何の區別かある。

天樂は無爲を以て大觀するを得

帝王も一個の職業、大臣も一個の職業、浪人も一個の職業、乞食も一個の職業、其職業の等差を以て人を上下品類して云云す。未だ真の眞、粹の粹、即ち眞粹の天樂を語るに足らず、語らざると雖も、天樂は依然として天樂、天樂は有爲を以て天樂を觀る能はず、天樂は無爲を以て大觀するを得矣。一個の職業は有爲なり、有爲の職業を以て觀らるべき天樂ならば、敢て貴ぶべき天樂にあらず、我徒が觀する底の天樂は其職の上下貴賤を以て變化あるべき天樂にあらず、帝王の職を業とする人にてても天樂を得ずんば、其天爵の本領に於て何等の價値なし、其日を乞食して賤しむべき業を執るとも、心理天爵を得て太極を大觀し、無爲の天樂を樂む底の人ならば、實に大英雄と謂は

ざるべからず。ソクラテス言へることあり、『人の爲すべき職業に賤むべきもの無し、賤むべきはたゞ懶惰而已』と世に上等の品位ある職業を執るの輩、徒らに世俗に誇る勿れ、亦下等の品位なき職業を執るの輩、徒らに貴人に懼る勿れ、品位ある職を執りて、胸中天樂を知らざる懶惰ものあり、品位なき職を執るものにして、胸中天樂を樂むの靈客あり。彼の舊るに足らざる凡才を以て、黒子の塵界に栖々役々嵬靨縱横、日を夜に繼で眼を血の様に廻し、窮々乎とするの俗輩、豈個中の天樂を天知せんや。嘗て頭山滿言ふ、『各國の公使は旅藝者なり』と、大禮服の金モールも、印半天の木綿も畢竟何等の區別かある。……吶汝ち壺中の灰蟲、犢鼻褌一番しつかかり締め來つて、靈界の聖哲的英雄の天樂を大觀して、天樂なるものは、決して彼等英雄の專有物にあらずして、宇宙絶大眞理なる圓滿的先天協有の天樂たるを知れ。……個中の天樂を。

會呂新の
三十一文

各國の公
使は旅藝
者なり

積景一
番

會呂新病重く將に死に近からんとす、豊公彼れに對して、死後の望みを問ふ、會呂新一首を吐く。

御威勢で三千世界手に入らば
極樂淨土われにたまはれ

豊公是れに答ふる理想の天樂あるか、會呂新も稍や靈界の小僧か。……何んのその三千世界片手打ち……。歸する所、馬の糞も金剛石も一個の物質のみ、拈じ來りて何の妙味かある、却つて馬糞の植物に良樂たるを知る。英雄の天樂と俗客の人樂と、其區、障子一枚の境界たり。今の外交官には梅ヶ谷の犢鼻褌持を任命しては如何、何となれば、其本領無邪氣にして、大食だい勝利を望むの一點ばり、嗚呼天下の事業も唯大機一點耳、這の裡英雄の天樂を知れ。……矣。

●英雄の天職

萬物悉く天職あり

宇宙の天則として、一事一物に就て、有情動物と非情靜物との區別なく、凡て天職のなきものは一もあらざるはなし。春暖の候來りて櫻花爛熳、秋風の氣來りて楓樹紅葉。之れ時候の順轉と草木の天職なり。水冷にして火熱す、石剛にして土柔なり。之れ水火土石の天職なり。鳥は空中に飛び、魚は水中に遊ぶ。之れ魚鳥の天職なり。人間の中にも種類ありて、男子と女子、老人に小兒。其男女老少の裡に、又貴賤貧富賢愚の區あり。而して其々に天職は依然として備はれり。男は男の天職あり、女は女の天職あり、老人は老人の天職あり、小兒は小兒の天職あり。夫たるの天職、妻たるの天職、父母たるの天職、子弟たるの天職。貴族の天職、賤民の天職。賢者には賢者の天職あり、馬鹿には馬鹿の天職あり。官吏の天職、商人の天職、藝人の天職に乞食の天職、美人の天職に英雄の天職、……如何なるか、之れ美人の天職。……如何なるか、之れ英雄の天職。美人と英雄と、其異なる點は那邊にある。

美人と英雄

只美人の粹と、英雄の眞と、僅かに薄紙一枚の差のみ。顔色艶麗なるのみ是れ美人にあらず。身長強力なる是れ英雄にあらず。……

揚貴妃か
ソヨセフィンか

袈裟女の
真觀

揚貴妃か、泥君か、ソヨセフィンか、美人は美人に相違なしと雖も、未だ眞個の美人たる天職を全ふしたる美人にあらず。昔しは袈裟御前が粹の粹たる『貞操』を看るに、其神機妙用剛にして艶、純にして粹、玲瓏として魔神の悪夢を破りし、其潔勇たるや宛かも揚柳觀音の風姿ありて、白衣の裡、清き肌の裡、……不動底の靈心あらむとは、よもや北面の武士遠藤武者盛遠も、是を知らざりき。而して彼れ袈裟女悲哀觀を弄する、絶命絶命の時に當り、三十一文字を形骸と與に残せり。

露ふかきあさちか原に迷ふ身の
いと、開路に入るそかなしき

さてはもろくも遠藤盛遠は色界の奴隸たる執着の情を、がらりと打破し去り打破し來つて、文覺上人の後身を作れり。……袈裟女死して一個の文覺を作れり、美人の天職の作用も亦大なる哉。

文覺か契塗か何れが英雄にして何れが美人乎。首を回らせば大は小は小と、狐は狐と虎は虎と往來鬪戯するものなり。梅ヶ谷に向ふものは常陸山の狂喜する國民の淺量憐むべし。安んぞ宇内烈強を眼中に置く事無き大量なき乎。這個の大量なくんば宇内を打つて一丸底に盟主大權を掌握する能はず、英雄の大業を爲んと欲せば、宜しく英雄の天職を行ふべし、天も英雄の天職を行ふものに大任を與ふるなり。而かも幸に日本は球上有望の地に在り、之れ天の大任を我日本に與ふるの兆象乎。亞細亞の盟主大權を弄せんと欲せば、宇内の盟主大權を弄するの心觀理想なかるべからず、這の理想ありて漸く亞細亞の盟主而已。我家を齊へんと欲せば近所隣りより向側に通じて、威嚴を存するだけの体裝と交際なかるべからず。勝つときに勝たすんば勝つ能はず、敗るゝときに勝たんと欲して却て敗を見る。今や日本は勝つべき天敵を荷ひ居て、英雄の天職を實行すべき時なり。實行すべきときに當りて、實行せざれば天職に逆ふものなり。

猛虎が兎を殺したりとて、敢て猛虎の勇を賞すべきなし、日本が朝鮮を版圖に入れたりとて、敢て賞美すべきとにあらす、對等よりも以上の強を倒すを以て英雄の本領天職と爲す。契塗御前も遠藤武者に懸想を受けずんば、美人の貞操を後世に残す能はず、遠藤武者も契塗女の勇貞哀觀に會せずんば文覺てふ英名を今日に存する能はず、ア一英雄は英雄に會せずんば、互に英雄の天職を實行する能はず。

宋の欽宗皇帝靖康二年春三月は、北宋が悲慘なる最期を遂げたることは、當時の歴史を播くものゝ知る所なり、徽宗欽宗の二帝は九五の尊きを以て、北方蠻夷の虜となり、深宮南窓の清庭變じて胡沙吹く朔漠の野に悲絶凄絶の月を見るの逆運に遇ふとは、嗚呼、又數乎。此時國民を擧げて一致し、最後の決心を以て金と争はんか、二帝何んぞ北行するの慘あらんや、北宋豈斯の如く容易に亡ぶることあらんや。唯それ國民の心、區々として一時姑息の安を偷んで、終に千載拭ふべからざるの耻辱を蒙りぬ。獨り唯當年にありて精忠の岳飛乎。ア一飛武王乎。

岳飛は忠孝の道を能く知り能く行ひたるの人なり、岳飛は武人として政治家としての英雄なり。岳飛の天職としての理想は區區野心家の望む底の小功名にあらず、彼は祖國の受けたる艱難と君父の蒙りたる耻辱とは、彼れが須臾も忘るゝ能はざる所なりしなり。建炎四年四月金沙寺の壁に題しては曰く、『奇功を立て醜勝を殄し、三關を復し、二帝を迎へ、宗朝をして再び振はしめ、中國を安強ならしむるを俟ち、他時此を過ぎて金石に勒するを得ば快に勝ふべけんや』と。其情鬼神も暗に泣號する底の烈々たるものあり、其裡にも彼れは極めてやさしき意を東松寺に題して亦言へり、『他日盜賊を殄滅し、凱旋回歸また此に至るを得ば即ち當に聊か善縁を結んで以て庵僧を慰むべし』と。聖により、胡虜を掃清し、故國を復歸し、兩宮を迎へて還朝し、天子宵旰の憂を寛ふするは、此れ所志なり。然るにいつも英雄の事業を害するものは、群少輩の瓦落多亡者の所爲にして、岳飛は内群議を裁斷して外患に當り、洵に彼れの一身は内憂外患を一身にて兩裁するの象。彼れ嘗て翠巖寺に題する

の詩あり。

秋風江上駐王師。暫向雲山瀟翠微。

忠義必期清耳水。功名直欲鎮邊圉。

山林嘯聚何勞取。沙漠群兇定破機。

行復三關迎二聖。金會席卷盡擒歸。

當年の朝野擧げて悉く此志あらしめんか、天子何んぞ蒙塵せん、宋室何んぞ金國の爲めに苦まん、ア一豈故なきにあらず。……岳飛の光輝益々發揚する所以と、敵金人の益々岳飛を懼る所以とは、宋朝の爲め悦ぶべきことにして、亦宋朝の爲めに哀むべきことにあらずや。即ち彼の婁婁女と文覺との如きにあらず、英雄の天職も容易に秩序正しく實行する、それ難哉。天下のこと多く小人の手に由て、晩回すべからざるの境遇に落つ。金人信ずべからず、和好恃むべからず、とは岳飛派の主戰論者が痛言するところなり、一時の姑息を恃み、版圖を割き、宴安的に目を驕らんと欲するは、彼の秦檜等の後、主和論者の望むところなり、二者いつも衝突して、内互に反目讒言

を弄す、如何んぞ終局の全勝を觀る能はざる、豈あやしむに足らんや。余、支那の史を讀んで爰に至るや、豈えず轉た悽然たること久し。南宋は方に恢復の機に向て而して恢復せられざりき、岳飛の得意は失意の奈落に蹴落水に伴ふて還らざりき。而して中興の業は長へに落花流

精忠岳飛

加封

天下の大計を憂ふるの士は岳飛と秦檜とを只其當年にのみに觀るべからず、我邦明治初年以來幾個の秦檜ありて、國歩をあやまり沮喪を來せしことあり、而して岳飛的人復見るべからず、ア一老南洲復見るべからず。彼れ岳飛は反對黨の奸兇に罹りて大理獄に下れり、是れ何等の冤ぞや、紹興十一年十二月二十九日、風寒く日光薄き一日、嘗て天子より精忠岳飛の四字を賜りたる、岳將軍として聲名中外に喧傳し、金兵をして震慄せしめたる一世の名將も、秦檜の一筆に依て從容獄中に死す、年僅かに三十九。ア一。孝宗皇帝諱じて飛及び雲の官を復して禮を以て改葬せしめ、廟を鄂洲に建て忠烈と號す。後ち幾回か變號改諡ありて、明の萬曆四十三年には三界靖魔大帝

帝保封昌運岳武王と加封せらる。岳飛の一世は僅かに三十九年にして短し、然れども其事業は長し、而已ならず英雄の天職を實行せりと稱せられて歴史を貫き、其人と其徳とは悠々天地と與に盡くるなきなり。清の乾隆十五年乾隆帝使をして之を祭らしめ、文を作りて之に告げ、又親ら武穆詞詩を作る、詩に云ふ。

乾隆帝の詩

翠柏紅垣見深祠。羔豚命祭復過之。
兩言臣則師千古。百戰兵威震一時。
道濟長城誰自壞。臨安一木幸猶支。
故鄉沮豆夫何恨。恨是金牌太促期。

英雄の天職を目して順境のみと思ふべからず、亦逆境を見て天職にあらずと頑視すべからず、其道を行ひ其業を興し其事を執るに、順境のときあり、逆境のときあり、勝者あり敗者あり、正道あり變道あり、一樣にして半機あり。彼の劉備天子の徳ありと雖も、猶孔明を得ずんば、龍の風雲を得ざるに等し、孔明王佐の靈才ありて、天下の形勢に通じ、時務を明かに識ると雖も、劉備

劉備の孔明

に遇はざれば、亦靈妙の奇才を施すによしなし、一は水、一は魚、水ありて魚なくんば誰れか水の清美を稱せむ、而かも魚は水なくして活動する能はず、況んや水魚の交りおや。當時王佐的々底の秀才なる英雄と言へば、天下舉げて諸葛武侯を指さざるはなし、然るに首を回せば、猶龐士元てふ隱士あり、亮其家に至る毎に獨り牀下に拜すと、以て亮より重名ありて其器の大なること推して知るを得。英雄の天職を知り英雄の天職を觀んと欲せば、歴史に羅する有名英雄よりも、世間に虚名を博せざる無名の英雄宇宙に充滿することを識得せざれば、其眼界の版圖狭にして、古今獨歩の活觀を弄する能はず。劉備は劉備底に英雄の天職を遺憾なく盡せり、孔明は孔明底に英雄の天職を粗漏なく盡せり、龐士元は龐士元底に英雄の天職を從容として盡せり。世間の俗士徒らに名ある英雄を見ることを知れども、名なき無名の英雄を觀ることを識らず。天下の無數の凡客俗士に名を博せんよりは、唯一個の英雄に知を受けるを好む。英雄が天下を経營せむとて、其天職を盡すは、徒らに虚名を弄するに出づるにあらず。

アレキサンデル大戦争後は、スパルタ希臘の盟主となり、間もなくシープス之に代はり、ペロピダス、エパミノンドス等の英雄、其間に起りしが、シープスの國勢次第に衰へ、列國互に相争へり。マセドニヤ王ヒリッパ一寒村より起り、希臘を統一せんと志し、セザリイを服さしめ、フェルルスの地を奪ひ、進んで希臘列國の中に入れり。時にアゼンヌの能辨家デモスゼニス、其陰謀ある事を看破し、四方に演説せしも、一人として耳を傾くる者なく、ケロニヤの一戦にて、遂に希臘全体を領分せり。然れども私怨を以て、臣下の爲に暗殺せらる。アレキサンデルは其子にして、幼時は賢哲なるアリストールに師事し、膽力強く、剛勇能く兵を用ふ。嘗て少年の頃、父ヒリッパの遠征する毎に、歎じて曰く、『斯くては後に兒が武を試むるの餘地なけん』と、其宇内を呑むの氣象想ふ可し。年二十にして位に即く、列國其年少たるを侮り、動もすれば輕蔑するの意ありしが、イルリイを攻め、シープスを撃ち、都城に歸るに及びて、各國の公使を集めて言へる様、『我父の遺志を繼ぎ、將に天下に爲すあらんとす。汝等必ず、出兵の期を愆つ勿れ』と、敢て一人の之に

抗言する者なし。ペルシヤに入り、トロイを過ぎ、蒙傑アレキスの墳墓に詣り、さすがの英雄アレキサンドルも、懐古の情に堪へがたかりと見へ、涙を共にあつく用へり。ペルシヤ王ダリウス、之を聞きイッサヌに迎へ戦ひ、大敗遂に其國亡ぶ。爰に於て埃及人大に恐れ、門を開き出で降る。凱歸途一地を下して都を建つ、是れ即ち今日世界に名高き、亞弗利加の佳港アレキサンドリアなり。ア、彼れの氣膽識譽愛すべし、彼れは天職てふ二字は終始忘れざりき。彼れは更に印度を征せんとして、其國民に告げ、る言に、『天帝予に命じて全世界を主宰せしめんとする也。之れ予の天職』と、暫く天職の是非は問題外として、彼れが自重自信の英雄的の天職を的に懸けて、遂に進んでガンデヌ河畔に軍を弄す。其堅固なる雄圖、實に思吉志汗的の英畧あり、惜ひべし彼れはパピロンに都し、三十三歳にして世を辭せり。ア、復這個英雄起すべからず。彼れが三十三年の肉數短なれども、彼れが國民に宣言せし如く『全世界を主宰せん』の語と、もに遊魂は長なへに歴史と與に天職を弄し

豪傑の旅を揚げ英雄の看板を掲げたる以上は、さうでもこそでも、其天職は絶對的に實行せざるべからず、又實行せざれば、英雄の繩張は脱せざるべからず。彼の俠客てふものは、たれく繩張なるものあつて、古の大名が互に割據し居る底の趣きあり、這の親分、子分の間柄は義を以て成立し居れり、進むも退くも義の一點のみ。英雄も亦斯の如く、天職と云ふもの、其實は己れの領分の地と己れの身とを賭して、互に繩張を犯して龍、野に闘ふの争のみ、勝機を弄したる英雄と、敗機を弄したる英雄と、何れにしても天職は缺ざりき。畢竟英雄の事業も小兒の遊戯と見て可ならむ耶、然るに之は武を以て争闘するを言へしなれども、亦他に諸種の英雄あり、宜しく英雄の鐵骨を備ふ、英雄の一大活觀を具して、英雄の天職の天職たる眞の天職を、己れ獨り靜かに默識大觀せよ。

●英雄の識見

四〇

識見洞明

無謀無智

公平無私

識見の作

英雄は洞明なる識見を存せざるべからず、識見洞明ならざれば、其見識狭く天下の大勢に通せず、時務を知る能はず、天下の大勢に通せず、時務を知る能はずんば、到底英雄の事業を興す能はず。亦識見正しく洞明ならんば、物に先つて遠通する能はず、一を知て二を知らざる頑物に陥へるの懼れあり、識見の洞明なるものは、心中亂れず志を立て動かす、俗事と小事に離脱せず、福落にして無謀に流れず、姑息陰柔に情落せずして、急激に走らず、大事を憂へず、小事を愼み、己れを察して人を量り、己れの見に由らず他の見に雷同せず、洵に其収拾正明にして、公平無私を以て本領と爲す、之れ實に識見の洞明なるものにあらんば得て存する能はず、それ唯英雄乎、定見を明にして識見を正しく存するものは、それ唯英雄乎。

むとす、之れ狂人無頼漢の故乎。凡人往々狂人無頼漢の舉作を見て、快を叫ぶものあり、快は快なれども順序正しき整然たる壯快にあらず。故に禮節の正しきと陰柔姑息と能く似れり、豪放磊落と粗野無禮と能く似るものなり、請ふ其筋道を正しく區畫して、清濁正邪善惡を混同する勿れ。三軍の將、大聲叱呼、百萬の猛卒を指揮し、破英荒的に山崩れ水沸く底に、突進し敵味方の區なく、互に入り亂れ馬躍り士叫ぶの一刻を、傍らに在りて之を視て、其感如何ぞや、無智無謀に突進して争鬪せしか、或は先きに充分敵の動作を視察して、其識見を洞明にし、作戰計畫せしか、此點は宜しく三軍に將たる識見の感念を存して觀るべし。其兩者の何れに出しか、明かに之を知るを得、故を以て妄りに其徳なく其識なくして豪放磊落を真似る勿れ。英雄の豪放磊落は英雄の識見ありて、豪放磊落を爲すにあり、而かも特更に豪放磊落を粧ふにあらず、豪放磊落を知らずして、無邪氣に無爲に爲すにあり、豪放磊落を豪放磊落と知りて爲すは豪放磊落にあらず、狂人無頼漢の粗野を見て、往々英雄の豪放磊落と同一視することあり、戒め愼むて識見を正しく明に眞面

四二

英雄の眞面目

凡人の不正直

遊遊

八百屋の三助の女

目に識観せよ。

四二

本来英雄は極めて正直眞面目なるものにして、決して毛頭の不正直、假面的のものにあらず、極めて謹直に萬事に熱心なるの性あり。之に反して凡客は極めて横着にうそ八百なるものにして、決して毛頭の正直と眞面目あるものにあらず、亦極めて懶惰に萬事に不熱心に薄情なるものなり。這の識見を洞明にするには、正直眞面目なるものにあらずんば能はず、彼の世間輕薄兒何んぞ識見の洞明あらむや。凡て大事大業を興すものは、識直なる正大の識見ある英雄にあらずんば、得て望む能はず矣。

莊周逍遙遊に云ふ、『小知不及大知。小年不及大年。朝菌不知晦朔。蟪蛄不知春秋。』と、一日の計に窮々乎として解離するものは、一年の計を知らず、百年肉体の衣食に眼光を豆の如くに弄するものは、宇宙無限の眞理を大觀する能す。八百屋の女は大臣の夫人になる理想なし、湯屋の三助は大臣になる野心なし。日本の浪人大陸に躍り出で、新帝國を建立するの妄想ありと雖も、其識見明ならず、雄圖粗野にして忍耐と横着に欠く。日本の婦人西比利亞に

股間に弄す

熊と狐

於て露人を股間に弄弄するの勇あれども、日本の浪人をして皇帝に大陸に即かしめ、親ら皇后になる目的なし。日本の政客小人島に意張るの識あれども、大陸に遊びで銀色人を叱咤するの識見なし。

ア。この混蟲又何をか知ん。自家の經營を計りて、邦家の長計を忘るとは……英雄の識見を存して眞個英雄の識見を行はんと欲するの英雄今那邊に在る乎。今日這の機一髪の大亞細亞を……

上御一人を除く外、眞個絶對的眞面目に邦家を憂ふるもの果して幾人かある、ア……

我邦の男兒何んぞ其慾の淺きや、何んぞ其識の暗きや、何んぞ其見の底きや。我邦に虎は生息せざりき、生息するものはそれ唯狐乎。我邦に象は生息せざりき、生息するものはそれ唯熊乎。狐元來小陰にして、虎の如き大勇なし。熊元來短氣粗野にして、象の如き大量識見なし。英雄の遊戯運動場は虎と象と生息する廣野にあざれば、活動自在の遊戯を爲す能はず。玩弄物を喜ぶものは御祭的の兒か、故に玩弄物の商家店頭には常に小兒群集嗜嗜す。

四三

昔し西班牙のコロンプス渺茫々たる大洋の外、猶世人に知られざる、一新天地の在るあらんと。學理を説き實際を談せしも、人容易に之を信せず。遂に女王の信する所となりて、鐵針を西に向て往くこと數十日、舟夫の己れを怨み、疾疫流行し、食物の欲亡をも意とせず、神に祈りて駛る事、愈々急なれ、漸く亞米利加大陸を發見する事を得たり。

只識見ありと雖も、實行せずんば何等の益なし。之を實行する、唯信念にて上帝の加護を祈りて功あり、之れ人天合一の識を明かに觀るの英雄にあらすんば得て弄する能はず。

嗚呼コロンプスも識見洞明の英雄か。彼れが水夫の怨みを意にせざりしは、唯識見に在る而已矣。

河東の關羽派那の張飛備と相善し、劉備起るや二人之れに従ふ。又那那の諸葛亮孔明襄陽の隆中に寓居し、毎に自ら管仲樂毅に比して天下の時務を明に

す。劉備士を司馬徽に訪ふ、徽が曰く、「時務を識るものは俊傑にあり、此間自ら伏龍鳳雛有り、諸葛孔明と龐士元なり」と、備亦謂て曰く、「諸葛孔明は臥龍なり」と。司馬徽の活眼何んぞ巨なるや、時務を識るものは俊傑なりと孔明を指し示すの識見高しと言はざるべからず。劉備も亦孔明を臥龍と看るの眼識高しと言はざるべからず。即ち劉備三たび往て漸く草廬に亮に見ゆることを得たり、備禮を厚くして策を訪ふ、亮曰く、「操百萬の衆を擁し、天子を挾んで諸侯に令す、此れ誠に與に鋒を争ふべからず、孫權江東に據有し、國險にして而して民附く、與に援と爲すべくして、圖るべからず、荊州は武を用ふるの國なり、益州は險塞沃野千里天府の土なり、若し荆益を跨有して其嚴阻を保ち、天下變あらば荊州の軍は宛洛に向ひ、益州の衆は秦州に出でなば、孰れが箝食壺漿して、以て將軍を迎へざらむ乎」と、備が曰く、「善し」と。

何んぞそれ諸葛孔明が識見の洞明にして達觀なるや、備默聽久ふして只一言の「善し」而已。彼れを識り是を識り、彼我互に識りて以て天下を達觀する

の識見豈偉大にあらずや、アー美なる哉、這個英靈達觀の識見復見るべからず。

サキソニイの貧民の子にルウテレンなるものあり、父の遺訓に従ひ、教法の正義を學ばんと欲し、エルホルトの大學に入り、羅甸語の聖教を研究す。嘗て羅馬に往き、其教官等と議論し、淺學取るに足らずとし。其後神學博士の號を得、専ら力を聖經に盡したりしが、羅馬法王レオ十世、セントビートルの禮拜堂を建てんとする、勸金の寄附せば、上帝其罪を赦し給ふべしとて、無智蒙昧の人民を欺きけるを見て、ルウテレン爲めに九十五條の反駁書を草せり。法王大に怒りルウテレンを拘問せんとす。然れどもサキソニイ侯、之を保護するを以て果さず。法王遂にルウテレンを破門し、チャールス五世、亦異教として、之を嚴禁せしと雖も、「聖經に因り、我説を辨難するに非ずんば、持論を曲ぐる事能はず」と、斷乎として宗教改革の事に従事し、其著書中、羅馬教法の改正に付きて、日耳曼國の基督教徒に與ふる云ふ書の如き、バビロンの囚撃と云ふ書の如き、最も能く羅馬教の不正なる處を痛論して餘すなし、

此の争終に帝軍とサキソニイ侯との戦と爲り、紀元一千五百五十二年の、パツニー會議に於て、漸く布教の自由を許せり。是れ即ちプロテスタントにして、耶蘇新教の事なり。……マルチンルウテレンの其識見の明確なる、邪説を戒め神教の粹を發揚し、信者をして自在ならしむ。實にルウテレンに由て耶蘇教の小乗を打破し、大乘を現はしたるの功、没して没すべからざるの偉勳あり。其識見の餘影現今猶ほ歐米新教派の分野を支配せり。豈に大なる哉。大なる事業家のみ英雄にあらず、小なる厭世家亦英雄なり。大は宇宙に通じて小は微塵に徹す、其識見を定めて明にする、之れ眞英雄なり。這の眞英雄にし、始めて識見を談じ、識見を觀るを得。

俳人一茶、加州江戸へ參勤の途次信州柏原に宿す、一茶の名を聞き近臣をして招かしむ、一茶晝間尙ほ燈下に睡り答ふることなし、暫くして覺め垢面弊衣出て接す、使臣命を傳ふ一茶應せずして曰く、「聞かんと欲せば自ら來れ」と、使臣復命す、候其氣象の高きに服し、再び使臣を遣りて歌を求む其作に曰く、

何のその百萬石は物の數

其達觀の識高くして、當時三百諸侯の上位なる、加州侯を十七文字に玩弄せし手段に至りては、其權識頗る雄大なりき。アー這の吟咏的雅界の英雄……侯見て意とせず、金七兩を贈る、後七年を経て、侯再び同驛に宿し、復た使臣をして之を訪はしめしに、先年贈る所の金子、依然封緘のまゝ、室の一隅に在り、何等の清にして涼しきさびたる古談かな、眞に愛すべし。自個の靈心を達觀して識見洞明ならざれば、安んぞ天下を玩弄して宇宙を大觀する能はず。英雄も此に至りて其絶靈の境界乎。

千代尼靈々洞々たる大安心を得て、いよ／＼憎きほどの觀念に、靜かなる風のそよ吹くを、

ともかくも風にまかせて枯尾ばな

識見乎。

アー、何等の活自在なる、さびしき、靜なる、やさしき、すさき、靈觀なる

極めて大熱心に事業に志して、極めて其經營に冷觀に洞察を弄せずんば、眞

個英雄的の底の識見を備ふる能はず。十七世紀の頃、英國にてはベイコン歸納論理の法を説き、佛國にてはデカルト萬物の眞理を研究し、和蘭にスピノサ、日耳曼にライプニツク等の、學者出で來り、ガアリツクが排氣鐘、ハアペイが血液循環の理、亦此時代の發明とす。且つ文學にては、詩文にリアンモリユル、戯作にフォンテイル、其他ボシユアーバスカル等の文士續き出で、亦英國にてジョンソンフレツチャーマツシソングー等の記者を始め、ミルトンの説話詩、テイロルの散文、バンヤンの譬喻等、其最なるものなり。美術には(フランダー)學校より妙光を放ち、ルウベンスツアンダア等の名士ありたりき。

識見の本領とする所は、眞の眞、粹の粹を發揮するの根本なれば、必ず輕々に見るべからず。識見を洞明にして其大を極むれば、宇宙を包容す、識見を密にして其細微を極むれば、一粒の裡に入る。識見は肉眼を弄するの必要なし。暗中明界を問はず、從容默坐靜息の一刻に於て、古今に通じ古人と談じ、宇宙各星土を獨歩し、自在に樂しむことを得。故に英雄は識見自ら高く廣くし

て、敢て區々せざるを以ての故に、一見愚人の如し、ア一識見の遠視は、それ
唯英雄にあらざれば能はざる乎。

五〇

●英雄の至誠

「則允就厥中」とは堯の舜に授くる所なり、「人心惟危道心是微」は精惟一允執厥中」とは舜の禹に授くる所なり。夫れ堯舜禹は天下の大聖的英雄なり、天下の大聖的英雄が天下を以て相傳ふるは天下の大事なり、天下の大聖を以て天下の大事を行ふ、其れ唯至誠乎。……

大なるものを求めて大なるものは至誠なり、小なるものを求めて小なるものは至誠なり、至誠あるものにあらざれば一身を脩め、一家を齊へ、一國を治め、一天下を平にする能はず。天下の俗士凡客は至誠を守ることを得ずして、日々刻々人心是れ危きのみ、獨り英雄は道心存して唯至誠あるのみ、人心と道心と異なることある所以のものは、人心は形氣の私に生じ、道心は性命の正しきに原づくなり。この形氣の私を離れ、性命の正しきに原づくものは、區々一身一家の利害に離離弱々焉たるもの、倒底夢にだも存する能はざる

堯舜の至誠

一身一家
下國一天

道心と人
心と

所なり、英雄の凡各俗士に比して、小刀細工を弄せざるは、唯無爲の道心たる至誠を以ての故のみ。

至誠は宇宙に充塞して息まんと欲して、息むべきものにあらす、息むべき

従心所欲不踰矩

靈心至誠

又至誠は宇宙に充塞して息まんと欲して、息むべきものにあらす、息むべきは至誠にあらず、斯の如く此の紙に筆を以て書くも、亦至誠の作用なり。至誠を存するものは心廣く體胖なり、心廣く體胖なれば萬事萬端從容として自適することを得、從容として自適することを得れば、『従心所欲不踰矩』の境に達し、此の境に進むを得ば、天下の事亦足れり、人と生れて唯絶對的に此の境に進むの道を講じ毛頭油断すべからず。

鳴呼、孔子、ソクラテス、コルネリアス、ビヌタラジ、ルーン、プレーベル、

靈心至誠を以て動かさるときは、天を貫き地を破り、宇宙を一双眉の底に大觀するを得。而して天を怨みず、人を尤めず、己れを欺かず、己れを信じ、己れを慎み、己れを守り、他を願はず、獨りを樂み、中庸以て五福に歸し六極に去り、以て天下を獨歩す。

至誠の順

山崎闇齋の戒

至誠の道

カント等、皆至誠貫天的の英雄なり、而かも當世にありて不遇なれども、令名令徳光輝を後世に放つ、豈偉大にあらずや、是れ爲至誠の作用なり。至誠は順境の平意なる安樂のみにあらず、逆境の困苦なる艱難なる境もあり、至誠其もの靈極は順逆、上下、貴賤、賢愚、苦樂の區別なきも、其作用を弄するに名分正しく活弄せずんば、往々小人狐狸の偽的至誠に欺かるゝことあり、昔しは山崎闇齋嘗て其弟子に問ふて云けるやう、『若し支那より孔子を大將として孟子を副將として我國を攻ることあらば吾輩孔孟の道を奉ずるの黨如何すべき』と門人の内一人も之れに答ふる者なし、闇齋是に於て自ら答へて云ふ、『吾輩亦將に堅を破り銳を執り一戦して孔孟を擒にし以て國恩に報すべし是れ孔孟の道なり』と弟子大に孔孟の活道を感服せりとぞ。

夫れ道の學問は詞章訓話の謂に非るや論なし、其根本的眞粹を得るを要と爲す、故に釋迦、孔子、基督、ソクラテス、孟子、等の哲的英雄が至誠の道を未だ言はざる以前に至誠の道あることを知らずんばあるべからず、彼等が世に現れ出でし後、始めて至誠の道現れたるにあらず、至誠は人爲にあらず、

誠に天爲にして自然的なる無爲なり。
 這個無爲なる至誠を宇宙間の萬物悉く天有せざるなきも、形氣人心利慾に區畫せられ其光明の靈光を失ひ居れり、故に其作用活潑々地底に自在なる能はず。唯獨り英雄は區々たる人心形氣利害に離脱せず、胸中餘裕ありて進退縮々然として、天爲的自然なる無爲を樂んで至誠を守る、因て其業を興し其事を執るや、大にして廣く高くして深く、天下と與に樂しみ、萬人と與に憂へ、天地を一貫し、乾坤に徹底し、古今に通じ、宇宙に充塞す。
 英雄の潜龍時代天下舉げて英雄たることを知らず、此の時に於て彼れ凡人俗物と比して、其境遇に應じたる業を執らざるべからず。其業を執るに毛頭の區別を爲さざるなり、湯屋の三助時代も、荷車引時代も、土方時代も、乞食時代も、唯至誠を以て全力を注ぐ。此の故に湯屋の三助を務めて力餘らず、直に三軍に將師となりて力足らざることなし、荷車を引き直に宰相となりて亦同じ、土持の勞働變じて、九五の冠を弄して亦同じ、乞食變じて宇宙の真理を説く亦同じ。唯其時務を執る至誠の眞面目にあるのみ、此の任に當る其

英雄の全

唯英雄乎。

凡人は大事を恐れて小事を愼まず、小事を小にして大事を大にす、之れ俗士の常なり。英雄は大事を恐れず小事を愼み、大事を大にせず、小事を小とせず。螻蛄を見るも眞理を觀るも同一なり、無邪氣なる小兒相手に戯るゝ時も。天下に號令して烈國を震撼なましむる時も同一なり。物自ら數あり天命は動かすべからず、噫、何んぞ區々せんや、と從容する裡にも至誠の眞面目ありて、之を言はしむるなり。生る時知らず、死する時知らず、明日死期の數定まり居ることを知らずして、而かも眞面目に百年の長計を畫す。噫呼。其れ唯之を知りて迫まらず、從容至誠を弄して、息まざるものは、獨り唯英雄にある乎。……

大事と小

眼前と無

眼前を樂むものは凡人なり、無限を樂むものは英雄なり、己れに利あらざれば進まざるは小人なり、道の爲めに退かざる英雄なり、己れに盡して退くは小人なり、天下に盡して進むは英雄なり、死期將に迫りて驚くは小人なり、死期將に迫らむとして驚かざるは英雄なり、死期將に迫まりて百事を擲つは

凡客なり、死期將に迫らむとして前途の長計を畫して息まざるは英雄なり。二者何れも薄紙一枚の差のみ、而かも一は肉骸に執着し、一は至誠を弄せり。死するまで形骸に執着するものは凡俗なり、死して猶息まざるものは英雄の至誠なり。這個個中の至誠……

米軍は何を以てか、英兵の鋒先に當る可きか、父が最愛の林檎樹を、切斷して虚言を吐かざる幼童、急潮に跳り入りて可憐の娘子を失ひたる、狂母の手に返し與へし少年、米國人民をして、永く國の父なりと絶叫せしめたる、ジョージワシントンと擧げて大將とし、ゼノイルンフランクリンヌチイブン等の諸名士を以て、之が參謀たらしむ。時に軍器彈藥乏しく、百方苦慮して漸く兵仗を整ひ、紀元一千七百七十六年、大に英軍をボストンに破り、城堡を返奪す。爰に於て軍容一變。而してカナダにある米軍は進みて、クキベツクを攻めしが、塞威嚴烈動作意の如くならず。加ふるに督將飛丸の下に死し、遂に英軍をしてカナダを再領せしめけり。曩にボストンに敗れたる英軍、路を轉じてロツクアイランドに出で、ホツ將軍の兵に合し、進んでニュウヨル

クに入らんとす。ワシントン豫め之を知り、期に先ちて敵を攘はんと欲し、ホツ前軍の三隊を敗り、追ふて之を皆殺にせんとす、砲聲背后に雷鳴し、彈丸雨の如く眼前に來り、左右に敵を受け、死亡殆んど盡き、生きて陣に還る者、僅かに十の一。

斯の如き苦境なる道戦を経て、前後七年間英軍と闘ひ、其間に(ヒラデルヒヤ)會議を開き、一千七百八十二年、英國政府は和議を講せんことを請ひ、米國は遂に不羈獨立の國と爲り、一千七百八十九年憲法全く成り、ワシントン擧げられて大統領、ジョンアダム之れが副領たり。而して今日の富豪なる米國の基を開けり……

誰れか之れ至誠にあらずんば、此の行きがたきを行き、通じがたきを通じ、破りがたきを破り、達しがたきを達するを得んや、嗚呼、唯ワシントンの至誠の一念乎。

二の谷の銘ある兜を頂だき、緋緘の鎧の上には雲龍を畫ける陣羽織を着し、大鹿毛の駿馬に跨り、琵琶の湖水、唐崎の松を目的に渡るは、當年の名將明

智左馬亮光春。彼れは實に勇あり、信あり、智あり、義あるの英雄なり、惜哉、當時道境に遇せり、然れども彼れの正しき、公私の區を明にする點は世之を知れり。

江州に遊び琵琶湖に船を泛べ、緑水浪々、復、當年左馬亮の壯舉を見るべからず。只唐崎の松は依然として、彼れの至誠的名譽を歴史に存するのみ。嗚呼、回首して實に三百年以前の事なりき。坂本城荒草の裡、月下狐狸の泣聲を聞くのみ。唯其れ形骸は一時にして、至誠は萬世に通ずる乎。之を弄する、其れ唯英雄に在る乎。

有爲の僞樂を弄するものは凡質なり、無爲の天樂を弄し至誠を守るものは英雄なり。英雄に非んば成敗利鈍を問はず、至誠を樂まざりき、至誠の本領には利害の好悪なし。故に成りて敢て喜ばず、敗れて敢て憂へず、唯至誠乎。關ヶ原の役、大谷吉隆義氣ある至誠の名將なれども、惡疾に罹りて與にあり、平塚因幡守爲廣をして代て其軍を指揮せしむ。爲廣西軍の利あらざるを知り、獲る所の首級と和歌一首とを以て、吉隆に贈て曰く、「此を以て冥土の土宜と

なし、請ふ速かに後圖を爲せ某も亦此より訣れんと。

名のため捨つる命は惜からじ

ついにどまらぬ浮世とおもへば

と、吉隆泣て使者に謂て曰く、「嗚呼平塚、武あり文あり以て冥土の行を冊にするに足る」と、乃ち返歌して、曰く、

契りあらは六乃ちまたにしはしまて

おくれ先だつことはありとも

余、嘗て關ヶ原を過ぎ、當年を追想し懷舊の情に堪へず、ア、東軍の勢に反して、西軍何んぞ振はざるや、犬か猫か金吾の無節義、唯獨り大谷刑部吉隆ある而已矣。伊吹山頭秋風吹て盡きず、伊吹山頭秋風吹て盡きず。

噫、至誠は天の道なり、之を誠にするは人の道なり。誠は勉めずして中たり、思はずして得、從容として道に中たるは聖哲的英雄なり。而して至誠あるときは則ち明なり、明なるときは則ち至誠あり、

聖哲の英雄、周の文王能く至誠の道に則る乎……

區々凡筆を弄し、至誠の本領を失はんよりは、爰に中庸の二十六章を掲げ来りて示さむ。

「至誠は息むこと無し、息まざるときは則ち久し、久しきときは則ち微しあり、微しあるときは則ち悠遠なり、悠遠なるときは則ち博厚なり、博厚なるときは則ち高明なり、博厚は物を載する所以なり、以て物を成す所なり、博厚は地に配す高明は天に配す悠久は疆り無し、悠久は如き者は見えずして章はるゝ、動かすして變り、爲すること無ふして成る、天地の道一言にして盡く可きなり、其物たる貳つならず則ち其物を生ずること測られず、天地の道博し厚し高し明かなり悠し久し、今夫れ天は斯の昭々の多き其窮り無きに及んでなり日月星辰繋り萬物覆はるゝ、今夫れ地は一撮土の多きなり其厚なるに及んで非嶽を載せて重しとせず河海を振めて洩さず萬物載せらる、今夫れ山は一卷石の多きなり其廣大なるに及んでは艸木之を生ひ禽獸之に居り寶藏興る、今夫れ水は一勺の多きなり其測られざるに及では鼃鼃蛟龍魚鼈生り貨財殖る。

詩云維天之命於穆不已
蓋し天の天たる所以を曰ふなり、
於乎不顯文王之德之純
蓋し文王の文たる所以を曰ふなり、純にして亦已す。

●英雄の節義

節義

紙製人形

「不義而富且貴於我如浮雲」不義を弄して利を喜ぶは俗質凡客の所爲なり、正義を重んじ利を見て走らず、不義を戒るものは唯英雄乎。噫、英雄にあらずんば不節を遠ざけ不義を叱し、正節正義を弄する能はざる乎……節操と正義なきものは人にして人にあらず、宛かも紙製の人形の如し、紙製の人形は本来人形なるを以て害なしと雖も、彼の無節不義の人は却て大なる害あり、天を怨み人を尤め己れを欺き、終始安んずる底なし、豈憐むべきにあらずや。

伯夷叔齊

一點毛頭の野心なし

古の英雄が節義を行ふを視るに、公私と大小と其區を明に大義明分を盡せり。彼の伯夷叔齊の如きは猛烈にして當るべからざる大節義を了せり。當時威望赫々たりし、武王を道路に戒むるの勇節に至りては、誰れか及ぶものあらんや。彼れの胸中には一點毛頭の野心なし、唯絶對的に道義の一念ある而已矣。故に彼れが胸中より發する靈光より觀れば、相手が乞食であらふが、天子であらざるや。

君子義以爲上

燕國篡位

おらふが、不節不義を戒むるに何等の區なし。又不節不義を、相手の上下貴賤に因て、戒るに於ては、是れ節義にあらず。下民の不節義を戒めて、貴族の不節義を戒めざるは、之れ節義を賊するなり。——噫——夷齊の節義の高くして堅きこと、豈廣大にあらずや。子路問ふて曰く、「君子尚勇乎。」孔子答て曰く、「君子義以爲上」と。君子にして勇ありて義なければ亂を爲す、小人にして勇ありて義なければ盜を爲す。明の成祖帝位に即き、六月魏國公除輝祖の爵を削り、輝祖燕の師、江を渡るに當て、猶兵を引て力戰す、京師陥へり、諸武臣咸與迎附勸進す、輝祖獨り屈せず、乃ち私第に幽す。方孝儒亦執はれ屈せず、哀聲殿陛に徹す、帝曰く、「予初心周公成王を補くるに倣はんと欲する耳。」孝儒對て曰く、「成王安かに在る。」帝曰く、「先生大に苦しむ勿れ此れ吾家事のみ」と、因りて筆を授けて即位の詔を草せしむ、孝儒地に擲ち哭して且つ晉る、復た之れを強ゆ、乃ち……燕賊篡位……の四字を大書す。帝大に怒り命じて九族を夷ひ、親故座して死するもの八百餘人、一人を誅する毎に必ず孝儒をして之を視せしむ、而し

て孝備節義を守りて終に變せず。嗚呼、偉なる哉、方孝備其節や高し其義や固し、眞個正烈の英雄にあらずんば、此の節義の任に當る能はざる乎。……天下の事其れたる節義か、彼れ不義と無節を以て來るとも、我れ正義と清節を以て應せんか、彼れ遂に其正しきに化す。其化する所以たるや、節義に於て門戸なし、門戸を開放して、徃くものは追はず來るものは拒まず、往來進退唯だ節義にあるのみ。進むに節義を以て往來し、退くに節義を以て往來す。生殺與奪たい節義にあり、彼れを生ずも、殺すも、與ふるも、奪ふも、節義にあるか。之を弄する英雄にある乎。小幡信世は石田三成の寵臣、關ヶ原の役、軍破れ捕へらる、家康信世を召し三成の在を語る、對て曰く、「臣が頭斷つべし。主の居處は告ぐべからず」と、家康曰く、「天下の義士なり」と、特に之を宥す、信世出て直に一僧家に入て曰く、「吾は石田氏の臣、小幡助六也。窮困となり、誅戮を分とす。固らざりき今日寛宥に遇はんとは然れども、年を偷み辱を受くるは死するに如かざるなり、願くは、死後吾が骨を埋めよ」と、及に伏して死す、寺僧以て聞す、家康爲めに嘆惜す。

節義を盡すに於ては敵味方の區なし、盜賊と雖も其黨中は節義を以て成立せり。吾亞細亞洲には歐人をして君臨せしめず、之れ吾亞洲人士の義なり。彼れ歐人も亦然るならむ。

口に節義を説くの徒、筆に節義を書くの徒、又何をか節義を知らんや、節義は講釋すべきものにあらず、即今や眼底下に存在するものなり。講釋にて了るべき節義ならば、(靖獻遺言)を携ふるにしくはなし、其靖獻遺言も古人が節義の反古のみ。二十世紀の今日は二十世紀今日的の大節義あり、眼光を壯大にし活眼を開かずんば、大節義を弄する能はず。英雄は英雄底の節義あり、蟻虫一疋を助くるも義なり、歐洲の全土を黒燒にするも義なり。節義は生育助命するのみにあらず、其分を明にするにあらずんば、眞個の節義を弄する能はず、眞個の節義を弄する能はずんば、眞個の英雄にあらず。

一人は一人底の節義あり、一家は一家底の節義あり、一國は一國底の節義あり、一洲は一洲底の節義あり、一天下は一天下底の節義あり。今日外交策に眞成の節義を履んで進退する國は那邊にあるか、我邦の如き節義を履んで外

王道と節義

節義振ふ
國興る

六六
交を策するの國、他に亦あるか、歐洲列國の節義或るときは危哉。我れ節義を履んで彼れ履まず、猶は知らずして行く之れ愚なり、愚人の節義は節義にあらず、彼れを知り己れを顧みて、生かすべきは助け、殺すべきは罰す之れ節義なり、之れ英雄の節義なり。愚直一片苟安姑息の節義は節義に似て節義にあらず、所謂小人の節義ならんか小人の節義今日二十世紀虎狼活動の舞臺に何の要かある。方今の世界は王道振はず覇又覇にあらざる虎狼の世なり、虎狼の世に處するには宜しく之に當るの節義なかるべからず。王道の世には王道の節義あり、霸道の世には霸道の節義あり、虎狼の世には虎狼の節義あり。之を明かに知り遠く百年の計を策し、彼れをして節義を履ましめ、以て戒む、其れ唯英雄に在る乎。

節義振へば一國發達す、節義振はざれば一國亡ぶ、一人一家亦然り。彼の明治維新前に興りし英雄の本領皆節義を以て立てり、幕府の横着を戒め、勤王の正義を發揚せしは、皆節義に基づきて起れり。節義は一時にあらずして萬世に通ずるものなり、節義は一人に止まらずして萬人を動すものなり、節義

鄭成功の節義

田横の故

は天地を貫き乾坤を獨歩するものなり。嗚呼節義。

滿洲長白山の下に愛眞覺羅氏起りて、南下の勢急なり、是に於て天下又無事太平にあらず。朱明の皇室簪水を履む底に、僅かに揚子江以南に虚器を擁し。世は愈々亂れ、海には日本の不平徒八幡船を弄して出沒窮りなし。陸には盜賊蜂起して人心安からず。而して北の方覺羅氏南面九五の位置を燕京に固めんと欲す、期熟して其勢力大河急流もたゝならず。明朝の鼎足機一髮、鄭芝龍あれども清に歸し、其節義見るに足らず。此時に當りて、唯獨り鄭成功ありて、南の方福健省の一隅に天子を奉じ、北賊を戒め身終に臺洲に亡ぶる迄で、其猛烈なる節義を變せざりき。嗟呼……彼れは滿身を節義に包みたるの英雄なり、彼れは區々俗利害を知らざる正烈的節義の英雄なり、否知らざるにあらず、大に節義の利害を知りたるの英雄なり。明室亡び清庭成功を目して敵ながら、之を亂臣賊子と見ず、古の田横の故事に則りて、特に成功及び子の經を、南安に歸葬するを許す。ア一亦節義なる哉。

實にして
節義を守
るは難し

成政三

當年の大
剛を以て
目せらる

暖衣美食安坐高臥の人に向つて節義を語るに足らず、如何となれば、富んで驕らざるは安し、貧にして節義を守るは難し。貧にして節義を守る、誠に士を以て任ずる底の客にあらずんば、得て能はざるなり。前而既に戈を交へ、後方亦彈丸雨の如く、叫聲乾坤に徹し、此裡無爲にして藁中に高臥し、野聲宛かも雷のごとく、從容成敗の機を知るの英雄にあらずんば、眞個英雄的の底の節義を談するに足らず。

佐々成政は秀吉の忌む所となり、石田三成は家庭の忌む所となりて、三百年以來、敢て稱譽せられざりき。惜哉兩士とも節義ある英烈的の英雄なりしを、ア一區々自家經營の爲めに、天下の名士を傷つくるには、ア……余、越中富山に遊び神通川畔平城の邊り、當年の大剛佐々内藏助成政が意氣群雄を呑むの概あると追想せり。彼れは頗る節義に堅き英雄なり、彼れが前田利家と共に敵の強勇稻葉又右衛門を美濃輕海の役に倒すや、而かも互に功を譲りて其首級を取らず、『賞賜こそ其首播き取りて、信長公の前に致さるべきなり』と、共に繰りかへすこと多時。恰かも好し柴田勝家來り此様を眺めて、

多くは逆
境に妙味
を存す

石田三成
の節義

『左様のことなれば某が其首打ち落して本陣へ持參致すべければ御兩人も一緒に參らるへし』と、斯くて信長が前に到り、勝家事の仔細を物語りければ、信長殊の外これを賞し、三士が拳手は當時の美談として、各陣中に雷傳しけりぞぞ。

凡て順境に妙味あらずして、多くは逆境に妙味を存す。順境の人は平凡者にして、逆境の士に氣骨多し。而かも逆境者にあらずんば氣骨備はらず、而して逆境者功多くして、世の歡迎を受けず。節義を看る又逆境者にあり、逆境者にあらずんば節義を視る能はず、順境の節義何かあらん。

石田三成は徳川氏には大禁物なり、其因する所家康に不利なればなり。己れに不利なるを以て天下の義士を罵す、嗟呼、是果して是耶、非果して非耶。

ア

彼れは實に多少奸才と俗智はありたれども、節義は没せざりき。關ヶ原の役破れ彼れ西國に遁れ高津と共に再舉を計るの策を持し、溪谷に食を斷つこと二晝夜、終に泄痢を催はし、其苦痛云ふべからず。彼れは逆境に遇ふて一身

の節義を守ること斯の如し。

小袖を擲つ

捕はれて田中吉政が邸にあり家康其境遇を哀れみ、三成行長安國寺の三名に小袖一枚宛をあたふ、行長是れを見て「寒さ凌ぐべし」とて賜る段添く存申す」と云ひ、安國寺は早速着るべし」とて即坐に着用す。彼れ三成獨り是を手にたも觸れず、「こは何誰より賜はりしものか」と問ふ。上様より「答ふれば、『上様どは誰ぞ』と更らに云ふ、内府公のことなりと答ふるを聞くや、慨然として天を仰ぎ、『惜てく上様はツイ此頃御他界ありたるに早や内府を上様を言ひつるよ』と、遂ひに小袖を擲ちて着せず、……嗟呼……この節義、此の節義なかるべからず。此の節義ありて彼れが居城の佐和山は美麗ならずして、居間には荒壁のみにて、上塗りだに施さず、城中多くは板張りにて、障子襖は反古にて張りたとは。以て彼れが將來に畫ける理想の壮志を知るに足る。審の節義は雀之を知る、鳥の節義は鳥之を知る、婦人の節義は婦人之を知る、乞食の節義は乞食之を知る、只獨知る能はざる節義は其唯英雄の節義乎。英雄の節義を知らんと欲せば、宜く英雄の節義を存して知れ。嗟呼英雄之節義。

●英雄の度量

一天蒼空の雲

一天蒼空微塵底の浮雲なき靈象は之れ英雄の度量乎、白浪滔々鐵艦鯨魚を容れて海淵なるは之れ英雄の度量乎。宇宙を呑み、乾坤を吐き、山嶽河海を肉體と爲し、滿天下の人心を支配し、古今の英雄を叱咤睥睨し、萬世を打つて一丸底に大觀するは之れ英雄の度量にあらずして何ぞや、大なる哉、英雄の度量、美なる哉、英雄の度量。

豆の如き度量

度量の至極に至つては其人躬ら度る能はず、度量の至靈に至つては其人躬ら量る能はず。度り量らるべき度量なれば之れ小人凡質の度量にして、則ち英雄の度量にあらず、英雄の度量は天空海淵と其妙を同ふして、英雄其人と雖も其邊版を知る能はず、唯無爲なる而已。小人凡客徒らに、豆の如き眼孔を以て、彼の無爲無量的英雄の度量を見んと欲す、恰かも螻蟻が大鯨に對するに似たり。觀よ大英雄の大度量を大心眼以て觀よ。

島國根性は百萬の財あれば直に資産家なりと誇りて足れりと爲す、位大臣に
なれば直に天下に驕りて足れりと爲す。而して僅少の利に喜び、虚譽に狂奔
し、一喝の外威に恐怖し、遠圖の大利を去りて、眼前の小利に齷齪窮々す。
ア一何等の虫量的島國の根性か、其度量の狭少笑ふべし。大利を得て喜ばざ
るものは大損に遇て憂へず、大損に遇て平氣なるものにあらざれば大利を得
る能はず。大利を得んと欲せば、宜しく其度量を大にせざるべからず。
亞細亞の天地を経綸せんと欲せば、歐、亞の天地を経綸するの策ありて、漸
く亞細亞の天地を経綸するを得。物の數として茶桶に水を満たしむれば、散
じて持ち運ぶ能はず、八分目に永を容れて漸く運動なすを得。之れ數にして
度量の餘地なり、此餘地ありて始めて萬事を理するを得。世の所謂英雄なる
ものゝ度量は即ち此餘地の最も大なるものなり。
昔しは北條時宗鎌倉の一隅にありて、蒙古の大軍を玄海灘に魚腹に葬らしむ、
其猛烈の大勇從容追らざる度量愛すべし。此の度量あらずんば倍臣にして天
下を叱咤し、百萬の軍を坐して弄する能はず。

度量は横着にあらず、度量は極めて眞面目にして沈深着實に存在するものな
り。又度量は靜肅なるのみにあらずして、萬籟騒々の裡にあるものなり。這
の妙趣は宜しく英雄の度量を觀るの度量眼を以て弄せよ、壯大なる敢て度量
にあらず、狭少なる敢て狭量にあらず。沈着を目して度量とする勿れ、輕粗
を目して度量なしとする勿れ。如何なるか眞個英雄底の度量なるものは……
度りて量り得べきは英雄の度量にあらず、終身如何なる無邊の度量を用ひた
りてと盡きず、亦毛頭用ひざることを餘らず、餘ることなく、欲することなく、
圓滿無量の裡に度量なるものあり。如何なるか、之れ圓滿無量の度量、宜しく
無爲圓滿無量を以て其度量を知れ。
天、無爲を以て地を覆ひ、而して天自ら知らず、地、無爲を以て萬物を育し、
而して地自ら知らず。ア、遠の天地の度量、誰れか能く之れに當らん、英雄
の度量も亦斯の如き乎。
莊周天地篇に説て曰く、『忘乎物、忘乎天、己れを忘るゝの人は之れ天に合す
るの度量乎。』

この度量ありて六孫王樞基は吟せり、

あはれども君たにいはい戀わびて

しなん命もをしからなくに

宇宙を包み、乾坤を吐吞するの量以て、而かも凡々と戯々して、喜怒哀樂を弄する、やさしき量は那邊に存在す。天下を経綸するの量ありて經綸せず、大不平を懷きて不平を知らず、大野心を包藏して大野心を弄せず、草廬に高臥して其資を知らず、王侯に道に遇ふて心を動かさず、權家の高門を過ぎて冷眼視し、萬金を見て瓦礫と看過し、美人を見て鬪體視し、光輝ある勳章の大將を目して土人形と冷過し、帝王の盛装を見て猿芝居と冷觀し、乞食の惡臭を何んと香ふや。弄し去り弄し來りて、何處を度量と視るか。千軍萬馬を叱咤する軍人を見て、英雄の度量を調査せんとするか、漸く笑を呈せんとして、言ふ能はざる無邪氣の兒を見て、英雄の度量を調査せんとするか、何れも是にして非なり、非にして是なり、請ふ更に是非意外に弄觀せよ。

笑ふべきは笑ひ

笑ふべきときに笑ひ、怒るべきときに怒り、喜ぶべきときに喜び、哀むべき

邪邊に存

吾而猿に背たり

ときに哀み、樂むべきときに樂む。之れ度量平。善人を容るゝ之れ度量か、惡人を容るゝ之れ狭量か。戒むべきは大に戒め、叱すべきは大に叱す、之れ度量平。

而して天地震動、百萬の猛敵、我を責むとも、從容として、洒々落落、虛心平氣、何を小僧等がど、やる所に趣妙の存するあり。其所を能く觀せよ。……惡公背て戯れに侍臣に謂て曰く、「人、吾而猿に背たり」と謂ふ信か」と、左右相願て敢て答ふるものなし、曾呂新左曰く、「否殿下猿に背たるに非ず、猿殿下に背たるなり」と、是非何れにあるか。之を笑ふ度量か、之を怒る度量か、笑はず怒らず度量か、唯無爲を活弄し去れ。

聖賢君子

聖人とか賢人とか君子とか開山とか祖師とか謂へど、其實皆英雄なり、而して君子の名目つく人は温厚篤實如何にも量ありて、大器の様なれども、其量敢て大ならず、果斷にとぼしく、一個の道樂ものなり。斯の如きものは眞の君子にあらず、亦眞個の英雄にもあらず。一切の聖賢衆生は唯大千沙界の電拂と閃めき、鐵棍一揮し來れば美人皆これ骸骨、社會はこれ小器の俗兒が自

美人皆是骸骨

吉木寒鴉

作せる自縛の牢獄、君子と言ふ者そもく、局量、豪傑といふ者そもく、小兒、浮世三分五厘、乾坤も一喝すれば破碎せん、と妄想を離れて大觀せざれば、眞個獨立獨歩底の英雄の度量を知る能はず。

那露の敗

ナポレオン親ら、五十餘萬の大軍に將として、魯國に攻め入り、たゞ一據みにせんと、將士揚々肥馬に跨り、旗幟翻々北風に飄へり、此時魯國の山河、將に色なからんとす。魯將進軍の勝算なきを卜し、深く彼れをして内地に入らしめ、民舎を毀ち城壁を徹し、糧食の掠むべきなく、險要の守るべきなく、茫然自失して恃む處なからしめんにはど。ナポレオン之を知らず、内地に進入し、一戰の勞するなくして、モスコウに迫る、魯兵十三萬、之を遑へて劇戰すること數回、遂に敗れて、府内を退軍し、直に府民に令して、妻子老幼家財を徹去なきしめ其守備を擲つ、モスコウ府ひつそり人聲だも聞かざらしむ。佛軍得々進入し來りて其案外なるに驚き、暫く途方に異れたりしが、街

アレキサンデルの度量

頭忽ち火起り、焰々天を焦し、四日四夜を経て猶ほ滅せず。美觀のモスコウ府殆んぞ荒れたる黒土と成り代はれり。是に於てナポレオンの軍は宿するに家なく食ふに糧なく、日夜荒野に曝露して、薪水さへも辨せざりき。加ふるに魯兵次第に府外に集り、佛軍の糧道を遮るのみならず、北風身を殺ぎて吹き、兵馬凍結して指を墜し、降雪急にして脛を没す。さすがのナポレオンも、進退こゝに谷まり、將に以て軍を班さんとす。魯軍之を知りて、四面より攻撃戰勢頗る猛烈、鮮血淋漓、宛がら紅雪の積むが如く、其悲憤慘澹たる景狀、言論筆紙の能く盡す處に非ず。初め五十萬と稱へし佛軍、今や生きて還るもの、僅かに三萬。ナポレオンは漸く殘兵を率ゐて、パリに逃れ歸へれり。此敗報の一たび、歐洲各國に達するや、列國競起してパリに進撃す。

斯の如く能くナポレオンを苦めしは、魯帝アレキサンデルなり、彼れアレキサンデル英雄底の山河を賂し、美觀の古都モスコウ府を擲ちて、佛軍五十萬を死地に弄せり。其猛烈と豪壯と遠圖と忍耐と決心と打つて一丸的に大度量を以て九死一生底に大勝を得たり。其度量愛す。……

武略的英
雄の度量

南洲と海
島の度量

東西の四
雄の度量

一念無想

得ることを知つて、失ふことを知らざるは、之れ度量にあらす。能く失ふて能く得、能く損じて能く益す、能く困んで能く達す、之れ武略的の英雄の度量乎。

天下を能く亂し、天下を能く治むるものは、唯其れ度量乎。征討軍參謀として西郷南洲江戸に来る、勝海舟と應酬宜しきを得て、百萬の生靈と美觀の都府とをして、無事平穩其舊觀を今日に在らしむ。之れ單に南洲の度量と海舟の度量に非んば得て得る能はず、而して今や復び此度量處の英雄を看る能はず。

奈翁とアレキサンドルの兩雄は其度量モスコウ府を燒土と爲して、一敗一勝を弄せり。南洲と海舟の兩雄は其度量千代田城を無事に存して、双互微笑の裡、天下を靜觀に弄せり。這の東西四雄が度量は、何れが美にして何れが臭なるか、何れが好にして何れが惡なるか。最早這の問題に對しては、美臭好惡底の區なし、たゞ度量を以て彼れ等の度量を測量せよ。一念無想、靜觀測量し來れば、當年の雄雄、當年の美人も一個の瓦礫的閑體

片影だに
みし

其臨終の
一刻

體のみ、其墓邊を吊ふて雜草茫々、まれに空中、鳥聲を聴き、其跡を見んとして、一點毛頭の片影だになし。ア。度量は宇宙を呑み、氣は乾坤を吐き、膽は五洲を掌中に弄せむとして、佛國に帝王の冠を親ら勝手に自頭に乗せ、霸權歐洲に墜々たるナポレオンも、其臨終の一刻は。

『五月三日、精神不覺となる、されくなる言語の中に（……吾兒……軍隊……デゼツクス……）などいへりしことのみ聞取られたり、彼のマランゴの戦にデゼツクスが回復したる勝利の事を夢見たまへるならん、と付き添ふ人々語合ふ。』

『同四日、絶間なき苦惱始まれり、尊貴なる面貌も次第に瘦せ衰へぬ、此時恰もサンテレン島の霖雨の期に會して、屋外は風雨晦冥咫尺を辨せず、新たに植へ込みたる樹木の爲めに抜き去られたるものあり。』

『五日、帝の臨終の今日に促りしことを覺悟して、人々その枕邊へ寄り集へり、不幸にして彼れが慘酷なる苦惱を受けつゝあることは、屋外に掲げら

れたる英語の容體書に知られたり、夕刻に至りて苦惱の漸々止めると同時に、全身次第に冷感して、天は將に此の名譽の犠牲を享けんとす、此時天氣晴朗となり、午後五時四十五分、夕陽方に紅なる波間に没し、英國守衛兵の砲聲一發その交代期を報する時に、那破嶺の呼吸は全く絶ゆ、侍臣一齊に哭泣して曰く帝崩す。』……

接吻せり

嗚呼……彼等は交るゝ彼の手に接吻せり。マルシヤンは彼が第一總統官たりし時マランゴの戦に被ふりたる軍服一つを此島までも齎らし來れりしが、此時之を取り出して彼の遺骸の上に加へたり。見るに堪へざるの苦惱を受けし彼の面貌は、死前一時の靜穩の爲めに舊時の威容に復したれども、世に希れなりし彼の美相は盡く消へ失せて、却つて其少年に苦刻勉勵したりし此の短小精悍の點のみ存在し、且つ第一總統官の軍服を以て身を掩ひたれば、人をして當時の英雄ボナバルト將軍を想ひ出さしめたりき。……
聖哲英雄も、武的英雄も、臨終の一刻は種々變化あり。平氣あり苦惱あり、臨終の刻、平氣なればとて、敢て好とするに足らず、臨終の刻、苦惱なれば

臨終の刻

詩人グーテ

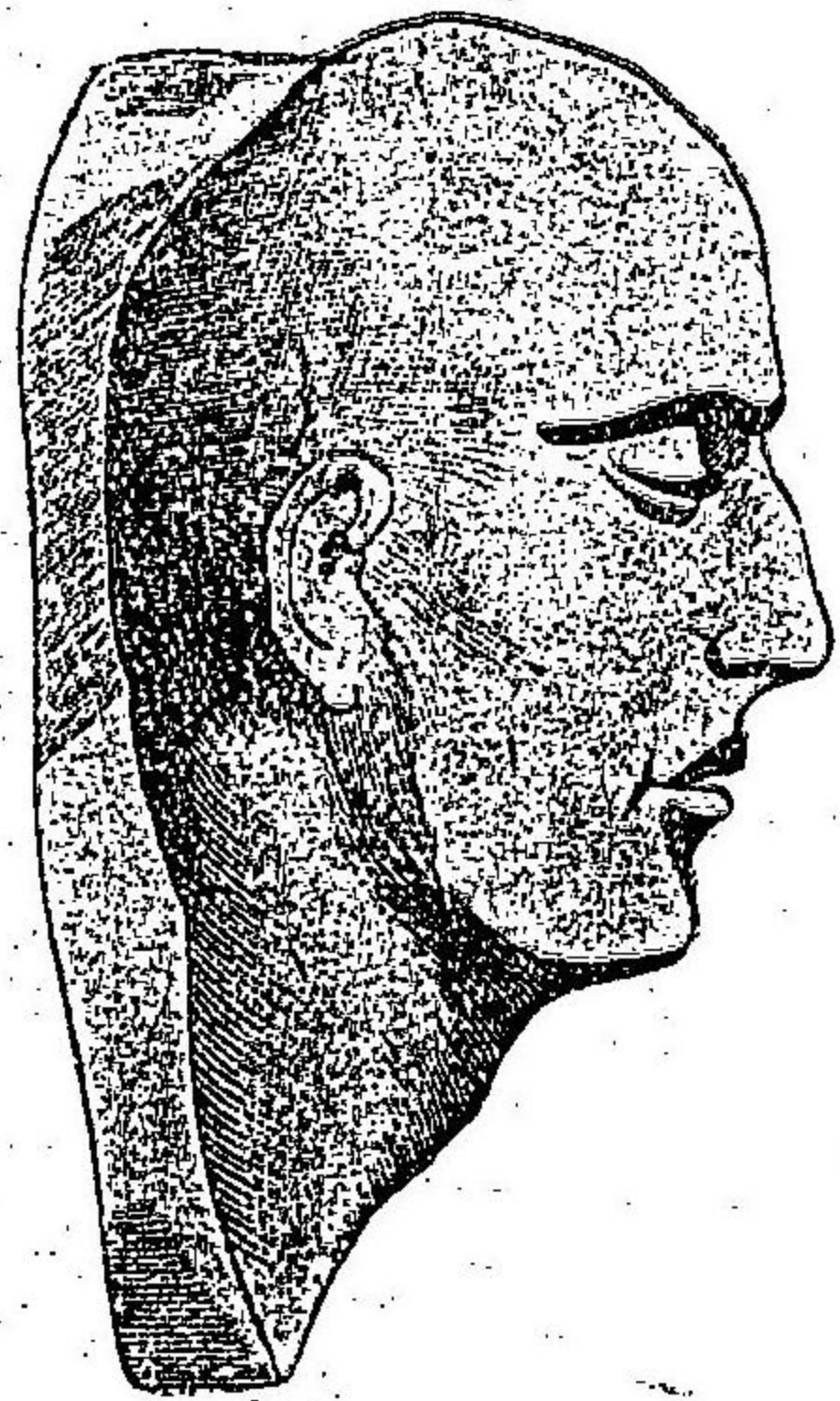
ア、然り

とて、敢て惡とするに足らず。詩人グーテ翁其病死の年より三年前に、室内を運動しながらエツケルマンに語りて曰く、『人の明味は其運命に因りて相變す、惡魔は吾人を促がして日に終極に趣かしむるが如く見ゆるも、其實は善神の吾人を棄つるなり。』既にして又曰く、……『ア、然り、ナポレオンは快男兒なりし、常に明あり常に斷あり其志を行ふに足るの勇を死に抵るまで失はざりしはナポレオンなり。彼れの一生は戦争より戦争に勝利より勝利に進行する半神の状態なりし。彼れは不易恒久唯だ明に於て一生を過こしたりといふも可なり。蓋し彼の運命は斯くも光輝あるものなればなり、既往未だ之を見ず、將來亦恐らくは之なからん』……『グーテ翁も奈彼翁を觀るの度豈ある英雄乎。而かも互に當年相識に於けるを。……』
尾崎學堂曰く、『所謂る推倒一世智勇開拓萬古心胸とは大抵皆な筆舌者流の空言に過ぎず、那翁の如きは之を實行したるものに非ずや、嗚呼快男兒、嗚呼幸運兒、志業未だ半ならずして憤死すと雖も眼して可なり』……
釋宗演一句を弄す、……

推倒一世

帝不足歡因易愛、一榮一辱似交表、
英雄歸土皆凡骨、吾愛那翁開闢體、
天子も囚虜も、英雄も小兒も、美人も盜賊も、君子も三助も、呼吸
のある種のことなり。是非を論じ、好悪を争ひ、版圖擴張など、口角泡沫
に論戦して、遂に血を以て血を洗ふ蝸牛角上の兒闘のみど。巴里那翁の靈廟
に向いて、ひとり問ふたどて、何等の幻形だになし。ア！

奈破崙一世の死面



沼南道の死顔に對して曰く、「風雲を叱咤し、金獸を席巻したる英雄も、死す
れば則ち此の一团肉塊に過ぎず、終生のなすところ果して何事ぞ、單に權力

に過ぎず、而かも權力は決して無限の者にあらず、彼れ之か爲めに彼の如く
勞せしなり、富者が徒らに貨財を其兒孫に譲らむか爲めに、終生營々役々た
ると笑を擇はん、彼れは竟に無窮の人にあらず、予は此の圖中に於ける一大
賤丈夫の死顔面を觀て、聊か一種憐憫の情に禁せず、苟くもホトマツタ河畔
華盛頓の墳墓修種なる處に、徐ろに虔敬の情を起す者は、必ず巴黎城外奈破
崙の靈廟巍然たる邊に、覺えず憐憫の念を興こすべく、又此の死顔面に對
して、予と感をも同ふするなるべし。」
と形而上の眞理より、幻影的肉塊の一時を説けり。彼れ那翁の事業も一時、
沼南の説破も一時、天下の事賞すれば皆善と爲る、天下の事讖れば皆惡と爲
る。醫師賣藥店は仁者に似て仁ならず、清僧魚鳥をさげて、鷄卵入りの菓子
を食す、たいはんやりと、無意味的に英雄の度量を弄し去れ。

易知神化

◎英雄の忍耐

易に曰く、『尺蠖之屈。以求信也。龍蛇之蟄。以存身也。』天下のこと義に精しからずんば神に入る能はず、神を窮めずんば化を知る能はず。義に精しく神に入り、神を窮めて化を知るは、歸する所屈盤の二字より出づ、之れ英雄の忍耐乎。能く忍び能く耐ゆるものにあらずれば、能く信び能く發する能はず。發して通じ、通じて達し、達して窮む、窮通發達は本来忍耐より起るものにして、即ち破り難きを破り、貫き難きを貫き、進み難きを進み、退き難きを退き、守り難きを守る、何れも英雄にあらずれば這の忍耐に打ち勝つ能はず。夫れ英雄は進んで宇内を制するに、反して一身の處置に困むことあり。此時にあつて從容忍耐を弄して、逆境を順境に變化なさしむ。唯英雄にあらずば能はざる乎。

孔子は孔子底の忍耐を弄し、釋迦は釋迦底の忍耐を弄し、ソクラテスはソクラテス底の忍耐を弄し、基督は基督底の忍耐を弄し、豊公は豊公底の忍耐を弄し、

弄し、那破器は那破器底の忍耐を弄し、和聖東は和聖東底の忍耐を弄し、何れも當年の勢と情に應じて、其事業の如何に關らず、苦書を策して忍耐を弄せざるはなかりき。

順境に在つて平氣

非常に忍耐の天素

戒廉の訓

度量と忍耐

順境に在つて平氣は安し、逆境に在つて平氣は堅し、獨り英雄に於ては順逆二境とも平氣たり、平氣たる而已ならず、能く順逆二境を制して活弄す、其作器作用愛すべし。之れ非常に忍び耐る底の天素ある所以なり、非常に忍び耐る底の天素あるものにあらずんば、非常に際し非常手段を弄し非常を解決する能はず、唯其れ英雄是に當る乎。

家康言へることあり、『人の一生は重荷を負て遠きを行くが如し、いそぐ可からず、不自由を常と思へば不足なし、堪忍は無事長久の基、怒は敵と思へ、勝事ばかり知りて負くる事を知らざれば、其害身に至る、已れを責めて人を責るな、及ばざるは過たるより勝る』と、彼れは徹頭徹尾忍耐を以て貫けり。忍耐は即ち度量なり、只忍耐と度量とは表裏のみ、度量なき忍耐は忍耐にあらず、忍耐なき度量は度量にあらず。然るに忍耐は怒るべき時に怒る氣色な

く平然として笑ひ、殆ん念頭に懸けざるが如し、而して此暗々裡に他日の伏線を評畫す。然るに忍耐を誤解して或は奸曲或は怯懦とすることあり、奸曲は奸曲、怯懦は怯懦、皆人の知る所、獨り忍耐は正義に伏して至誠に出づるにあらざれば、眞個英雄底の忍耐とは言はず。輕粗浮薄の念慮を去り、眞實に沈着に清感して、忍耐の本領を活觀せよ。

木村重成大坂城中に在て、區々車夫の勇を争はざりき、彼れ未だ幼年なりし時、茶道某と口論の果て、怒て扇子を以て重成の頭を打ち、其烏帽子を落したり、重成少しも怒る氣色なく平然笑つて言ひけるは、『汝ち士の徒として打ち捨て置く可きに非らず、一命を貰ひ受けざるべからず然れども汝ち如きものを相手として他日君の一大事の御用に背く輕き我命にあらす故に今は許して置く可し必ず忘るゝ勿れ』、言ひ放つて毛頭顧みざりしかば、當時是をきし凡士等は、重成は怯懦命を惜むを以て言を左右に托して、争を決せざるなり、此の如き怯者焉と君の爲めに命を棄ることを得んやと、相諍りて、彼れが度量忍耐に服するものなかりき。然るに慶長の戦起るに及んで、彼れ大坂

陣中に在つて、智勇第一の將と呼ばれ、數度の激戦に馳驅して、曾て一度も後れを見せず、次で其和睦とひて秀頼家康と盟書を取り交はすの時に至り、彼れ自ら請ふて此任に當り、單身敵中に文服を裝して入り、少しも恐るゝ色なく、味方に充分利益ある盟約を締結したるのみならず、後ち夏陣の戦に再び城方の大將として、花々敷き働きをなし、美事に其最期を遂げたり。ア、之れ重成が大度の忍耐を守り沈勇なるにあらすんは能はざるべきことか……大志を懐くものは、輕粗にあらすして、能く萬事に忍耐に沈勇なるものなり。如何なる大志大勇ありても、忍耐を缺くに於ては、其大業を完ふする能はず。忍耐は能く争ふて勝機を知るとも争はざることあり、忍耐は能く怒りて勝機を知るとも怒らざることあり、忍耐すべきを忍耐するは安し、忍耐すべからざることを忍耐するは堅し。又忍耐は決して眼前のみにあらす、實に永遠に通じて達するものなり。唯英雄是を知る乎。

英のアルフレッド大王、年二十未だ書を讀まず、一日母后に見ゆ、母后手に一冊の書を持ち、若し能く讀むを得ば、汝方に與へんと。王之より學に志し、

五十九年
中五十六
國の戦
ず久
辱し
から
の

非常なる忍耐を以て、繁雪の功を積む、二十二にして王位に上れり。當時ダ
ンヌ人、連りに海岸を侵し、其退くの機を見ず。是に於て、竊かに王服を脱し
犁鋤を肩にし、牧人の家に仕へて、澤々たる牝牛を飼ひ、以て機のを待
てり。此の如き非常なる忍耐を弄すること一年、人ありダアンヌ人の陣營を
破り、軍器を奪ふものあり。王出でて之と會し、單身敵陣に忍び入り、其様
を窺ひ知り、歸りて散兵を召集す。人皆死せりと思ひし大王に遇ひ、勇氣百
倍大にダアンヌ人を打ち敗る。之よりダアンヌ人、再び英國の海岸を眺はず
ど。

彼れ亦學問を怠らず、能く羅句語に通じて、數部の書を著はし、オックス
ホルドの大學を建て、實に英律の根源を作り、海軍の基礎を設け、大に百年
の長計を圖れり。ア、彼れは實に五十九年の生涯中、五十六回の戦をなせり、
以て其英剛雄略を壽するに、一國に君臨する王者の忍ぶ能はざる、耐ゆ能は
ざる、非常なる忍耐を以て、逆難を脱せり、偉なる哉。
驕るもの久しからず、器小にして、敗徳、墮落、氣節なきもの、到底忍耐に

活動中に
忍耐あり

仕して忍耐を守る能はず。忍耐に小人の忍耐と、英雄の忍耐とあり。小人の忍
耐は忍耐にあらず、止むを得ずして、屈伏し居るのみ。謙儉を養ふて、氣胸を
鍛錬し、實實、嚴直、秩序、整然、從容、逆境屈裡に天數を弄し、機を計り
忍耐を守りて追らざる、之れ英雄の忍耐乎。

活動中に忍耐あり、靜肅裡に忍耐あり、進的の忍耐あり、退的の忍耐あり、
其數を弄し來れば種々にして限りなし。粗食破衣の浪人を目して、忍耐と見
る勿れ、平常國家を慷慨する人にして國家の大難に遇ふて顧みざるの人あり、
我れは忍耐に堅固なりと、躬ら吹聴する人、之れ忍耐にあらず。眞個の忍耐
なるものは其人自身すら知らず、又他人に誇示する忍耐なれば、忍耐として
見る價值ある忍耐にあらず。如何なるか之れ英雄の忍乎。

膺の聲おほるごと
何萬里

武竹の句
の忍耐

以て武竹の句を弄して、英雄の忍耐を看よ。……
ソヒヤ女王を寺院に押込め、イワン五世に繼ぎて王位に上れし、ペートル大

帝、彼れは先づ陸海軍をして歐洲の法に従はしめ、バルチック海より黒海邊に其領域を擴め、通商貿易の道を開かんとて土耳其と戦ひ、アメウ城を攻め下せり。嘗て彼れは微服して和蘭のアムステルダム造船局に遊び、其局の工手となり、自ら斧鋸を把り勞働に従事す。是れ彼れが理想は海事を研究しん爲めなりき、一船の竣工を経て英國に旅行し、再び和蘭に歸り普魯西を過ぎ、維也納に入り、將に以太利に赴きて、器械、工藝、風俗、教化の次第を觀んごせしが、本國に親衛兵の亂ありしを以て果さず。歸國して諸邦の學士、工人等を雇ひ、造船、農田、採鑛の業を盛んに起し、大小の學校を設け、俊秀の少年を他國に留學せしめ、勉めて文明事業に力を盡せり。而して彼れ亦全國の教事を支配し、四隣を攻め従ひ、紀元一千七百三年、ネソ河邊に壯麗なる新都を築きたり、實に今のセントペートルスボルクなり。……
 彼れは身を賄して忍耐を以て中興の基を開けり、唯絶對的に彼れは英雄底の忍耐を實行せり。魯西亞の覇權隆々たる今日を見る、其因遠くペートルの忍耐に基せるや、實に薄からざるべし。

中興の基

屈の六三

三三三屈の六三に曰く、「眇能視、跛能履」却つて具眼者の眇者に劣ることあり、却つて健足者の跛者に劣ることあり。自由に在つて自由を知らず、不自由に在つて始めて自由を知る。世に往々不具者の具者に勝るものあり。

花ならばさぐりても
 見んげふの月

と、いふ故聖盲楯檢核の述懐を追想せり、ア、彼れは實に盲者にして、盲を盲とせざるなり、盲の天地を作りて、具眼の却て心盲たるを笑ひ、偏へに心眼を以て、直に天地の美、宇宙の眞を探らん事を欲す、蓋しこれ盲の樂たるもの乎。

第檢核の忍耐

言の葉のおよばぬ身には目に見ぬも
 なか／＼よしや雪の富士の根

これは聖盲楯が心眼に天地の美を觀るの誇りに非ずや。曾て源氏物語りを講ずるに當り風來りて燈火を消す、座人其由を告げて講演を止めんことを乞ふ、彼れ目ある人の不自由を笑ふて、傍ら人なきが如し。聖盲はまことに肉眼の有

無に據ることをせんや、目ある暗盲天下に多くして、目なき明盲に嘲笑せらるること、夫れ斯の如し。ア、彼れが乾坤一貫底の意氣思ふべきなり。群書類集一千八百六十餘卷と武家名目抄等十四種千四百卷餘の未曾有なる大卷を編纂著述したる、彼れが生血は文學世界の甘露雨となりて、吾人がこれに當ふの恩澤を感謝するに至りては、實に日本全土の勳爵士と賞するに餘りあり。寶曆十年春天に雲雀の聲を聴き、棠花に戯むる、胡蝶の翅を憾みつい、武州保木野村を出でしは、微々たる絹商人と、颯々たる盲童なり、此憐むべき孤獨互に相携へ、兒玉郡の郊原を江戸に入りたる、此兩寒子遂に一は町奉行根岸肥前守、一は檢校嫡大人が立志の姿ならんとは。

彼れは非常なる断腸的忍耐と、非常なる強記に著へて、其腦漿をしほり去り、しほり來りて、智識を力として意志に鞭ち、傍ら按摩を業として、大脳を勞し、心膽を練り、盲目の目を泣かしめしこと、實に幾千回なるを知らざりき。而して彼れは實に暗黒世界より暗黒世界に幾たびか死せんとせり、然れども苦闘の艱難に嘆息せず、益々忍耐して愈々忍耐に忍耐を加へ。高井山城守の

妾宅に按摩するや、其代として讀書の聲を望み、妾女蚊帳の内に讀めば、彼れは兩手を縛りてこれを帳外に聴く、蚊を撫ふに心散逸せんことを恐るればなり。ア、其忍耐健心憶ふべし。

彼れは亦萩原宗因に歌書物語類を學び、川島貴林に小學近思錄と神道とを學びしより、山岡妙阿に律令の類を學び、東禪寺の孝首座に難經素問の醫書を學び、加茂真淵に六國史等を學ぶに至るまで、毎に人の耳目を愕かせり。ア、彼れは不憊勇猛にして智力漸く讀書に成り、飽くことを知らずして、天稟の度量稍や其色を動かす。實に松平織部正をして、『彼盲人の度量非凡なり、眼あきたらんに、法令をも犯し其身をも誤た、ん後必ず成業せん旨は却て幸ひなり』と愕かしむるに至りては、彼れが必死の助念に忍耐を加へ度量の鍛鍊を現はしたる經營の汗を思ふに足れり。彼れの盲たるは安んせざらん爲めに肉躰に興わられたる一の刺にして、弱き所は最も強き所となり、散逸の迷門を閉ざされて、有らゆる天地の快樂を斷食し、一に讀書に向ふてこれを犠牲としたるなり。

ア一困苦は事業の材料にして、蹉躓は事業の試感なり、忍耐は萬人を味方にするの守護神なり。彼れが幾たびか死鬼と苦闘を擲ちて、終に多讀博識の盲儒を以て一世を風靡したる、温古堂（温古堂）保巳（保巳）に至る底の忍耐憶はざるべけんや。

彼れが博く世益を案じて群書類集の大業を發意するや、實に安永八年の元旦より心經百萬卷を讀誦するの誓ひを祈り、半ば讀む程に千部の書を集め、讀み終らんまでには上木の功なからんを願ひ、毎朝鹽味を斷ちて日に暗きに起きて百卷の看經を爲せしといふ、ア、この苦業の銳意其經營の熱汗思ふべし。四十一年を経て類集全く成り、幕府は紅葉山の文庫を貸與し、一座の惣録より十老の列と成るに及び

兩陛下も拜謁の榮を賜ふに至る、頼義翁も日本外史の引用書類を彼れに問ひ得たりといふ。更に令義解を校刻して古律を明らめ、史料を著はして外交の史を探り、雞林拾葉に日韓の交渉を探ぬ、博學の名は走卒の耳に響きて人世の榮譽と幸福とを擔ひ、川柳狂句をして「番町で目あき目くらに道を問ひ」

と歌はしむるまで、幾千萬の眼を盲目にして當時全土に雄飛するもの、まことに彼れが絶愛より多望に入りて立志の刻苦に忍耐を以て健全なる意志を奮ひしに因らざるはなし、文政五年七十七歳の天命を終り、浮世の喝采を遠く未來に残して冥界に高踏し去る。ア一

白川樂翁彼れを吊して、

散りのこる萩のにしきをかたみにて

消にし露の行えしらすも

斯く樂翁をして哀悼せしめしは、其偉勳を嘆美するの萬人が反響ならんか。嗚呼、英雄にあらずんば英雄の忍耐を弄せず、嗚呼英雄にあらずんば英雄の忍耐を知らず、嗚呼、英雄にあらずんば英雄の忍耐を觀る能はず。韓愈も少時非常に苦しめり、彼れも亦英雄の忍耐を身と心に實行せり。彼れが家破れて業未だ成らず、身餓へんとして人之を救はず、而して彼れが愛世愷國の念は身苦しむと共に益々強よむ。ア一彼れが心を堅持するに反して、境遇は絶望の深底に沈み只憂愁の暗黒に陥るのみ。之を打破して一點靈光を

唯忍耐の二字に依賴して、滿天下を震動なさしむる彼れが胸中の伏案、當時彼れ躬ら知るや否や、萬人を味方に爲し、萬人を敵にせんと欲するものは、其れ唯忍耐の二字を心に銘せざるべからず。所謂孟子の「天將降大任於是人、必先苦其心志、勞其筋骨、餓其體膚、空乏其身」の覺悟なかるべからず、這の覺悟ありて始めて英雄底の忍耐を弄するを得、韓愈も亦其一人乎。

●英雄の氣膽

唯氣と膽
萬人を笑
殺す

英雄の世に出で、事を爲す、唯氣と膽との一點にあり、其不拔の氣を剛にして、膽を大にするにあり。彼の非常に際して狼狽恐怖の念を動かし、忽ち喜び忽ち憂へ纏々たるもの、何んぞ氣膽を語るに足らん、亦纏々底のものには氣膽の備はらざるものなり。……
氣は乾坤を一串して天地を吐吞し、膽は宇宙を覆載して萬人を笑殺す、這の概あるものにあらざれば、天下を經營し一世を經綸する能はず。ア、た、氣膽乎。……
慕ふべし此の氣象、愛すべし此の剛膽。た、い、ろ、れ、氣膽なるものは英雄の本領とする其本領中最も氣膽を大本領と爲す。特更に一身一家を破りて、天下國家を翻弄するも、其れ唯氣膽にある乎。
氣膽は生親自在にして、一身一家一國一天下を生かすも、た、い、氣膽にあり、一身一家一國一天下を殺すも、た、い、氣膽にあり。區々小才の凡流何んぞ氣膽

氣膽は生
親自在

を知らんや。天下の事或る場合までは、小心慎重を要するも、最早機の二刻に至りては、區々姑息的小刀細工を放擲し來りて、單刀直入底に自己獨得の大本領たる氣膽を以て、一刀に裁斷するの活氣剛膽なかるべからず矣。然り而して勝機を弄するも氣膽一點にあり、敗機を弄するも氣膽一點にあり、勝敗の機は其れたる氣膽乎。

氣膽を以て勝ち、氣膽を以て敗り、氣膽を以て取り、氣膽を以て捨つ。勝敗取捨は時の命、我れに於て何かあらん、唯先天の氣膽ある而已矣。……英雄が治世に遇ふては度量圓滿以て處し、亂世に遇ふては氣膽を以て進取銳意す。維巴納の會議より、歐洲各邦の形勢一變し、獨立同盟の主國たる普魯西も、日耳曼合一の事に傾けり。然るに獨りオウストリヤ其意に反きしを以て、志を達すること能はざりしが、ウイリヤム一世位に即き、世に所謂氣と膽とを以て鳴る、鐵血宰相と呼ばれたるビスマルクを擧げ用ふるに及び、ガスタイン條約に違ひし事を口實とし、以太利とオウストリヤとの戦に乗じて、大にボヘミアに戦べり。是れ世に名高き、鐵銃の戦争にして、軍事兵談を爲

すもの、常に嘖々する處たり。此役普王ウイリヤム及び太子フレデリックウイリヤム王子フレデリックシャーレス、將軍モルトケ等、皆戦闘に従事して一方の將となり、速りにオウストリア軍を破り、進んで首府維也納に至る。爰に於てオ帝和議を請ふ。因てブレインに於て、條約を結び、悉く從來の聯邦を解散し、新にオウストリヤを除きたる、聯邦を組成し、日耳曼帝國を堅ふせり。是れ亦當年の英雄たるビ公の氣膽一點にある乎。

治世の英雄は事を視ること明ならざるべからず、己れに克つこと剛ならざるべからず。亂世の英雄は機を視ること敏ならざるべからず、人を御すること巧ならざるべからず。治世の英雄は思慮深くして前後を考へ、亂世の英雄は粗豪にして悟機を制し氣膽を弄す。魏徵嘗て亂世と治世とに要する人臣の資格を論じて曰く、「天下未定、則專受其方、不考其行、喪亂既平、則非才行兼備、不可用也。」是れ固より英雄の資格に於ても眞なり。治世の英雄は全徳ならざるべからず、亂世の英雄は寧ろ一方に於て非常に秀でざるべからず。唯其氣膽乎。

余が友紫山西南戦史に桐野利秋を傳す、其中に言へることあり、「利秋風貌秀整、天資俊邁、胸襟快瀾、言語明暢、其人を侍つや、臆を開き、膽を露はし、毫も眈城を設けず。然れども、志氣一發、眉を揚げ、氣を吐くに當りては、猛將勇卒と雖も、仰ぎ視ること能はず。其陣中に在るや、腰に金銀裝の大刀を佩び、號令明肅、威風凜凜たりと云ふ。」

利秋、征韓論の起るや、隆盛と共に奏請し、朝鮮使節の任に當らんと請ふ。

岩倉府の問答

然るに、廟議因循決せず。利秋軍人を懇懇し、三條岩倉諸公に逼る。岩倉公一日利秋を其邸に招き、之に謂て曰く「朝鮮使節の事、其議。常然は即ち當然なり。然りと雖も、西郷及び足下自ら其使節に當らんと云ふに至ては、吾れ甚た之を難んず。若し足下等兩人にして、彼土に斃るれば、誰れか其志を繼ぐものぞ。恐くは後圖なきに似たり。吾之を以て、他人をして代理せしめんと欲するのみ。」利秋曰く「堂々たる政府、賢臣名相、各朝に立てり。何そ人を欠くと言んや。吾輩兩人、假令彼土に斃るも、後圖難きにあらす。公之を安んせよ。」公曰く「征韓の事、其名義は則ち之れあり。其方畧の如きは、

妾に寶劍を與ふ

則ち未だ之を聞かず、夫れ韓の地、遠く露領に接す。露或は韓を撥くるか如きあらん乎、則ち我國の患なり。」利秋曰く「戰畧は變に由て定む。豫しめ之を議し難し。已むなくんば則ち一あり。我有名の師を以て、韓の至罪を正くす。然るに露、若し信義を傷り、公法に背き、韓の曲を援げて我直を伐たんと欲せば、則ち我に於ては、却て大幸と爲す者なり。夫れ韓の役、吾が立策する所を以てすれば、其兵十大隊にして可なり。露若し韓と合し我に當らば、我、兵を倍して之に向ひ、其勝負に由り、將に進退して露に迫んとす。必露にして、我北海道を侵し、遂に韓に應ずるが如きあらば、我十大隊を以て、直ちに北に向ひ、突然露の境界に臨み、其府城迄、凡そ何里程。我十大隊は、一步一人、連縦せば、則ち其府城に達し、奮然長驅、其版圖を侵奪すべし。自ら進みて、露と殊死決戦せん乎、我に於て、十分の勝算あり。嗚呼朝鮮の如き、戰はずして我掌中に歸すべきのみ」と……

彼れ利秋征韓の議、中に沮して行はれざるに及びて、憤慨禁すること能はず。騎して妾宅に至り、寶劍を出して曰く、「此劍を汝に與へん。吾れ是より當に

蘇摩に歸るべし」と。飄然馬を馳せて去れり。妾、其神色自若、意氣平生に異ならざりしを見て、戯れに近郊に遊へるものと爲せり。而して彼れ遂に蘇州に歸り、亦見ることを得ざりしなり。妾、後に其刀を驗すれば、誰れか知らん。是れ菊一文字の短劍にして、彼れ利秋が、平生珍愛せしものならんとは。ア、彼れ利秋洵に氣膽の英雄乎。余、彼れの時勢論なるものを讀んで、轉た感慨に堪るざりき。今其一節を録するに、『國家ハ形樣ヲ以テ見ル可カラズ。政治ハ規術ヲ以テ總フ可ラス。形權ヲ以テ國家ヲ見ル、木偶物ニシテ可ナリ。規術ヲ以テ政治ヲ見ル、婦女子ニシテ可ナリ。金粉之ヲ塗リ、綺羅之ヲ飾ル、木偶却テ美ナリ。規術惟レ特ミ、細利惟レ射ル、婦女子却テ務ム。金貨ノ多費嘆スルニ足ラサルナリ、男兒出サル、乃チ是レ憂フベキナリ』云云と。痛論するに至つては、誠に英雄の本領を出せり。ア、彼れ死して今や卅年の星霜を經、今や復た見るべからずして、爾來内閣は、洵に金粉的綺羅底の木偶物にあらずや。ア、勝つべき時に勝つ之れ天の數なり、敗する時に當つて勝つ能はず。明治六年

韓國の無禮を責め、其至罪を戒め、北向して露を叱咤し、南視して清を圖る、豈決して毛頭の難きに非ず矣。ア、這個豊公遠征以來の一大好機を、區々瓦礫的亡者の爲めに失せりとは、南洲翁を首めとして、當年征韓論者、其遊魂那邊に在るか。嗚呼、誠に長太息して、香を拈じ、帛せざるべからず。余が先著(苦樂觀)に六年の征韓論は其目的征歐論なりと大叫せり。……今や日英同盟の約に朝野狂して、其効果を見るや否やを悟らず。徒らに事の始めに狂喜するものは、之れ凡質俗士の空言浮語者流に多し、事の實を了へ其局を歪ふするまで、是非利害は豫じめ期して、期する能はざるものあり。彼れ英國他邦と同盟を約すること、已に十有餘あり、而して其局を能く結び、能く相互の利益を得たりし、同盟幾個ありしか。日英同盟する果して利益か。日露同盟する果して利益か、區々姑息的同盟を弄せず、獨立獨歩を以て各邦を平視し、大に氣膽を以て天下を制する果して利益乎。天下の事極端的の性あるを以て、何れが是にして何れが非なるを知らず。然れども是等の樞點は豫ねて東洋の情勢、宇内の大勢に平常心を勞するもの、默識する所なり。彼

れが我れに同盟し來たる所以の真相を静慮するに、我れにおいて一國と一國と戦ふて、勝利あるを彼れが看破したると、同時に彼れに利する所あるを以て、其盟を約して結び來りし所以なり。若し我れに於て一國と一國と争ふて勝を得ず、彼れに不利あることを前知し居れば、彼れ決して同盟し來らざるなり。因りて同盟なるものは利ありて害なきことあり、害ありて利なきことあり、同盟を生殺活動なきしむるは、たゞ其人の氣膽如何にあり。徒らに空約に狂喜して姑息に同盟てふ二字に枕するは之れ同盟を殺し死物に扱ふものなり。區々空約を去り事實の同盟を擧げ、大に進んで徹頭徹尾其結果を完ふするは、之れ同盟を生かし活物に扱ふものなり。天下を制し、無禮國を責め、虎狼國を戒むるを以て同盟の本領と爲す。天下を制せず無禮國を責めず、虎狼國を戒めざるに於ては、同盟の必要を見ざるなり。ア、今の時進んで大に大陸を制せずんば、將來制するの期復た容易にあらず。ア、

祠を健つるを盡さるるとは……
看よ亞爾伯山下の英雄ウキトルエマニール大帝、萊因河上の豪傑ウキルヘルム大帝、長白山邊に崛起したる好漢愛眞覺羅大祖、何れも皆聖を鍊り氣膽を以て、帝業の基を立てたりき。而かも乾坤を貫き天地を破り、山河を裂き戈を枕にして一起し、領域の大經綸を策せるものにして、其胸中は大氣膽的の偉略を存す。如何なる亂にても定むべからざらむ、如何なる功にても奏すべからざらむ、神察鬼斷の剛健ありて、笑ふときは春風櫻花爛熳の裝あり、に反して、怒るときは鐵髮空中に逆立し夜叉阿修羅もたいならざるのときあり。之れ皆氣膽の作用なり。天は大膽者に大任を興ふるものにして、小膽者流の夢想する底にあらず。百雷一聲天下の情眼を破り、猛虎一嘯して狐狸穴に伏す。英雄の氣膽も又亦斯の如き乎。
東亞半島の猛虎なりと稱せられたる、大院君李昰應の猛斷的猛烈底の氣膽に至つては、實に韓國開國以來の英雄なりき。彼れは朝に立つて野に下り、亦立ち亦下る遂に三回に及ぶ。彼れが朝に在つて其事を執るや、唯一刀兩斷に

八道の風

裁して、顧みざるの點に於ては、韓半島中月夜の一星のみ。彼れが始めて攝政の大任を受くるや、無謀にも宇内の各邦眼中になし。而して大猛斷を以て土木を起し景福宮の再建を計り、亦鷄籠山を發掘し、亦西教徒二十餘萬人を殺戮し、亦佛艦を江華島に破り、凱旋して『洋夷侵犯、非戰則和、主和賣國』と一大碑石を京城の鐘路に樹立し、亦大に文武の弊制を改革し、亦明黨跋扈の大弊を一掃し、亦租稅怠納者を斷罪し、亦府使を罰して賄賂の弊を戒る等、却々に容易に其猛機神斷の氣膽に至つては、鷄林八道をして其色を失はしむる底の概あり。

八道の風雲動き東徒の變生じて日清の出兵あるや、閔族狼狽特に泳駿の如きは號山の如き恐怖其爲す所を知らず。流石頑愚の泳駿も此に至て、進退維谷の境に陥り、復た奈何ともすべからざるより、厚面皮にも沒心腸にも最後窮極の一策として大院君を擁し、其手腕を藉りて以て一時人心の亂激を制し、兼ねて目前の難局を以て、大院君に推さんとは企てたり、乃ち一夕晝夜に乗じて、其子閔校理に一燈を點せしめ、密かに雲岬宮に詣りて、大院君を訪問

一夕晝夜

大聲一喝

然れども

激變

此照會

す、大院君其面會を謝絶するに由なくして、出で、謁を賜ひ、儼然として來由を問ふて曰く、汝は今國何故に予を訪ひしや』と、泳駿赧然として答へて曰く、國家今方に危急なり、冀はくは殿下の高教を蒙らんと』と、爰に於て大院君赫として怒り、大聲一喝して閔泳駿を叱す、曰く『予に目もなく、耳もなきは汝の他まで知る所にあらずや、既に耳目なき予に向つて天下の形勢を問はんとす、汝狂せるにあらざる乎、予は狂者に待するの暇なし、疾く此席を去れ』と。疾言厲色、叱咤風生す、泳駿情々として力なく退去せり……然れども或る時獨立黨に漏せる、一言を察するに、當時既に胸中一蟠の活志望ありしや知るべし。而して京城の風雲愈々激變して大院君三たび韓朝に立つをうながさしむ。然るに斯る急變に際して、韓庭猶清に頼るの心ありき。之れ則ち支那政府の陰毒なる政略に教唆煽動せられし爲めなり。而して韓庭は頑冥にも日本兵の國境を出づるを要求し來れり。爰に於て我日本公使は韓庭の變心無情を憤慨し、其斷然たる決心を以て、最後の照會を韓庭に申送りたり。此の照會や韓庭多數の事大黨を震駭せしめたり、亦頑冥不靈なる清國

悲むべき
決答

をして、實に肝膽を寒からしめたるなり。其照會に曰く、「冬至使を廢し、清の正朔を奉ずるを罷むる事、清兵の國境内にあるものを朝鮮政府の力を以て退くべき事、若し力の及ぶ所にあらざれば、我れ請ふ貴國の爲めに決する所あらん」を。而して七月二十二日は實に韓庭が我最後の照會に對する決答期日にてありしなり。此夜天陰り雲黒く風物凄然宛かも秋の如し、夜半に至り、一橋齋々として王城の方より來り、日本公使館に入れり、是れ韓庭の決答を齎らし來れなり。而して其決答は果して如何、彼れ韓庭の爲め、否な朝鮮國家の爲め、最も悲むべき決答にてありしや疑なし。アー……二十三日の午夜の鐘は兩日の境刻を敲斷して、日は方に二十三日の午前に入れり、第三時に至つて龍山の日本兵は牙山に赴かんとして動けり。時に頑雲密封して雨は覆盤の如し、兵既に起てり。左して漢江を渡れば牙山道、右して大道を走れば南大門。首將軍頭に鞭を按じて徐行し、忽ち馬首を右にして京城に向ふ。大雨漢々、雨聲軍營を亂して景福宮に至る、時正さに曉五時十分。號令嚴峻、銃に裝丸なく、劍は室を脱せず、唯王城を守備せしのみ。既

大雨漢々

赤旗光化
門樓上に
植つ

にして王城の西、迎秋門を排して入り、光化門、彰化門の諸門を開く、軍氣愈々發揚す。區々韓兵を破り、僅かに十餘分間を費して、直に日章赤旗を王城正門なる光化門樓上に植つ、正に午前第五時三十分。一方には亦大院君の居宮たる校洞の雲峴宮をも警護せり。而して大島公使に於ては岡本柳之助、穂積寛九郎等を遣はして、大院君を訪はしむ、時に大院君微恙あり、病廢に臥し居れり。然れども喜んで兩人を引き、親しく面接す、兩人説くに韓國の將來の事を以てし、起て大局に當り、内外政務革新の功を奏せんことを勸告す。大院君色動く、午前十時に及びて敕使は雲峴宮に下りぬ。即ち大院君を起さんが爲めなり、而して又敕使は再び下れり、其來るの遲きを以てなり。大院君決心して起てり、乃ち轎を命じて王宮に詣る、日本兵之を警衛す。既に闕に入る、王は檐端に迎ひ、暫時默然として老顔を仰ぎ見て、兩眼涙を浮べ、兩手を大院君の兩腕に抱き上げ、喜色滿面に溢れて奥殿に入らせらる。王子義和宮にも亦大院君の袖に縋り、王と共に涙に咽せび給ふ。此狀を見たる日本志士一人として流涕せざるはなかりき。道ふ勿れ、大院君年七十有五

勅使再び
下る

王と共に
泣く

道ふ勿れ

の白頭翁、彼れが胸中已に猛斷の成算あり、彼れが手裡には金剛力の宿せるあり。看よ革新の第一着手として、先づ其泉源を清むるの一大猛斷の氣膽を吐けり。曰く『王妃閔氏を廢して庶人と爲すこと』を奏せり、之れ實に情に於ては痛恨忍ぶ能はざるも、宗廟社稷を奈何せん。……

又閔泳駿以下七名を流竄に處し、二月二十五日國王傳諭を發して曰く、
各國事例、其軍務、皆歸親王管轄、本國則海陸軍務進明于大院君前裁

決、

と。ア、この東亞半島未曾有の猛斷的氣膽底の英雄大院君今や已に亡し、鷄林入道に遊び彼れを見んとして、復た見るべからず。大院君が生前中嘗て語りし、朝鮮人中稀に見る大膽ものなりと言へる、彼れが愛孫たる李垓鎔余と好し、垓鎔余が書に復贈して曰く、『并復時下益御康福奉賀、小生高論飽聽、心神快樂可好、(○○○○○○○○)小生盡力是本分、倘可諒納否、此敬祈、○○○○○○○○』と。ア、歐洲獨り烈強を競ふて、亞洲の各邦何んぞ震はざる

か、何れの日にか東亞の天地其暗雲を去らん。唯其れ眞個氣膽を以て起つ。の英雄亞洲の那邊に起る乎。ア！……

●英雄の經綸

唯天下之至誠
鐵火侵略的の武人

「唯天下至誠爲能經綸天下之大經立天下之大本知天地之化育」とは中庸第三十一章の首語なりき。然るに世人は英雄の經綸を目して、其至誠に出でずたは五品の人倫を云ふ、此の人倫の條理を正ふし、一天下を和樂的に治す、之れ英雄が國家を治むるの理想なり。此の理想なくして天下を經綸せんと欲するは、到底能はざる所なり。彼の徒らに他邦を侵略し、自境の領域を擴張して、地圖の彩色を變ずる、之れ決して眞個の經綸にあらず。眞個の經綸なるものは、區々鐵火侵略的虎狼政治家の理想にあざることぞ、靜かに默識せざるべからず。余が言ふ英雄は毎々論ずる如く、鐵火侵略的武人底の人のみを指すにあらず。其爲す事は哲理あり政治あり、たゞ其人の欲する、長所の先天的理想を發揮し、大に天下萬世に通じて、傑出する靈客を言ふなり。故に此英雄の經綸もたい天下を震動玩弄するもの而已にあらず。ア、難哉、

書經を播

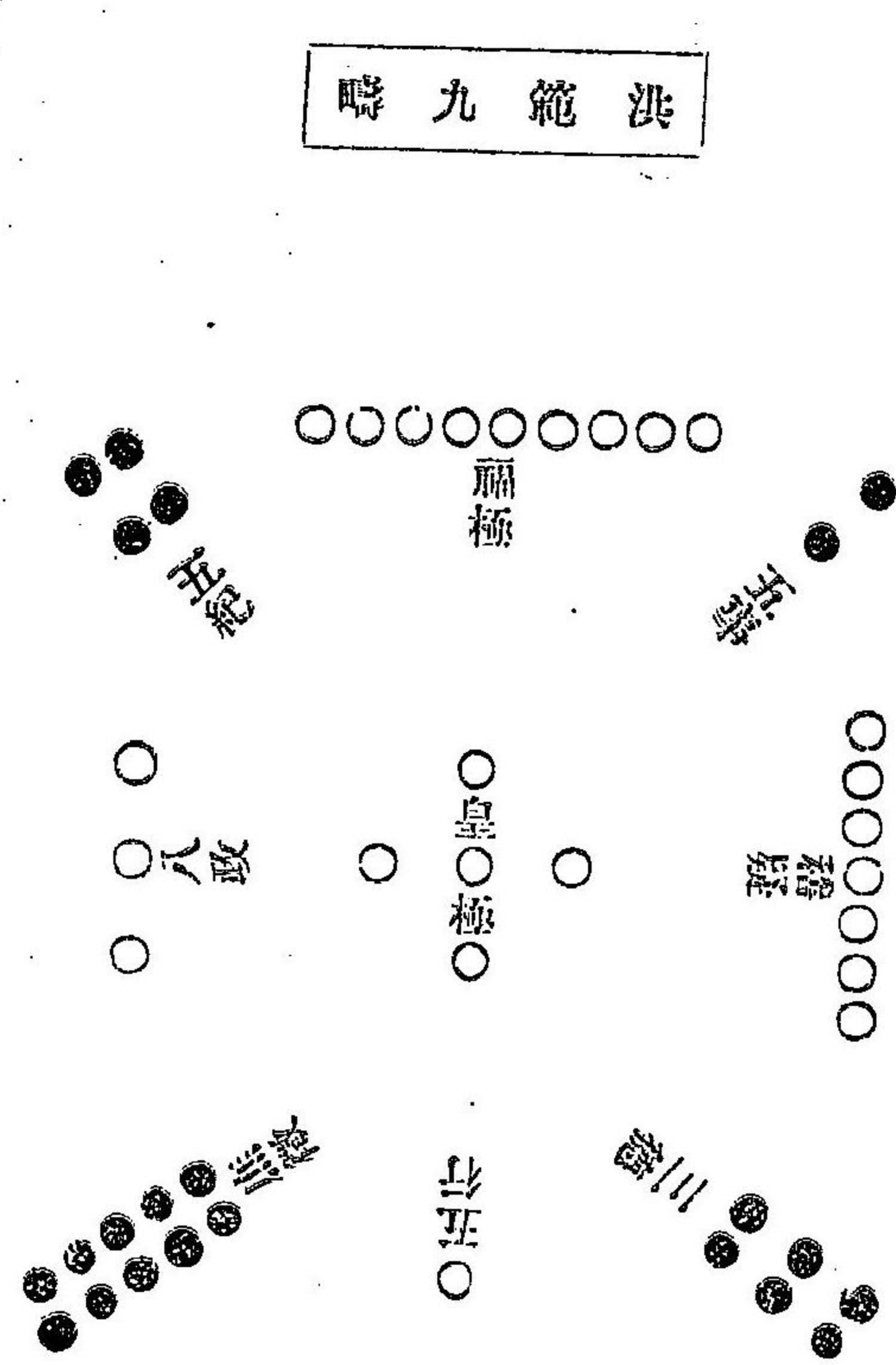
英雄の經綸

一九萬變

河圖洛書
九疇

靜かに三更孤燭の下に書經を播き、洪範を讀んで九疇を心觀せよ、一に五行、二に五事、三に八政、四に五紀、五に皇極、六に三徳、七に稽疑、八に庶徵、九に福極。其數一より九に至るは洛書の文なり。一は數の原なり、九は數の究なり。原は其始めなり、究は其終りなり、數終りて復た一に歸す。其生々して究まらざる數、其數の十は一の變なり、百は十の變なり、千は百の變なり、十百千萬に通じて、推し去り推し來れば亦本來の一なり。一九萬變を經過すと雖も、而かも其裡に五常の倫道存す。故に五の數を祖として、中心に配して皇極と爲す、之れ天下の大本なり。則ち此の中五は眞神にして、實に眞靈なり。其靈用靈妙中五の皇極に位して八極を疇す。是等の至理密論象數の詳解に至りては、河圖洛書と洪範九疇とを對照し、靜觀默悟以て其神機妙象を知るべし。實に經學の靈骨にして、易理と交渉其本を一にす。昔しは周の武王天下に君臨するや、箕子に其經綸の極を問ふ、箕子教ゆるに洪範九疇を以てす。而して其本源は遠く大禹に出づ、方今の天下能く九疇を活用する

の英雄幾人かある。左に略圖す。



天下に洪範を説くもの多し、而かも能く知るもの少なし。天下に洪範を知るもの多し、而かも能く行ふもの少なし。洪範は區々奇隅四十五の數にあらずして、即ち各自先天の靈心に洪範九時を默觀せざるべからず。這の靈識ある

大學や早稲の徒

八音五味

ア一難哉

ビヌマーカ
シカゲ

の英雄に、あらずんば、眞個天下を経綸して萬衆を和する能はず。大學や早稲の徒が、天下の政權を弄して、氣樂平意に經綸を策すべきものなれば、眞個の英雄は天下を経綸するに何の憂苦あらん。昔しより英雄を教ゆるの師なきのみならず、英雄の種族もなし。然らば英雄が天下を経綸するの標準は那邊にあるか、其標準は區々言語文筆の及ぶ底にあらず、其めらざる所、即ち英雄の經綸乎。止むことを得ずんば、八音合して樂成り、五味和して膳調ふ。一事一方の策を爲すは易くして、其人實に多し、多事八方の事を了して大經綸を爲すもの難くして、其人實に少なし。ア一、難哉。八面玲瓏が如き、眞成の經綸を策する、英雄果して幾人かある。ビヌマーカの獨逸聯邦の統一、カヅルの伊國新興の政策に於る、善く其大局を洞見して、經綸を施し其成功を奏せり。彼れビヌマーカとカヅルは機智縱横變幼出沒の大機畧あるのみならず、亦大局段落を見るの識見あり。而して自主自強、沈毅にして剛明、獨立不羈、冷靜にして果斷。自ら其信する所に向て力行、惑はざるに至ては、實に英雄が

英雄の品性

◎經綸を施すの本領を存せり。

罪雄綱羅

氣宇氣力
人心知る
の明

英雄が天下を経綸し、一世を和樂なましむの要素は、英雄としての品性なかるべからず。其品性に曲線あり直線あり或は迂餘曲折、或は簡易直截、文采あり武骨あり、圓滯靈活にして、容易に自己の本領を示さざるあり。大膽不敵にして直に其肺腑を披き示すあり。莊重華麗なるあり、豪放雄大なるあり、博聞にして多識記臆力に長するあり、雄論宏辨にして其機先に當るべからざるあり。財利に淡にして美人に濃、文辭に富み風流に通じ。理想的と實行的と建設的と破壊的と、何れも皆英雄の品性なかるべからず。
又群雄を網羅するの術なかるべからず。人を致すの器、機を見るの眼、自ら守の操。而して愈々經綸の能力才識發達して、頭腦廣大、敏妙なる識に、絶倫の能を以てし。法制、財制、兵制、善く經綸の大綱を統べ、百政を總理す。亦氣宇氣力の進取主義、霸氣磅礴、剛健剛壯、天下を壓倒す。亦人を知らずの明、人を用いるの才、人に任するの度、人を容るゝの量、聰明善く人を知り、機敏善く人を用ひ、冷静善く人に任じ、豁達善く人を容る。奇才を用ひ、俊

徳量
曾國藩

曾國藩の
識識と奏

才に任じ、練々餘裕清潤併せ吞むの洪懐……
……
この徳量ありて、善く民を治むるもの、天下に果して幾人かある。……
余、亞細亞の天地に於て、近世の一大經綸的英雄を曾國藩に推す。而して國藩が清國に如何なる經綸を施設せしか、故荒尾精が曾國藩に對する意見に因りて、彼れが人と爲り、及び其經綸の一斑を示さん。……
『所謂根本的大革新なるものは如何。即ち當時元勳の諸士が懷抱したる經綸は如何なるものなるやを知らんと欲せば。此等元勳の首位を占め近世の一偉人たる故曾國藩の奏議に依るより良きは莫し。』

變逆の初めて載定に就くや。曾國藩は召されて京師に至り。謁見を賜はり。其動勞を賞して之を慰藉せられたるが。當時國藩は闕下に伏し奏請して曰く。陛下ノ威靈ト陛下カ諸將師兵勇ノ忠武トニ由リ。今ヤ大慈己ニ平キ。海内重ネテ天日ヲ仰クヲ得タリ。誠ニ萬民ノ幸也。然レトモ騷亂僅ニ平キテ瘡痕未タ癒エス。舊弊長ヘニ存シテ新政未タ布カス。是レ誠ニ陛下カ枕ヲ高クスベキノ秋ニアラス。本朝ヲ既ニ衰フルニ興シ。國運ヲ宇内ニ發揚シ。

以テ陛下ノ祖宗ヲ光イニセントセハ。陛下ハ宜シク非常ノ大英斷ト大決心トヲ以テ一大革新ヲ行ヒ。靜ニ宇内ノ趨勢ニ鑑ミ。遠ク社稷ノ長計ヲ定メ。以テ中興ノ鴻基ヲ樹テサルヘカラス。臣竊ニ當今ノ時勢ヲ察スルニ。或行ノ起リシヨリ以來。海内ノ士。苟モ一技能ヲ具フルモノハ。去リテ亂賊ニ與スルニアラスンハ。來リテ忠ヲ本朝ニ竭クス。去ルモノハ悉ク勦滅ニ就キ。來ルモノハ舉ケテ其能ニ任ス。臣等不肖自ラ掃ラス。陛下ノ重臣ト心ヲ協セテ。或ハ之ヲ行間ニ誦リ。或ハ之ヲ艸澤ニ拔キ。文ニ武ニ。將トナリ卒トナリ。各々其材ヲ盡クセリ。今ヤ野ニ遺賢ナク。人才ハ舉ケテ朝廷ノ用ト爲ル。陛下若シ此時ニ及ヒテ一大革新ヲ行ハ。其功成リ易クシテ其弊ナクラン。況ヤ兵革初メテ収マリ。民ノ新政ヲ希フコト雲霓ヲ望ムカ如シ。中興ノ大業此一時ニ在リ。若シ夫レ陛下祖法ニ違フヲ憚カリテ革新ノ事ヲ行ハズ。舊制ヲ株守シテ一タヒ此時會ヲ失ハ。臣竊ニ怖ラクハ長ク本朝ノ興ル期ナク。多年ナラスシテ内憂再ヒ生シテ外患之ニ伴ヒ。而シテ中國ハ之ヲ終フルニ英魯虎狼ノ節ト爲リ了ランコトヲ。伏シテ。陛下ノ

建國五條
を上げる

聖斷ヲ祈ル。

同治帝其忠悃を嘉みし。因て其策を問ふ。國藩即ち建國五條を上げる。帝之を嘉納し。且つ諭して曰く。祖法の變革は試に宗社ノ大事。朕常に宗室重臣を會して之を議すへしと。國藩又奏して曰く。希ふ所は斷陛下の一心に在るのみと。因て涕泣闕に伏するもの三日。已にして西太后の慰諭する所となり。其竟に用ゐられざるを知り。退て李鴻章に委するに直隸總督の印を以てし。請ふて南京總督の職に轉せり。

曾國藩の
人物

支那近古の偉人曾國藩が清朝に致せる勲業の大なるは。粗ば世人の聞知する所。文武の材を兼ねて識學共に高く。相に將に。行くとして通せざるはなく。朝に野に。居るとして達せざるはなし。而して其志望の遠く且宏に。造詣の遠く且つ微なる。眞に所謂大人君子として上下五千歳多く其匹を見ず。夫の其清國再造の事の若き國藩より之を觀れば。單に一部の形式に止まり。之を舉げて遽に之を費す。未だ深く國藩を知るものにあらざるなり。今左に遺書の一部を抄録して。聊か其人と爲りを窺はんとするものに示さん。

六弟を戒むる書

此書ハ道光二十二年、國藩カ實弟國華ノ屢バ類試ニ應シテ落
第シ其不遇ヲ歎シテ兄國藩ニ書セタル書ニ答ヘタルノ一節
ナリ、國藩時ニ年三十五、北京ニ禮部ニ官タリ、長髮賊ノ亂ニ先
ツコト六年、國華此時年二十左右ナリ

六弟自怨數奇。余亦深以爲然。然屈小試。輒發牢騷。吾竊笑其志之小而所
愛之不大也。君子之立君也。有民胞物與之量。有內聖外王之業。而後不忝
於父母之生。不愧乎爲天地之完人。故其爲愛也。不如舜不如周公爲愛也。
以德不修業不備爲愛也。是故頑民僵化則愛之。蠻貊猾夏則愛之。小人在位
賢才否閉則愛之。匹婦匹夫不蒙已澤則愛之。所謂悲天命而憫人窮。此君子
之所愛也。若夫一身之屈伸。一家之飢飽。世俗之榮辱得失貴賤毀譽。君子
固不暇愛而及此也。

不佞詩

不佞詩 不佞詩ト共ニ國藩晚年ノ作ナリ、當時亂離久シク續キ人心ノ日ニ凝壞
ニ赴クヲ見テ、後生ヲ醒マシ世道ヲ挽カンカ爲メニ草セルモノ、傳ヘテ
士人ノ寶ト爲セリ、
今其一ヲ節録ス、

善莫大於恕。德莫兇於妬。妬者妾婦行。瑣瑣龔比數。已拙忌人能。已塞忌
人遇。已若無事功。忌人得成務。已若無黨援。忌人得多助。勢位苟相敵。
畏信又相惡。已無奸朋望。忌人文名著。已無賢子孫。忌人後嗣裕。爭名日

會國藩が同治帝に上りたる建議の五條は左の如し。

- 第一 國都を中樞の地に遷すべし。
 - 第二 文弱の弊風を一掃して、尙武の風を興すべし。
 - 第三 軍政を益革して、陸海軍を置き兵馬の實權を中央政府に總攬すべし。
 - 第四 財政を益革して中央政府に集權すべし。
 - 第五 士を採るの法を改めて、虛を棄て實を講せしむべし。
- 此五者は、所謂根本的改革を爲し、一大革新を行ふの大綱なり。五者行はる
れば、近くは以て中興の大業を成すべく、遠くは以て宇内に雄視するに足る。
五者行はれずんば、其細目或は舉ると雖も、其枝葉或は茂ると雖も、清朝の

時弊に切
中す

命脈は遂に以て蘇すべからず。蓋し時會一たび失せば、復た爲すべきの期な
ければなり。

二三

此五大綱は一。時弊に切中して能く其綱領を總べ。後の此國を經綸するもの
取り以て法と爲すべき所なるのみならず。其當時の情態を觀。現今の實勢
を察するに於ても。亦依らざるべからざるの尺度たり。去れば此尺度に依り
て之か輕重長短を量らば、其利弊の存する所。得失の在る所を知るに於て。
必ず思ひ半に過ぐるものわらん。茲に清國が如何に其根本の朽ちたるか。如
何に其政弊の救はざるべからざるかを説述するに當り、先づ此五大綱に據り、
其實際に就きて一々之を講明せんと欲す。

〔五大綱の説明畧す〕

荷も思を亞細亞の經綸に勞し、清國の天地を憂ふるものは、曾國藩の五大
綱に對する、説明を他日の參考として、大に詳讀默慮するの價值ありと雖
も、今より回顧して、日清戰役以後、北清事件終了以來、稍や其面目を革
め、多少事体に變化ありたるを以て、當時の形勢とは幾許か其點を異せる

上下五千
載多く其
西を見ず

勳業世を
蓋ふ

功臣の天
下

と、且つ長文なる所以を以て遺憾ながら畧しぬ。(天心)

曾國藩が建議したる五條の大綱は、痛く時弊に適中すると同時に、其蓋革
變改せんと欲する所は、恰も是れ清朝の最も深く恐怖畏懼する所なるを知る
べし。蓋し自家の宗社を賭して一革新を行ひ、永く宇内に雄視するの鴻基を
開かんとするは、明主賢臣風雲相會ふの機に際して始て之を庶幾すべく。國
藩の議行はれざりしも亦已むを得ざるなり。然りと雖も上下五千載多く其西
を見ざるの偉人一旦世に出て、上に能く之に應ずるの英主を出さざれば、

適ま以て天の已に覺羅氏の徳を厭へるを見るべし。
嗚呼、勳業世を蓋ふの曾國藩が大亂初めて平ぐの機に乗じ、泣いて闕下に伏請
したる中興の偉謀は、遂に清廷の用ゆる所と爲らず。而して清朝の命脈は實
に此時を以て斷絶せり。又長髮賊戡定以後の天下は、清朝の天下にあらずし
て功臣の天下なり。清朝は此等功臣の力に頼り以て再造の業を建て、亦此等
功臣の力に頼り以て宗社を既倒に保ちたり。而して此等功臣は其懷抱する根
本的大革新の經綸を實行する能はざりしと雖も、荷も清朝の存立する限りは、

二三

之が革命を促がすに忍びず。且つ清朝の倚寄禮遇止し難きものあるを以て、進んで収捨經營の任に當り、由りて以て其枝葉を根幹已に朽つるの日に保維したり。去れば、官文、多隆阿、都興阿、羅澤南、揚岳斌、江忠源、李續賓、李續宜、塔齊布、僧格林沁、等、滿漢の諸名傑が先後戰没し、曾國藩、胡林翼が病死したる後に於ても、尙毅然として封疆の任を曠くせざるもの、左宗棠、彭玉麟、曾國荃、駱秉章、李鴻章、鮑雲、岑毓英、沈寶楨、其人の如きあり。内は民望を聚ぎ、外は國權を張り、治術兵畧並び行ひ相悖らす。以て能く魯西亞をして已に畧せる伊犁の地を還さしめ、又佛蘭西をして志を安南に還くするを得ざらしめたり。之を以て以上第一流第二流の名士が中外の重望を負ひて、各々封疆の職を守る間は、假令乾綱弛廢人心離背して朝廷は孤立せりと雖も、姦宄の乘じて以て發すべき機なく、寇敵の侵して以て入るべき隙なかりしなり。精言すれば清朝其物は威靈權力共に滅盡して殆んど遺す所なしと雖も、清國其物は纔に元勳名士の德望材力に憑りて、其形骸を存續しつゝありしなり。

ア、今や第一流の英雄即ち大人名士は、悉く遊りて隻影を留めず。而して其第三流三流に位せるものも、凋謝亡歿殆んど竭き、たゞ張之洞等の一老翁あるのみ。

難哉、亞洲の經綸、夫の清國のみにても、地を以てすれば四十萬方里、人を以てすれば四億萬、歳入を以てすれば革新後二十年にして、本部十八省より優に十六億萬圓の歳額を収むるに足り。而かも滿州、蒙古、伊犁、西藏、等の所納は是推算中に入らざるなり。夫れ此歳入を以て軍備を支持せば、陸に百二十萬以上の精兵を養ひ、海に百隻以上の堅艦を備ふる、何の難きことか之れあらん。加ふに此國人民の特質として、忍耐と節儉に富み、其事に當るや進せず。ア、此長所は實に彼等の宇内に擅にする所。誰れか此國を提けて起ち、眞個百年の經綸を弄せざるか。ア、喜馬拉の山、洞庭の湖、揚子江の流、眞に英雄の活動章乎。之を活弄するの英雄那邊に起る乎。既往は追ふべからず、將來は求むべからず、唯即今や底乎。……

靜かに亞細亞の地圖を按し來れば、其三分の二は已に歐州の屬領に附せり。

亞細亞の
特點

亞細亞は
八億の人口

ア、
 亞細亞の全面積は三百萬方里、實に全地球陸上の、三分の一を占む。亞細亞人自ら亞細亞を支配する能はざるか。亞細亞は大陸中の最大、大陸なるを以て、數多の特點を有す。而かも人にして特點の英雄起らざるか。古の英雄は去りて復た看る可からず、たゞ瓦礫的の遺骸何かある。ア。亞細亞には世界第一の高山を有す、喜馬拉最高峯なりき。亞細亞には世界第一の最低窪地を有す、裏海なりき。亞細亞には世界第一の高原を有す、西藏高原なりき。亞細亞には世界第一の大平原あり、西伯利亞、東部支那平原なりき。亞細亞には最鹹の鹹湖あり、死海なりき。亞細亞には最暖の海水あり、印度洋これなり。亞細亞には最高温の地あり、マスカットこれなり。亞細亞には最低温の地あり、北氷洋岸これなり。亞細亞には最多雨の地あり、印度、支那地方これなり。亞細亞には無雨の地あり、中央亞細亞これなり。亞細亞には世界の大宗教は、皆起原を亞細亞に發す、佛、耶、回、猶太教これなり。而かも、人口は最多數、八億を有す。這の裡に一人の亞細亞恢復の經綸を有する、絶代

林則徐の
遺言

佛蘭西の
將軍の
股肱

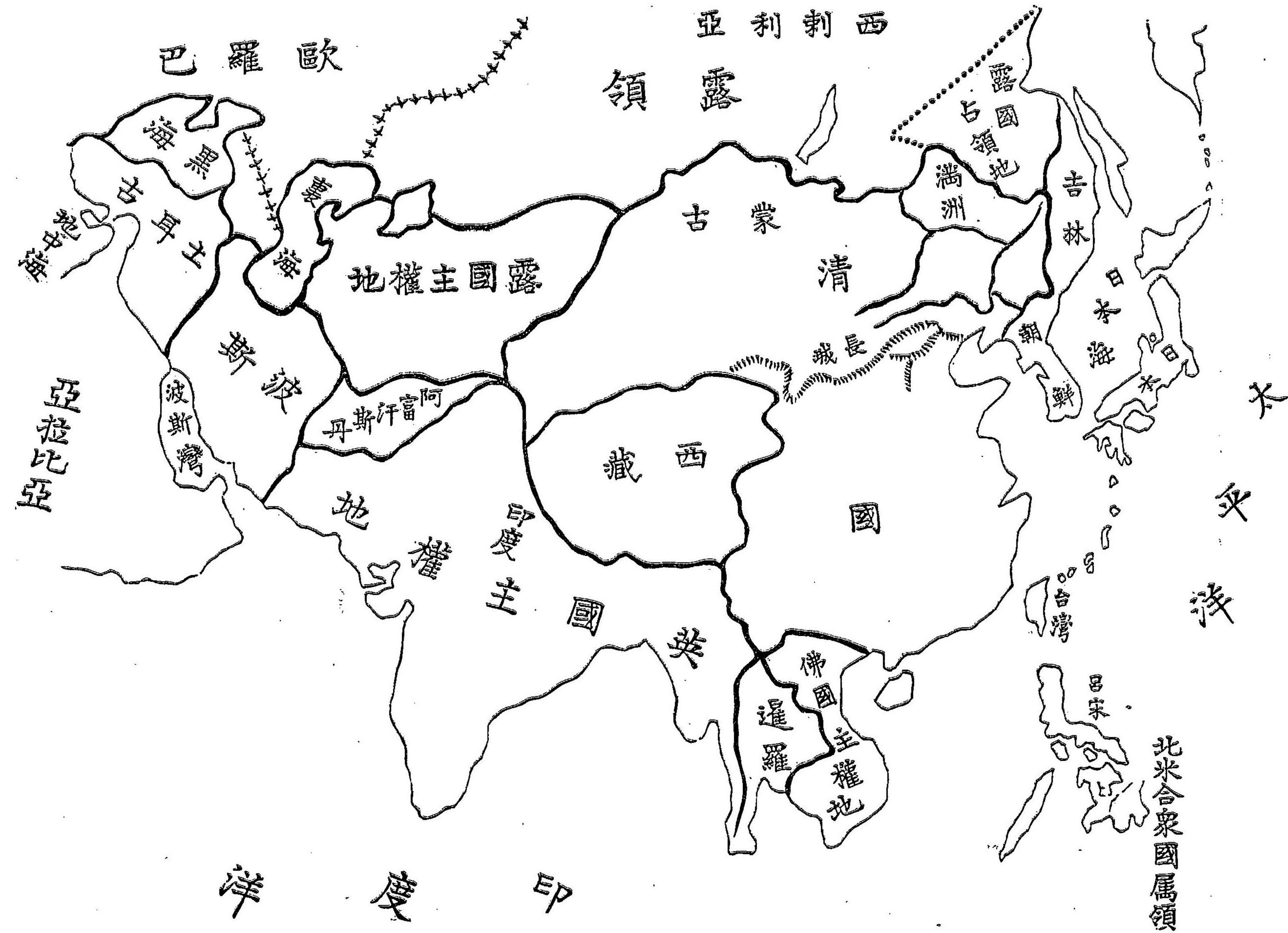
無比の大英雄なき乎。ア。……
 亦清國、四億萬中、一人の英雄なきか。彼の林則徐事館に在りて病死するに當り、遺言して云く、「英夷の如き更に畏懼するに足らず、佛夷亦然り其他知るべし、惟り後世我國の一大患を爲す者は必ず露國にあり、彼の所爲の總ては所謂口密腹劍的なり、若し假に我口其密を嘗ひれば、我腹亦其劍を受けざるべからず、願くは有爲後進の士、邦家の爲に記憶せよ」と。……
 佛蘭西の將軍の股肱、(H. Dronot) 爾龍氏、故天遊子の上海滯在中、語て曰く、「東朝鮮に接し、黄海に瀕し、南支那海を環らして前後印度に連なり、西は土耳其斯坦、北は西比利に界し、東西一千三百里に亘り、南北八百里に出入し、九十餘萬方里の面積、四億餘萬の人口を有し、亞洲全土の三一を占むる者は、實に支那となす、露國大と雖も土地の豊饒企及すべき所にあらず、英國廣と雖も、散在懸隔、元より此一大國をなせるに如かず、嗚呼支那の如きは地球上、豈得易きの國ならんや。豈得易きの國ならんや」と。……
 眞個眞面目に亞洲の大經綸を爲すの英雄、今何處に存在する乎。余威憾の餘



成吉思汗
の地圖

りに現今の形勢を圖す。たゞ其れ露領、露國主權地、英國主權地、佛國主權地、北米合衆國領の文字を視るべし。昔しは成吉思汗兵を歐洲に弄し、彼れを戒むること百雷の如し。而して今や這の地圖は。……

乎亞細亞之今現是呼嗎





◎英雄の神機

知幾其
神乎

最妙なる
神機

神機の作
用

易に曰く、「知幾其神乎。君子上交不諂。下交不瀆。其知幾乎。幾者動之微。吉之先見者也。君子見幾而作。不俟終日。善かな這個の句、美なる哉、這個の辭。英雄にあらずんば神機を弄する能はず、機機……
ア、この……神機……
唯其れ機乎。生も機、死も機、喜ぶも機、怒るも機、成敗興亡の生ずる所た
い機のみ。天下の事皆機なり、其思を神にするにあらずんば機を觀る能はず。
靈妙なる哉、神機……
神を備るすんば機を觀る能はず、機を觀る能はずんば、神を備ふるを得ず。
神が機が、機が神が、如何なるか之れ神機なるものぞ、斯く言ひ、斯く書す、
悉く神機ならざるはなし。帝王南面して國政を聽にも神機あり、大臣北面し
て其職責を盡すにも神機あり、武人千軍を指揮し萬馬を叱咤する裡にも神機
あり、貧人路頭に哀を請ふて乞食する裡にも神機あり。鳥の飛ぶも神機の妙、

神機一轉

魚の躍るも神機の妙、鐵艦の走るも、鐵車の疾するも、神機ならざるなし。然るに萬人日々之を弄して知らず、たゞ英雄之を知りて弄す、……神機一轉。

天下の讀書人にして、神機一轉の語を知らざるはなし、而して神機一轉たる眞機を知るものなし。亦眞機一轉乎。

電光石火

武に陰柔なる處あり、文に陽剛なる處あり、文武を打つて剛柔を一丸と爲す底に、電光石火、間一髪を容れざる裡に、神機を活觀せざるべからず。其一點靈光の作用は急ならずして猛急、遲ならずして靜遲の裡にあることを。

只一片英雄の神機

只一片英雄の神機。特立獨行して機を造り出す、只一片英雄の神機より出づ矣。斯の玄妙不思議の作用に至ては、却々容易に人心を以て見る能はず。唯已れを離れて他に離す、特立獨行して道心的活眼を備ふる能はずんば、眞個の眞機たる只一片英雄の神機を大觀する能はざる而已ならず、亦之を活弄自在に變轉する能はず。

道心的活

道機あるものにあらずんば、一身を宇宙に横臥なさしめ、天下を弄し萬世を

神機を觀るの英雄

外交家は最も能く神機を弄せざるべからず、談笑の裡に幾微を弄し、在席の上

神機の妙

外交家は最も能く神機を弄せざるべからず、談笑の裡に幾微を弄し、在席の上機略を決す、猶上乘として、青天に霹靂を轟かすの神機なるべからず。國際法の俗書に醜觀するもの、何んぞ雄略偉圖の神機あらんや。……神機なるものは、小成に安んじて小利を貪り、虛名に汲々、輕佻、浮薄、伶俐、纖巧、氣息奄々底の弱行者には、毛頭備はらざるものなり。神機なるものは、磊落豪放、跌宕不羈、靈性洞明にして、天真爛漫、恰かも嬰兒の如き、無邪氣なる大物に備はりて機發するものなり。神機なるものは、一身一家の小事に汲々たるものに備はらずして、志を國家の大義に存し、眼を宇内の大勢に注ぐものに備はるものなり。神機の妙機に至つては、學問にあらず、藝能にあらず、腕力にあらず、年長にあらず、只自然の天機乎。

天機

特に音樂は神機を含む

特に音樂は神機を含むものなり、其最も含むものは笛か、たゞ一個の竹にして、中虚なるのみ。這の中虚の裡に神機あり。昔しは法燈國師の漢土より來

勝遊

吹一吹

普賢色身
祖錄に謂

英雄の表

るや、居士四人を従へ來り、播州鷲靈峰に居る。一人の居士尺八を善くし、曲を霧海鏡といふ。其弟子盧竹、秘曲を稟けて諸邦を遊行しき。之れ實に虛無僧の祖か。降りて禪僧良菴天下を行脚するに、尺八一枝の外一物を携へず。入あり「如何か是れ佛法」と問へば、則ち吹一吹して去る。大徳寺の一体と友とし善し。山城宇治河邊に圓音寺を建て、常に之に住し、其宗風を漢土の普化禪師に乞ふ。而して尺八を唯一の法器と爲し、之を吹き鳴して、以て自在に妙音を如理に觀じ、普賢色身を潮音によそへ、則ち祖錄に所謂る、「明頭よりする者は明頭に打破し、暗頭よりする者は暗頭に打破し、四方八面よりする者は旋風の如くに碎破し、森羅萬象、みな空に歸し、假空を打却して眞空に入り、如理理、如理智相應す」といへる文を以て一家の宗致となす。ア、是れ寔に脱落の境界にして、禪遊の神機三昧なりき。其旨を尅すれば、たゞ眞空の一句義あるのみ。何等の輕き玲瓏の境涯ぞや。英雄は一方面に猛火炎に、現實血底の氣胸あると、同時に一半而は冷靜古淡、寂寞無爲、秋月底の裡に風韻を弄するの神機なかるべからず矣。

諸法に水
月の如し
風韻に似
て風韻に
あらず

洒落

表裏

厭世

ア、諸法に如水月のごとく、熱血の熱血は眞の熱血にあらず、冷靜の冷靜は眞の冷靜にあらず。俗樂の音樂は音樂にあらず。たゞ神機は神機の存する處に存す。詩家歌人の風韻は風韻に似て風韻にあらず、右手天下を經綸するの雄略ありて、左手風韻を神機に樂むの閑日月なかるべからず。爰に於て進んで帝王の冠を弄し、退て破衣破笠の一西行のみ。而して英雄の資格は何れにも備はり居る、ア、何等の神機妙用なるぞ。

這個の妙用洒落なくんば、眞個の英雄にあらず。進むことを知りて、退くことを知らざるは、機を知らざるものなり。進むことを知りて、退くことを知り、得失存亡の機を知るものは、其れたゞ英雄乎。

人間は進んで苦しみ、退きて安んずる處なかるべからず。表面には熱血に現實を弄し、裏面には冷靜に理想を弄せざるべからず。之を得て其神機を樂しむものは、たゞ英雄にある乎。其れ唯此の境なくんば、事業失敗の後は、徒らに厭世に陥へるの恐れあり。厭世は苟も道を知り、神機を知るもの、本領

靜中の神

道元禪師の神機

大安樂

にあらず。又厭世家は得意順境の刻に在つては、大に驕るものなり。先天の靈室に遊び、道を樂しみ、神機を知るものは、區々順逆得失、何かある。歸せんとして、其雄略英圖に失敗し、最早見込なきに於ては、驪然脱落、身を雲水に弄し、一個の尺八を携ひ、破笠破衣的、靈變の神機なかるべからず。能仁氏解憂經に説て曰く、「若欲自安安心。端居作三觀想。唯有正等覺。是真依仗處。」と、此の處より神機を弄し來れば、念々停止することなく、壽命刻々隨ひて減少す、此の身は久しく住するものに非ず。ア、最上乘の、大安樂的々底の神機。之を求めて知るは、唯英雄乎。

靜中に神機あり、動中に神機あり、打つて一丸底に亦神機あり。宋朝の寶慶二年、九月十八日、道元太白山を下りて江西に之く。日己に暮れて、闇夜、藪澤に憩ふ。虎あり突に出で、大に哮へ鋸の如き牙、鉤に似たる爪もて、向ひ來りしかば。道元携へたる杖にてこれを撥ね落したり。此時杖は宛ら龍と化して相闘ひぬ、さすがの猛虎も尾を揚てぞにげ去りける。其杖に虎齒の痕

動中の神

動靜一丸底の神機

ネルソンの神機

ネルソンの神機

あり、俗に虎齒の杖と稱ふとぞ。時に道元年二十七。ア、之れ英雄動中の神機乎。而かも彼れ道元の胸裡は極めて靜中の神機たり。後ち歸朝して、山城の深草に閑居せり。名けて安養院と稱す、此時一詩あり、左に、

生死可憐雲變更、迷途覺路夢中行、唯留一事醒猶記、深草閑居夜雨聲、

雙忘取捨思脩然、萬物同時現在前、佛法從今心既盡、身儀向後且隨緣、

之れ英雄靜中の神機乎。而かも彼れ道元の胸裡は極めて動中の神機たり。後ち越の吉祥山中に在つて、靜かに雲棲す。此裡一詩あり、

幾覺山居尤寂寞、因斯常讀法華經、專精樹下何憎愛、月色可看雨可聽、

と、此境最も動靜打成一片の神機乎。

臨終の状及び偈は余が前著虎嘯錄に載す、

陸軍に於て猛虎の勢、當るべからざるのナポレオンも、海軍に於ては、英國の驍將ネルソンの爲めに、トラファルガア岬に、西班牙同盟艦隊を盡く覆沒せしめられけり。之れ實にネルソンが捨身の神機にして、其猛烈地中海殆んど血の池と變じたり。愛すべしネルソンの氣膽的神機。

松平信綱
の探幽

爾來、池中海上、亦此の海戦を見ず。日清戦役の黄海々戦も亦神機、轉底の機戰なりき。勝つも機、敗も機、たゞ勝敗意外に神機を消弄し來れ。神機の靈機たるや、測りて量り得べきにあらず、爲さんとして爲し得べきにあらず、神機を弄する其人にして、神機たるを知らざるものなり。若し知るに於ては神機にあらずして、作爲的人機のみ。然れども機を見て機を起すの活作畧なかるべからず、之れ英雄にあらずんば能はざるか。松平信綱幕府の執權として、俗に智恵伊豆の稱あり、嘗て探幽に命じて雲龍の圖を作らしむ、墨什既に調ひ、探幽畫絹に臨み、其位置を定めんと沈思默想之を久うす。既にして腕を伸し、將に毫を下さんとす、信綱忽ち起ち「盍ぞ圖を造るの遲きや」と、大喝一聲、視を蹴り畫絹を蹂躪して去る。墨什飛散し衣袂爲に汚す、探幽激怒し「彼れ諸侯なれば我亦畫伯、何ぞ無禮の太甚しきやと、筆を投じて去らんとす。信綱の家臣百方其疎忽を謝し更めて、畫かんことを請ふ。探幽漸く之を許し、怒氣に乗じて、一氣呵成忽ち龍圖を作る、憤激の精神畫圖に現はれ、老龍雲蒸の狀、恰も活動奔騰せんとするの勢あり。信綱再び出で

平凡者流
の欲する
底にあら
ず

信玄と謙
信との神
機

來り莞爾として曰く、「卿をして怒らしめたるは全く此の佳作を得んが爲めなり」と、探幽聞て初めて其策に出でたるを覺り、流石に智恵伊豆の名に背かずとて、深く歎服す。斯の如きは特更に機を起して機を弄し、其神機を得たるものなり。之れ平凡者流の欲する底にあらず、徒らに其機を真似んとして、其機を失ふ勿れ。起すべからざるは機、逸すべからざるは機、起して逸せざる裡に活弄し去れ。武田信玄と上杉謙信とは洵に好敵手なりき、信州川中島に兵を交ゆること、前後十一年の久しきに亘る。而かも兩雄は道義を履んで、不義を履まず。只神機を活弄して、鬼神を泣かしむ。天正二年謙信能州七尾の城を落し、時恰かも九月十三日の夜、月清く空高りければ、詩歌の會を催ほし、秋一夜、鮮血淋漓の裡、天來の美神を天宮に訪ひぬ。

十七文字

月すまば猶ほ靜かなり秋の海
其神機を弄し來りて、十七文字の裡に、宇宙の眞美を弄するの點、慕ふべく

して愛すべし。余曾て能州に遊び、七尾灣に舟を浮べ、當年不識菴の吟詠を想ひ、歸るを忘るゝこと多時、時恰かも中秋望月の夜、

あら海や佐渡に横ふ天の川

と、幾たびとなく芭蕉翁の句を吟じて、謙信を吊す。更深く銀河東して、天機言ふべからず。

天機

聖哲社會

宗教社會

文學界

商業家

探險家

大經綸を爲す英雄にして、神機を靈用せざるはなかりき。聖哲社會にありては、孔子、孟子、老子、朱子、王陽明、ソクラテス、デカルト、ペーコン、カント、ヘーゲル、ショウベンハウエル、等の英備。宗教社會にありては、ゾロアストロ、釋迦、基督、達磨、馬吟默德、路愷、日蓮、親鸞、弘法、等の諸哲。文學社會に於ては司馬遷、杜子美、李太白、柳子厚、韓退之、蘇東坡、施耐菴、金聖歎、ダンテ、ミルトン、シエキスピア、シルレル、ゲーテ、ユゴー、ツルゲネーフ、等の諸大家。商業社會に於ては、陶朱、猗頓、ロスチャイルド、ゼグールド、錢屋五兵衛、等の諸豪。探險世界に於てはコロンバス、バスコード、ガマ、ムラビヨーフ、ブルゼワルスキー、張鷟、班超、

兵馬家

山田長政、間宮林藏、等の諸傑。兵事世界に於ては韓信、李光弼、武田信玄、真田幸村、ハンニバル、ウエルリントン、マルボロー、モルトケ、スコベレン、オスマンパシャ、等の諸雄。是等の創業を看よ、其神機の靈光を發するに、東西を貫穿し、由て以て一大真理を發明し、或は天下を壓倒して、乾坤を一洗し、由て以て一大教法を建設し。或は俗界を蹂躪し、萬世を震撼し、由て以て一大美妙を發揮し。或は多數を凌鏢して、一代に横行し、由て以て商權を握り。或は他を後に墮若せしめ、由て以て新疆を開拓し。或は群雄を叱咤して、一世を籠蓋し、由て以て一大功名を建て、萬世を標す。而して稀に神機を月光の水波に影する底に(チヲチヲ)と機々に弄するのみ。ア、動靜以外、電光石火の裡、神機を活弄し去れ。……

機々

●英雄の權數

權謀術數

水玉玲瓏

小人是れを知らず

權數は天下非常の

權謀術數は本來英雄の好まざる處、止を得ずして稀に之を弄するのみ。所謂、語を變じて、言はゞ、方便なり。此の方便は惡を施し、利を獨占する、自己の利欲にあらず。則ち至誠の本領より沸き出づる權數にして、毛頭の野心私利あるにあらず。其由て來る本源を深ぐれば、實に潔白清淨、水玉、玲瓏底の趣致あり。這個の清淨潔白、水玉玲瓏底の趣致ある英雄にして、始めて權謀術數を施し、天下之に伏するを得。故に權數は英雄の大事にして、其方畧を失ふに於ては、再び施す能はざる底の事あり。由て徒らに之を弄せずして、稀に用ゆるは、英雄の小事に慎み、細心密慮ある所以なりき。ア、英雄が權數を弄するも、豈容易の業にあらず。小人是を知らず、刻々之を用ぬて、已れを欺き、他を欺き、人を弄せんとして、終に己れ人に弄せらるゝとは、豈愚の至りにあらずして何ぞや。難哉、權數……又權數は天下非常の際に非ずんば、施すべきことにあらず。平常は權數を用

ゆるの要なし、平常權數を用ゆるに於ては、非常の際には其功用を爲さるなり。

權謀術數

權謀術數

昔しは曹操劉表を撃つ、表卒して子の琮荆州を擧げて、操に降る。劉備江陵に走る、操之を追ふ、備夏口に走る。操軍を江陵に進め、遂に東に下る。亮、(備に謂て曰く、請ふ、救を孫將軍に求めよ)と。亮、權に見えて之を説く、權大に悦ぶ。操、權に書を遣て曰く、『今水軍八十万衆を治めて、將軍と呉に會獵せん』と、權以て群下に示すに色を失はざるなし。張昭之を迎へんと請ふ、魯肅以て可ならずとして、權に勸めて周瑜を召さしむ。瑜至る、曰く、『請ふ數萬の精兵を得て、進んで夏口に往き、保して將軍の爲めに之を破らん』と、權刀を抜て前きの奏案を研て曰く、『諸將吏敢て操を迎へんと言ふものは、此の案と同からむ』と。遂に瑜を以て三萬人を督せしめ、備と力を并せて、操を逆へ、進んで赤壁に遇ふ。瑜が部將蓋が曰く、『操が軍方に船艦を進め、首尾相接せり、焼て走らすべきなり』と、乃ち蒙衝鬪艦十艘を取り、操荻枯柴を載せて、油を其中に灌ぎ、帷幔に畏みて、上に旌旗を建て、豫じ

火烈しく
風狂

め走舸を備へて、其尾に繋ぎ、先づ書を以て操に遣り、(詐りて降らん)と欲
すと爲す。蓋し十艘を以て最も前に著け、中江に帆を擧ぐ、餘船次を以て俱
に進む。操が軍皆指し言ふ、(蓋し降る)と、去ること二里餘、同時に火を發つ、
火烈しく風猛くして、船の往くこと箭の如し、北船を焼き盡す、煙焰天に漲
り、人馬溺焼して、死するもの甚だ衆し。瑜等輕銳を率ゐ、雷鼓して大に進
む。北軍大に壞れ、操去り還る。後ち屢く兵を權に加ふれども志を得ず。
操歎息して曰く、『子を生まば當さに孫仲謀の如くなるべし』と……………
以て孫權周瑜が神畧的權畧を見るべし。而かも操は權數を用ゐんとして破れ、
孫は之に應じて利す。ア、偉なる哉、曹操其大敗を意に介せざる底、豈英
雄の英雄たる所、たゞ是にあり。之れたゞ其れ軍畧的權數乎。○○○○英雄
が權數を弄せんとして、武斷的を示し、或は文弱を装ひ、虎に乗り猫を冠り、
其千變萬化、毛頭視察する能はず。視察し得べき權數なれば、之れ權數にし
て權數にあらず。兒を育するに正則あり變則あり。洛陽より帝都に入るに、
海上を走るあり、氣車を利するあり、山道を履むあり。由て以て考一考せば、

神畧的權

虎に乗り
猫を冠る

正直一片

權數敢て惡むべきことにあらず。請ふ看よ、聖人君子も一の英雄なれども、
暫く聖人君子として、見るときは、正直一片、毛髮の權畧なき底に見ると雖
も、其實は然らずして、大權數を自在に活弄せることを、大觀せざるべから
ず。爰に至りて權數敢て權數ならずして正道たることを、亦大觀識得せざる
べからず。英雄の權數は一身一家の經營に用ゆるにあらずして、天下國家の
經綸に用ゆるなり。看よ釋氏の方便を以て、自在底に道を説破し、無量の衆
生をして、歡喜なきしむるの活手腕。看よ孔子の其人に由て、仁を説破し、
三千の子弟、天下の王覇を動かせし靈手腕。其他基督、マホメット、弘法、
親鸞、日蓮、等の英雄は社會より、非常なる迎望禮待、信念を有する、聖人
上人の稱號ある、其人の當年事業創立の靈變的作畧、神畧的妙手腕の一大方
便、一大權數を看よ。ア、權數は小人凡客の夢にだも弄する能はざる處に
して、大英雄にのみ活弄すべきもの乎。
權數三昧を以て論ずれば、天下の事皆權數ならざるなし。豈英雄のみ權數を
用ゆるのみにあらず。商人は權數を以て物品を仕入れ、權數を以て賣却す。

看よ釋氏
看よ孔子

天下の事
皆權數な
り

權數の權
す數にあら

政宗不動
を見ざる

不動は本
來

乞食は權數を以て哀を裝ひ、權數を以て哀を請ふ。藝人は權數を以て藝を賣り、權數を以て衣食す。政治家は權數を以て政を弄し、權數を以て治む。其他千萬に通じて悉く權數ならざるなし。……

余の言ふ權數は權數の權數にあらずして、則ち至誠貫天的の方便の權數なり。之れ是を英雄の權數と謂ふ。

伊達政宗梵天丸のむかし五才の時、城下の寺に詣で、佛壇の不動明王を見て、家臣に顧み「中々に猛々敷姿なり、何と云ふものぞ」と問ふ。不動明王なる由答へ、「面は斯く猛惡なれど、心は慈悲深くして、衆生を救はせたまふ」といひけるに、政宗聞いて頷き「これこそ武將たるもの、倣ふべきものなり」と、聞くもの舌を捲きぬ。

這個、火炎々底猛烈の不動は、抑も本來何物なるか。即ち一の假裝佛にして、所謂釋迦の權數より、斯く示して衆を度し戒むるの財料たるのみ。觀世音、地藏、藥師、等、皆、方便的權數なり。之れ眞個獨歩底の英雄的權數にして、其間、一毛髮を容れざるの至誠あることを識得せざるべからず。斯の如く釋

其本源

康熙の權
數

康熙字典
等成る

して權數を解するときば、其本源自ら明白ならむか。母親が愛兒の頭上に手を下す、之れ中心彼れを惡むにあらずして、大慈愛心のあることを。名けて仁と言ひ、方便と言ひ、權數にも通ず。……

愛眞覺羅氏滿洲より支那本部に入りて、四百餘洲を提げ、北京に君臨するや。世祖福臨を経て、聖祖康熙に至りて、實に大治を極む。之れ大權數を弄して、而かも其手段の圓滿、鋒先を示さず、天下を掌上に玉弄するの手腕、却々に懼るべき點ありき。そは天下の革命を叫ぶ儒生論客をして、優遇寛待、以て高官を與へ多祿を給し、恩を賣り其言論の革命を塞ぎ、終生大著述に勞せしむ。(康熙字典等の著此時成る)

又蒙古人の慷慨を殺かん爲めには、男子成童に及ぶや、必ず僧藉に入らしめ、其先天雄猛の氣象を柔弱に化し。而して天下に令して、辨髮の制を布き、斷じて之を守らしむ。其英斷、民之を懼る。此に至りて中華の人、鞮靺の胡賊に南面九五の位置を與へ、躬ら北面して其顔色なし。ア、康熙の權數か、自然の天數乎。ア、之れ始皇の裏面的胡智に學びしならん耶。

孔子の孫に子思あり、中庸を作りて、權數を誠の一字に説破す。尋で孟子出で、孔子を祖述し、其權數揚子墨子を排し。仁義を説き性善を主張す。孟子に稍や後れて荀子出づ、其權數禮樂を主とし、性惡を唱へ、非十二子篇を作りて、當時學士の弊風を痛論す。蓋し孟荀は戰國時代儒家の泰斗たり。其後も列子出づ、列子に尋で、莊子起り、共に其權數は老子を祖述し書を著して、孔門の士を歴詆す。關尹子鶡冠子等は皆道家權數の人なり。墨子は其權數兼變説を唱へ。揚子は其權數自愛説を唱へて、各一家を爲す。法家の權數者には管仲あり、李悝あり、申不害、商鞅、韓非子、に至りて、愈々成る。又鄧析、尹文、惠施、公孫龍の徒、堅白異同、權數の辨を弄して、各家の祖となる。兵家の權數者には、孫子、吳子、を以て祖として、所謂九流百家前後踵を接して起り、各教時濟世の權數を弄せざるはなかりき。……………而して前漢には、兒寬、朱買臣、王尊、匡衡、董仲舒、あり。後漢は高鳳、王充、承宮、桓榮、郭太、侯瑾、あり。三國時代には孫敬、龐原、董遇、常林、步騭、關澤、譙固、あり。晋代には車胤、孫康、魏詠之、徐苗、王育、

范隆、劉寔、董景道、杜夷、王歎、袁宏、張華、皇甫謐、郗鑒、葛洪、范汪、あり。南朝には、陶淵明、沈約、顧歡、虞翻、江泌、丘仲孚、沈麟士、沈峻、劉峻、袁峻、あり。北朝には、楊愔、傅永、裴暉之、薛澄、樊遜、皇甫績、徐遵明、李鉉、劉晝、祖瑩、衛陽王、劉綺、朱詹、臧逢世、あり。隨には、盧思道、崔儺あり。唐朝には、李密、杜如晦、房玄齡、韓愈、蘇東坡、蘇老泉、李白、杜甫、白居易、虞世南、呂尚、陳子昂、狄仁傑、徐曠、裴休、畢誠、陽城、孔穎達、馬懷素、褚無量、王紹宗、李邕、あり。五代には、劉贊、あり。宋朝には、王安石、胡安定、周廉溪、程伊川、程明道、張橫渠、邵康節、朱晦菴、陸象山、范仲淹、歐陽修、吳奎、司馬光、石介、范純仁、張繹、杜鎬、陸佃、あり。元朝には、郝經、許衡、吳澄、張養浩、秦起宗、あり。明朝には、陳茂烈、楊維禎、劉之綸、王冕、鄒智、王鏊、あり。清朝には、本朝、沈荃、韓葵、朱彝尊、あり。是等の賢士文士は、實に支那戰國時代より、現清朝に通ずるの文士の英雄にして、皆其當年に應ずる權數を弄し來れり。而して何れの處に權數を弄せしか、活眼を放つて、詳細に點檢し去れ。眞面目

に之は基督の聖書なり、アトと歎じて読み去り読み来れば、洵に難有味もあり。而かも其實際に於ては、大權數を含むことを。之は釋迦が説法の觀音經も、香を焚て読み去り讀来れば、自ら信念力生ず。而かも其作畧に於ては、一大方便的權數なることを。支那の儒教も、亦斯の如きことなきか。天下何んぞ其れ英雄の權數多きや。

●英雄の濃情

春風騎蕩
春帶雨

輕粗浮薄、情濃かならざるものは、之れ平客凡人のみ。沈着誠實、情濃かなるものは、唯英雄にあるが。這個英雄は百萬の甲兵を殺して、猶冷觀以て情を動かさる、其猛烈剛情に反して、裏面には春風騎蕩、細雨綿々、情濃かにして、戀々其密なること『梨花一枝春帶雨』底の趣致あり、所謂玄宗皇帝の楊貴妃に於けるが如く、豊太閤の淀君に於けるが如く、奈破崙のジョセーフィンに於ける如く。姑く其情の正と不正は問題外として、多少異なる點ありて、其歸を同ふする能はざるの意あれども、其情を盡す綿々に至りては、『在天願作比翼鳥、在地願為連理枝』の密情あること、敢て斷つべからざるものありて存す。然るに其婦人に於ては、其情を一方に注かず、兩股にあることを。楊貴妃は安祿山に通じ、淀君は大野道犬に通じ、ジョセーフィンは奈破崙に對しては、初婚にあらずして再婚なること兎にかく英雄は相對方の濃薄にかゝはらず、全力を注ぐの情交濃かなる性質あることを記慮するの要

全力を注ぐ

ありき。「英雄能好色」の俗言、豈道路的空言にあらず。

ア、英雄も其本来は先天的無邪氣なる感情的の活性乎。彼の玄宗皇帝は揚貴妃の淫奔嫉妬たる一婦女たるを知らずして、長生殿裡、窓深く香積郁の底に在つて、其情交を弄し。豊太閤は聚樂邸、樹林天を覆ふの深き一閑席に在つて、淀君と痴言痴情を弄して、天下の事亦已に忘れたるが如し。奈破藩が巴里破樓の裡にジョセーフィンを訪ふて、前後無中に愛を注ぎしも。打つて一丸底に之を弄し来れば。何れも皆一時の夢刻的痴情にして、濃情と言へば濃情。ア、英雄の濃情的裏面には、即ち一の冷談てふものあることを。又濃情は婦女子に對するのみにあらずして、天下百般萬事に對して、熱血的を弄するは、是れ眞個の濃情なり。之れあるものは其れたる英雄にある乎。我邦には濃情底の英雄多く武人に出づ。頼朝、義經、平重衡、木曾義仲、平通盛、平維盛、曾我祐成、藤原藤房、尊良親王、新田義貞、楠正行、高師直、高師秋、新田義興、柴田勝家、等擧げ来れば、却々に其數多し。源頼朝、嘗て伊東祐親の家を脱れ、北條時政の家に遁る。其因は情事よりの離なりしが、

今や彼れ獨り寒衾に寐ね。孤り冷帳に眠り、一點の殘燈復た人の伴を作すなく、凄涼の中、一枕の薄福を想ふて、其孤情に堪へ得ざるの班ありき。一日人に問ふて曰く、「聞く時政に女多しと、何れが尤も美なるや」と、長は美、次は醜。醜なるものは姿、路傍の繡花の如く、美なるものは貌、上苑の名葩の如く、醜なるものは面黒に、美なるものは髮緑に、醜なるものは唇海鰓の口を開き、美なるものは眉、春山の色を掃ひ、醜と美と、雲泥の懸隔ありて、而して醜なるものは後妻の出に係る。渠頼朝すでに伊東氏に懲り、次女に通せんと欲し、書を作り、僕安達盛長に托して之を致さしむ。盛長途に在り、竊かに以謂らく、次女は誠に無雙の醜婦、此の情好終へずして、却て將來の禍を階するに足ると、更に書を作りて長女に贈る。前一夕、次女夢に在り、鳩の金函を啣みて而して來るを見、覺むるの後、之を姉に語る、姉心うきき、曰く、「吾れ當きに汝が夢を買ふべし」と、困りて一圓の盃鏡を出して、小妹に付與して曰く、「薄くその値を償ふ」と、且目書を得て、かれと終身を約し、情交日に密に、宛かも翡翠の婉戀たるが如し。名は政子、時に年まきに二十

只政子を
得たるに
あり

一なりき。……
嗚呼、誠に頼朝の覇業を掌握せしも、政子を得たるにあり、而して僅かに三代三十餘年の短日月に盛縮せしめたるも、亦政子の所爲なりき。ア、旋乾轉坤の英雄は、或るときは、天下を賂して一美人の爲めに其情を弄することある乎。

義經

壇の浦を
過ぎ

松島の一
夜

豫州義經の西討の軍に將たるや、齡僅かに二十前後の一少年のみ。而して馬を懸厓に下し、船を大風に放ち、兵を用ゆること鬼神の如し。洵に靈變の機畧、當年平氏をして、端睨する能はざらしむ。余、幾回となく壇の浦を過ぎ、人世の榮枯浮沈を歎き、心に堪ゆ能はざるものあり、そは平氏の琴を春花に彈し、笛を秋月に弄し、嬌歌緩舞底の夢は空しく瀬戸内の海水に泡消したるを以てなりき。新中納言知盛屋島の一、夜、蒼海漫として月光高く、松風颯として白露繁きはより、遙かに手を躡しては都の空を想ひ、顧みて一門の末路を敢果なみながら、其情發して、僅かに恨を秋天に訴ふ。
住馴し都の方は外所ながら

静を愛す

袖に波こす磯の松風

義經の勇敢が爲めに、平氏は其無情を恨むなれど、義經も亦濃情底の英雄なりき。かれは静を愛して満空の熱血を注げり。然るに何そや、西討の軍功を鎌倉に過費せられずして、却て窮山絶海の苦愁を弄する身となりしとは。ア、口は語を吐き、筆は字を書す。たゞ道路的のみ。英雄の濃情は宜しく英雄の濃情を以て観ざるべからず。一枕の春夢が大にして重きか、天下の大事が大にして重きか、最早、事ここに至りて、其大小輕重なし。百年の大事を擲ち來りて、佳人の紅涙に、滿身の勇氣を漂はすは、それ唯英雄にある乎。かれ義經も時忠の女に情を濃にして、簿書一筐を遺して顧みず。……情か、無情か、無情か、情か、凡客の濃情は濃情に似て、其實は情に陥り薄情なるのみ。故に一身を忘れ一家を亡ふ。英雄の情は眞個に濃にして、能く一身を忘れ能く一家を亡ひ、能く天下を弄す。禮は柔に似て、磊落は放蕩に似る。濃情と迷情とを混するなかれ。時忠の妻、師典待、
雲の上に見しに替らぬ月かげの

一枕の春
夢と天下
の大事

時忠の妻

義經傍に在り、其悲傷の情、其心曲を焼き、復た雙涙の下るを覺へず、和して以て之を慰む、

和して

都にて見しに替らぬ月かげの

明石の浦に旅ねをぞする

師典待は時忠の船を隔てし、相見るに由しなきを歎き、

ながむればぬるゝ袂に宿りけり

月よ雲井に物語せよ

時忠も同情

哀の又哀

わが思ふ人は波路を隔てつし

心幾たび浦つたふらん

哀の又哀なるもの、濃情愛にあり。

個中の消息

ア、とかく、世事は意の如くならざるこそ、本意か不意か。春天に雨多くして、秋月には雲のさいぎるあり。情もまたこゝにありて、濃其中に存す。

個中の消息を弄し去れば、神韻微妙の濃情底の戀なるものは、千萬金を積むとも、得る能はず。之を弄するの客、天下に果して幾人ぞ。

瀬鎌倉に到り、頼朝の望みに衣を整へて壇に登り、舞ひかつ歌ひ、歌ふて曰く、

よしの山みねの白雪ふみ分けて

入りにし人のあとぞ戀しき

また歌ふて曰く、

しづやしづしづの小田巻くり返し

むかしを今になすよしもかな

頼朝怒る
政子諫む

歌ふものは聲を呑み、聞くものは涙を掩ふ。頼朝色を變じて曰く、「歌舞を神前に奏するに、敢て關東の萬歳を頌せずして、妄りに亂人を戀ひ、離別の曲を歌ふ、賤婢無禮なり」と、之を諫せんと欲す。政子は濃情なり、嘗て頼朝と伊豆の山中に間關し、深く這中の消息を知るもの、諫めて曰く、「君むかし流人たるの時、妾深く恩を受け、密かに鴛鴦の盟を結ぶや、妾が父、權勢を

個中の情

憚り、爲めに之を禁じ、猛然銀河の烏橋を打破して、牛女相見るに由しなからしむ。妾が終繼の心は、能く夜雨を冒し、荆棘を踏み、遁れて君の所に到る。後ち君が義旗を樹つるに及び、妾ひとり留りて伊豆の山中に在り、滿眼の烽煙、音信全く絶へ、生か死か有か歿か、夢寐に之を疑ふ。夫妻の情まこと斯の如きもの有り、今渠れにして豫州の恩愛を忘れ、秋毫も戀ふ所なくんば禽鹿と一般、固より貞女の節に非ず、情あり中に動きて外に形はるゝは、數の免れざる所、君にして妾が當年を憐まば、焉んぞ渠れが今日を憐まざるを得んや」と、さし下りて、頼朝深く情懷を感動し、衣を簾外に推し以て額頭に充てしむ。

花落ち花開き

余、鎌倉八幡宮に遊び、當年頼朝の壯烈と、静の憐情とを起し、長嗟すること幾たび。ア、花落ち花開き、歳華の荏苒たること、已に數千有餘。貞烈の舞姫静は今何くにか在る、祠前の老樹、年々萬葉を變ずる耳。ア……平常の客は平常に際して、平常の情を弄するのみ、非常の客は非常に際して非常の情を弄す。故に其情や薄にわらずして濃なり。逆境の逆境、又逆境に

平常の情非常の情

濃情を印す

遇ふて、始めて眞個篤實なる濃情を弄するを得。順境中の人、未だ濃情を語るに足らず。酒客にあらずんば、酒味を知らず。上戸、餅を食せず。輕薄の人は一身を脩むるに亦輕薄なり。濃情の人は一身を脩むるに亦濃情なり。豈た一婦人に對するのみに、濃情の二字を用ゐん。英雄の事を爲す、只熱血的濃情を印す。小事に用ゐて餘らず大事に用ゐて猶足らずとせず。入るも濃、出るも濃。故に美人を愛するも、亦極めて眞面目的、大濃情を以て之を偶す。而して其情の濃かなるは順境にあらずして、却て逆境にあるを知らざるべからず。

平重衡と中納言の局

平重衡は一の谷の役、兄知盛と敵を東門に拒きて敗走し、莊家長の捕ふる所と爲り、鎌倉に檻送せられ、明年六月、南都の僧侶の請を以て奈良坂に斬らる。この星霜間の裡に中納言の局と其情緒の悲哀的濃情如何ぞや。ア、曉月微茫の外、横笛を城上に吹き、餘韻を悲風に托して、以て敵將の心を傷ましめ、腸を斷つる想ひあらしめしものは、あに無官の太夫教盛に非ず耶。香露鎧袖を露ほし、月明馬背に散し、櫻花の下に一宿して、以て千秋の逸話を

櫻花の下に一宿

留めしものは、あに薩摩守忠度に非ず耶。這個の消息を弄し來れば、人をし
て黯然神を傷ましむる所以にして。余は尤も三位中將平の重衡が情事を憐れ
む。

櫻町中納言成範の長女にして、呼んで中納言の局といふ、齡まさに二十一。
顔色の嬋妍、海棠の春雨に浴するが如く、姿態の輕盈、芙蓉の秋水に媚ぶる
が如く、加ふに氣韻の尤も當るべからざるものあり。彼れ重衡此の美花と贈
菊の盟を結んでより、情好日に濃かに、相思の關樞、蓮地の鴛鴦をして長へ
に兩人の綢繆を羨ましむ
平地に波を起し來りて、這の階老の縁を了るに及ばずして、天の翻り、地の
覆るに會ふ。彼れ我れの區なき、一刻に於て、一夕の歡を長ふせんことを欲
すと雖も、而かも戰慄すでに眼に逼ねく、旌旗山に滿ち、金鼓野に震ふ。重
衡遂に馬を驅りて、獨り洛中を出づ。驚風こゝに分飛し、菴鏡こゝに破碎し。
唯相思を賓雁に托し、心情を來燕に傷め、互に天の一方を望んで嘆息又嘆息
するのみ。

獨り洛中
を出づ

一書を贈
る

重衡の書

經つこと一年、重衡生田を守りて擒に就き、土肥實平の軍に囚られ。京師に
送らる。彼れの京に入るや、舊臣友時と相見、談じて中納言の局のことに及
ぶ。かれ黯然として涙の下るを覺えず、曰く、「事願ふ所は、惟た意中の人
と相見、以て無窮の別れを叙するを得ん」と、一書を裁して送る。中納言の
局書を披き之を讀むに一として傷心の語に非ざるは莫し、その畧にいふ、
野の末、山の奥にも、甲斐なき命あらば、申すことも有りなんと思ひしに、
そも叶はで、生ながら捕はれて、耻さらす事の心うき、此れも然るへき先
世の報にこそあらめ、これ我身の咎を覺るて人を怨むこと無し、さても此
世に候はんことも今明にそ争でか今一度相見奉るべき、かしこ。
猶一首の歌を添ゆ。

涙川浮名を流す身なれども

今一しほの逢せどもがな

中納言の局、面を掩ふて泣くもの、之を久ふして、僅かに返書を認む、その
畧を、

何處の浦にもましますば、自ら申す事こそ難くとも、露の命の有らんかぎり、風の便りにはどこを思ひ侍りつるに、近きあたりに坐すらん事こそ悲しけれ、誠に人のさもおはせんには、我身とても日來の歎きに打添へて、なからへんこともあり難し、誠にいかにもしてか今一度相見奉るへき、か
しこ。

亦歌一首を添ゆ。

君故にわれも浮名を流しなば

そのみくづと共にならばや

紙箋の上、涙痕の斑斑たるを認む、重衡その文情と涙痕とに和して、情緒亂れて絲の如く。さらに中納言局の父實平に一夕の別を叙せんことを請ふ。實平も亦其情を憐み、これを許す。因て營中の別館に相見を得たり。ア、……むかしは玉欄によりて明月に吟じ、紅圍を錦帳の裡に春弄し。今や身は俘囚、當年の榮華は消えて迹なく、竹床に坐し、木枕に臥し、燭影内に黯く、拆聲外に響く。ア、これ此幽景は、平人だも猶且つ忍びざる所なるに、彼れ重

衡名門の公子と、彼れ中納言の局宮中の佳人とにして、永別を此中に話す、ア、獨眠孤眠に非ずと雖も。而かも涙丸丸として落ち、布衾沾ひて水よりも冷かに、悽の悽、慘の慘、悽慘の情、舉げて他客の歎ふべからざるものあり。雙睫交らず、殘月洛西に傾くの刻、將に手を分たんとするに及び、惋惜の情、措く能はず、俱に相擁して泣く。

重衡

あふ事も露の命もろともに

今宵ばかりや限りなるらん

中納言局

限りとて立別れなば霜の身の

君よりさきに消ぬべきかな

涙を彈し、復た一語なくして別る、後ちまた相見んことを求むと雖も、實平之を許さずれば、唯消息を通じて、以て聊か幽怨の情を感むるのみ。居るこ

鎌倉に送る

と幾句。義經かれ重衡を糧して鎌倉に送る。中納言局之を聞き、悲動遂に病に臥す。一は囚に情に泣き、一は病に情に泣く、而かも互に孤床一枕東西相去り、殘燈の青色幽にして、如何んか凄凉ならざらん耶。

重衡曰く

時來りて命を傳ふ。重衡聽かざるまねして、遙かに頼朝に語りて、曰く、「重衡の此に至るは命なり、公なほ先人の徳を記すれば、請ふ速かに之れに死を賜へ」と。頼朝許さず、之を狩野宗茂に屬し、湯沐を具へ、姫千手をして浴に侍せしむ。千手はもと白川長者の女にして、年まきに二十四、稍や暮春にありと雖も、猶一段の風情ありて、人を惱殺する底の妙姿あり。頼朝因て千手をしてかれ重衡の欲する所を問はしむ。かれいふ、「佐公にして猶は先人の徳を忘れずんば願くは髪を削るを得ん」と。頼朝許さず、酒を餽り、千手及び工藤祐經を遣り、之を佐けしむ。酒冷かに夜深く、恩誓坐を同ふして、以て杯を洗ふ、個中の情懷、殆んど語と筆とに狀すべからざるものあり。こゝに於て、千手一張の琵琶を出し、輕く抑へ、慢く燃り、拂ひ復た挑む、嘈嘈

酒を餽り

千手琵琶を彈す

重衡感概す

たるものは急雨の如く、切切たるものは私語の如く、裂帛と爲り、破瓶と爲り、千調萬轉、祐經之に和して而して鼓を鼓つ、海陽江上の曲にあらずと雖も、而かも客の青衫を濕すもの更に多く、加ふるに燭影の黯く、漏聲の移つる、更一更のつくるに隨ひて、坐上一段の凄凉を添へ、頗る核下哀歌の概あり、かれ重衡俯仰感慨に堪へざるもの之を久ふして、杯を千手に屬し、慘然として曰く、「樹の陰に息ひ、一河の流に汲むも、亦多少の宿因あり、況んや卿と我と今夕こゝに相見、杯を交へ、歌を聞く、卿や幸に我が爲めに虞美人たるべし」と、千手坐ろにかれ重衡の中情を想ひ、愁面に形はれ、涙睫に

千手泣く

交はる。重衡因て詩一聯を作りて、朗吟していふ。
燭暗數行虞氏淚 夜深四面楚歌聲

頼朝亦泣く

と。頼朝微行して、耳を戸外に傾けて、聞て而して之を憐れみ、覺らず涙岑々として下る。此夕、頼朝千手をして、彼れの枕席に侍せしむ、然りと雖も、かれの心を持する、中納言の局を雲山千里の外に思ひ、復た他人の憐愛を買ふを求めず、耿耿として曉に至りて罷む。頼朝心に以謂らく、上國の公卿、

頼朝以謂らく

重衡以謂

伊王を招

頼朝嗟嘆

眼風に羞月の姿に飽くもの、千手の姿を以てするも、亦なほ心に敵せざる所あるかど、因て名姬伊王を遣り、媚態、情を慰せしむ。かれ重衡亦以謂らく、頼朝仇敵の身にして、われ末路を憐れみ佳人を贈りて、以て囚中の苦愁を慰む、情の厚き、都人も亦及ばざる所、如何んぞ、重ねて心を勞せしむべけんやと、近く伊王を招き、花月の新聞を話し、水天の閒事を談じ、紅燭を剪り、新茗を啜りて、而して相娛しむ。唯だ落花流水の歡情に至りては、絶るて之れ無くして罷む。頼朝聞て、而して嗟嘆して、左右に謂て曰く、『三位中將、黄金の肝膽、中原に指願し、白雪の名聲、上國に馳驅し、俊邁雙ひなく、忠孝ともに厚く、夙に上下萬人の瞻仰する所と爲れるは、われ其偶然に非ざるを知る、千手は美人、伊王は名姬、花の如く、月の如く、三十左右の中年を以て、一たび之れが容光に接し、情を傾け、心を動かさざるものは、幾んど今世の見るを罕にする所、かれ今生死の境にありて、敢て怖るゝ所なく、敢て亂るゝ所なし、或は疑に、或は寛に、固より嗟賞のことに屬す、かれ既に佳人の紅情と綠意を拒む、宜しく意の欲する所に一任すべしと雖も、而か

も館中をして寂寥ならしむるは不可也と。因て伊王及び千手をして更直せしむ。

南都に遷

夫妻相見

越へて明年、六月、頼朝僧侶の請ひを許し、かれを南都に遷送し、行て洛陽に到る。けだしかれの夫人を大納言の局といふ。故の五條大納言の邦綱卿の女にして、膚の浦の復、東兵の擒ふる所と爲り、今や歸りて洛中に在り、因て夫妻相見るを得たり。

憐むべき哉。彼の生田の一戰、猛然銀何の烏橋を打破して、風波滔渺、渺るに由なく、夫は陸に妻に海に、わづかの咫尺も萬里より遠ほし。况んや一東一西するに及んでは、鬱愁ひ、風悲しむこと、凡そ一年、生か死か、杳として聞知せざる所、今日幸に重ねて相見るを得たりと雖も、而かも鉛華舊に非ず。威容も亦稀に、死期は歩一步に盛まるの時に屬す、如何んか哀絶ならざらん耶。

大納言の局かれ重衡の手を取りて坐に就かしめ、先づ饌を進む、喉種りて下らず、惟だ一盞の水を乾かすのみ、因て緋衣一領を出して舊衣に換へしめ、

夫妻相擁して泣く

手自ら之を擁して泣く、かれ重衡も亦黯然たるもの頗る多く、涙に和して、

脱きかゆる衣も今は何かせん

今日を限りのかたみと思へば、

大納言の局も

たのみをく契はくちぬものといへば

後の世までも忘るべきかは

大納言の局泣いて曰く
伊王と千手
髪を剃り

と、因て涙を呑み哭して曰く、『増の浦の役、妾が身も一門兄弟と同じく魚腹の中に葬られんことを思ひしも、遙かに明君の京中に在るを聞き、春々の思、抑ゆるによしなく、一度び相見んことを憶ひ、耻を忍び、生を偷んで此に在り、何んぞ料らん、此一日を以て無窮の別れを叙せんとは、天の我が夫妻を苦しむる、何んぞ此に到る』と、かれ重衡も聞いて情に堪えず、幾かに慰諭するのみ。宛轉たるもの少時、警卒に促がされ、生別と死別とを兼ねて、而して途に上る。後ち南都の奈良坂に斬らる、ア……………大納言の局骨を収めて、紀の高野山に葬る、事、鎌倉に聞ゆ、伊王と千手と

木曾義仲

俱もに舊事を談じて、浮世の常なきを恨み、髪を剃りて尼と爲り、草廬を山中に結んで、長へに重衡の冥福を吊ひしといふ。ア……………願ふに、かれ伊王と千手とは、何等の人か。即ち路傍の花のみ、陌上の柳のみ。一時頼朝の寵眷に浴すると雖も、而かも本來は行人の攀折に一任する所、萍水の慣ひも亦必らずや多しとするなるべし。加ふるに平氏亡び、源氏興り、髯眉武骨の健兒も亦權勢に趨附するの時にありて、一俘囚の爲めに髪を剃るに至りしものは、かれ重衡の末路が如何に慘に、如何に哀に、女人の柔情を博したるに由るとはいへ、かれ重衡に於て高潔拭ふが如き秀靈の濃情、深く二女の心裡に感染せるものあるに非ずんば、焉んぞ能く得て此に到らん耶。ア、難哉、英雄の濃情。木曾義仲には巴あり、而かも其死所に於て、殆んど楚の項羽が烏江を渡らんとして、虞美人と血涙を流して、死別せしに、何んぞ、それ同じきや。かれ義仲は木曾山中に生れ、以仁王の旨を奉じ、兵を信州に起し、平氏を逐ひ、京師に入り、功を以て従四位下に叙し、征夷大將軍に任せらる、時人呼んで旭將軍といふ。後ち頼朝と隙あり、頼朝二弟をし

之を伐たしむ。義仲之と録を交へ、敗れて琵琶湖邊の粟津に到り、流矢に
中りて自刎す。彼れには巴女の他に葵女と松殿基房の女を妻とせり。女時に
年十七、義仲の粗野横暴武骨一片を以て、亦這の中情に濃ありき。かれも、
亦濃情底の英雄か。余、曾て江州に遊び、湖南の義仲寺に芭蕉翁を弔し、と
もに義仲を弔す。ア、當年項羽底の英雄、今いづくにかある。……
平通盛には小宰相あり、小宰相は西門女院の侍従にして、故刑部卿憲方の女
官を通じて、艶書に添ゆるに一音を以てす。

平通盛
小宰相

吹き送る風のために見てしより

雲間の月にも思ふかな

此時局齡甫めて十五、人のさどらんことを愧ぢ、復た答へず。通盛幾回とな
く贈りて、一も復答なし。而かも心火、炎炎ますく局に通ふ。さらに滿腔
の怨を寫し、院中の舍人に托して、局に贈らしむ。舍人、一日、局の車に忍
して、院中に赴くを見、把りて之を車中に擲つ、局心騒ぐもの少時、畧ぼ通

滿腔の怨

盛の爲す所たるを知る也。路上に捨てんか、行人の拾はんことを恐る、車中
に留めんか、従者の認めんことを恐る、復た如何ともすべきに非ざれば、私
かに紅袖の中に収め、知らざるまねして、御前に到り、閒遊時を移し、起つ
て後房に向ふ、女院その座上に一封の書あるを見、怪訝の餘、披ひて之を讀
むに、筆跡太た穢かに、墨痕太た麗かに、一幅の華箋、頗る人情の緒を動か
すに足るものあり。末段歌二首あり、

御前に聞

わが戀は細谷川の丸木橋

ふみかへされてぬる、袖かな

ふみかへす谷の浮橋浮世とぞ

思ひしよりもぬる、袖かな

と、女院、心にかれの心事を憐れみ、院中の女官を招き、告げていふ、「此、
封の書信はこれ誰れの有する所ぞ、纏綿たる情緒、深く美人の無情を怨む、
之を史乘するに古より情のため死するもの頗る多く、何んぞひとり深草の
少將にのみ限らんや、有情の人を殺し、併せて自ら身を殺すを願はず」と、

女院曰く